

公立大学
産業技術大学院大学

ADVANCED INSTITUTE OF INDUSTRIAL TECHNOLOGY

AIIT FDレポート 第 11 号

2012年2月

<http://aiit.ac.jp/>

FD レポート第 11 号の発行にあたって

学長

石島 辰太郎

産業技術大学院大学は平成22年度に情報アーキテクチャ専攻が認証評価機関による情報アーキテクチャ専攻に対する分野別評価を受けた。認証評価のプロセスやその位置づけに関して若干の異論はあるが、評価結果の中には本学の教育改善に役立つ重要な指摘があることも事実である。そこで、今回のフォーラムでは認証評価報告書でC評価を受けた項目とW評価を受けた項目に関して議論し、改善策を考えるとともに、平成24年度に予定されている創造技術専攻への分野別評価への参考とすることを目的としている。認証評価機関による指摘の最も中心的な部分は、専攻の教育プロセス全体としての整合性および連携した指導体制の問題、評価の客観性の問題に集約できると考える。こうした評価結果は創造技術専攻の評価においても参考とされる可能性は高く、したがって、こうした指摘への備えは情報アーキテクチャ専攻で改善策を実施していくことはもとより、創造技術専攻においても解決しておくべき課題である。創造技術専攻の分野別評価においては、少なくとも情報アーキテクチャ専攻と同様の指摘を受ける事がないよう備えておく必要がある。また、本学はこうした認証評価機関による分野別評価とは別に、公立大学法人として評価が義務づけられている東京都の法人評価委員会の業績評価を毎年受けているが、その中で創造技術専攻に関して受験生確保への懸念が表明されている。こうした点は、分野別評価でも指摘事項の対象となるものと考えられ、改善に向けた努力の見える化を図っておく事が必要であろう。もちろん、評価機関において良い評価を得る事を目的化することはナンセンスであるが、こうした評価が我々の高い志とは別の次元で社会に受け取られることも事実であり、軽視するわけにはいかないことも現実である。今回は、外部講師による講演等は含まれていないが、交わされた議論の中身は真剣でかつ充実したものとなっており、今後の教育体制の改善に大きく資することが期待される。

なお、平成23年度から、本学が専門職大学院として学生の教育に最大の重点を置いていることを示す制度として、The Best Professor of the Yearという受賞制度を設け、その第一回受賞者表彰を実施した。この賞が今後の本学での教育活動を改善するためのインセンティブとなることを強く希望している。

目 次

再びグローバル化について.....	1
産業技術研究科長 川田 誠一	
第1回 The Best Professor of the Year 賞授与式 並びに第10回FDフォーラム	3
2011年度前期「学生による授業評価」結果の概要報告	65
FD委員会委員 加藤 由花	
2011年度第1、2クォータ教員各自のアクションプラン	85
FDレポート編集後記.....	131
FD委員会委員長 小山 登	

再びグローバル化について

産業技術研究科長

川田 誠一

今年度の運営諮問会議諮問に関連して本学運営諮問会議実務担当者との座談会を開始したところである。今年度の諮問事項は

諮問事項Ⅰ 「専門職大学院における博士後期課程(Drコース)のあり方について」

諮問事項Ⅱ 「東日本大震災以降の技術トレンドとそこから期待される新しいスキル・コンピテンシーについて」

諮問事項Ⅲ 「本学における学位プログラム以外の教育のあり方について」

の3項目である。諮問事項に関する答申については、これから座談会や実務担当者会議の議論を経て運営諮問会議で答申が本学に示されることになっている。ここでは座談会で委員から意見があったグローバル化に関する話題について少し述べたい。過日の座談会の席上、ある企業でグローバル化について議論され、結局のところグローバル化に対応できる人材とは、必要な「語学力」、「異文化への対応力」、「当該諸国の法に詳しい」などの能力を有する人材のことであるという話題が提供された。やはり、必要な語学力抜きにグローバル化を語ることができないことが第一に挙げられたのである。

本学FD活動においても、本FDレポートにあるような認証評価を受けた様々な改善を今後進めていくわけであるが、グローバル化に対処した教育の在り方についても議論を避けるわけにはいかない。むしろ、今後のFD活動の中で議論を深めたいところである。前回のFDレポートにおいて中央教育審議会の答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～答申」(平成23年1月31日)について言及し、専門職大学院に対して、「社会経済の各分野で指導的役割を果たすとともに、国際的にも活躍できるような高度専門職業人を養成する制度創設の理念に立ち返り、教育内容の充実と質の向上」が強く望まれていることを指摘した。今回のFDレポートにおいても、敢えてこれを再掲し本学の教育・研究活動で果たすべきグローバル化の役割について教員組織一丸となって取り組む事項であることを強調したい。特に、必要な「語学力」を学生に獲得させるには、本学カリキュラムの見直しのみならず、学生の自主的な語学学習を支援する環境を提供することが必要である。本学でも英語学習のためのe-Learning教材の導入を進めているところではあるが、専門家を招いて学生の自主的な語学学習支援の在り方について議論を深めるよう、今後本学のFD活動を進めていきたい。

**第1回 The Best Professor of the Year 賞
授与式並びに第10回 F D フォーラム**

第1回 The Best Professor of the Year 賞授与式並びに 第10回（2011年度第1回）FD フォーラム

平成 23 年 8 月 2 日

産業技術大学院大学にて開催

参加者

【産業技術大学院大学】

石島 辰太郎	学長	中鉢 欣秀	准教授
川田 誠一	産業技術研究科長	越水 重臣	准教授
酒森 潔	教授	舘野 寿史	准教授
秋口 忠三	教授	清水 将吾	助教
加藤 由花	教授 F D 委員会委員	慎 祥揆	助教
小山 裕司	教授	土屋 陽介	助教
瀬戸 洋一	教授	長尾 雄行	助教
戸沢 義夫	教授	森口 聡子	助教
成田 雅彦	教授	網代 剛	助教
福田 哲夫	教授	陳 俊甫	助教
管野 善則	教授	村尾 俊幸	助教
國澤 好衛	教授		
小山 登	教授 F D 委員会委員長		
前田 充浩	教授		
村越 英樹	教授		
吉田 敏	教授		

※肩書きは FD フォーラム開催当時のものである。

■開催内容：

14：15 授与式

FD フォーラムテーマ：「平成 22 年度専門職大学院認証評価の実施結果を受けて」

14：23 あいさつ，趣旨説明：小山教授（FD 委員会委員長） 2 分

14：25 石島学長挨拶 5 分

14：30 2010 年認証評価結果の概要報告：川田研究科長 55 分

15：25 討論（報告を受けての意見交換など） 30 分

15：55 <休憩> 15 分

16：10 W(Weak)評価改善についてのディスカッション：酒森専攻長 50分
C 評価改善についての検討

17：00 アクションプランについて意見交換：酒森専攻長 32 分

17：32 閉会挨拶：FD 委員会 1 分

17：33 終了

■第1回 The Best Professor of the Year 賞授与式

小山FD委員長：それでは早速、始めたいと思います。本日はFDフォーラムの前に、今年度から設立したThe Best Professor of the Year賞の授与式をさせていただきます。皆様には以前、教授会だったと思いますが、加藤委員から選考基準等の説明があったと思いますが、それに基づいて選考した結果です。まず学長からごあいさつをいただきます。

石島学長：今、小山先生からご案内がありましたように、本学は専門職の大学院大学であり、教育に非常に力点があります。そのメインの事業である教育の部分で、学生さんのアンケート調査がベースになっているわけですが、教育の方法論も含めて努力されて、いい授業をしていただいている方々を今年から毎年表彰しようということで、The Best Professor of the Yearという称号を授与させていただくことになりました。これから第1回の授与式を行わせていただきます。

小山FD委員長：それでは、称号授与に入ります。受賞者は、情報アーキテクチャ専攻では加藤先生、創造技術専攻では越水先生です。前にお願いいたします。

石島学長：The Best Professor of the Year、加藤由花教授。貴殿は質の高い講義、わかりやすい教授方法の実現に寄与し、平成22年度の学生による授業評価において優秀な評価を受けられました。その功績をたたえ、ここに平成22年度のThe Best Professor of the Yearの称号を贈ります。平成23年7月19日、産業技術大学院大学学長、石島辰太郎。（拍手）

The Best Professor of the Year、越水重臣准教授。以下同文です。（拍手）



小山FD委員長：ここで受賞者の方にお言葉をいただきたいと思います。

加藤FD委員：このたびはこのようすばらしい賞をいただき、ありがとうございます。はえある第1回ということで、非常に思い出に残るのではないかと思います。学生による授業評価が優秀だと書いてありますが、私自身はそういう実感はあまり持っていないで、いつも悩みながら講義をしています。講義の準備も非常に大変で、いつも苦勞していますし、手ごたえがあまり感じられなくて、どうしたらいいんだろうと悩みながらやっていますが、今回、賞をいただきましたので、この名前に恥じないように今後とも精進していきたいと思います。今回はどうもありがとうございました。（拍手）

越水：このたびはこのような賞をいただきまして、本当にありがとうございます。率直に、非常にうれしく思っております。非常に優秀な学生を相手に自分が教えたいことを教えられるというのは非常に幸せなことだと、最近、つくづく感じております。この賞を励みに今後も頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。（拍手）

小山FD委員長：ありがとうございました。この賞は毎年、各専攻より1名ずつ選ぶという趣旨で進めてまいりますので、皆様方にもこの賞がもらえるようにぜひ頑張ってくださいと思います。

■第10回（2011年度第1回）FDフォーラム

テーマ「平成22年度専門職大学院認証評価の実施結果を受けて」

小山FD委員長：それでは、第10回（2011年度第1回）FDフォーラムに入らせていただきます。

今日のスケジュールは、お手元の式次第に書いてある通りです。活発な議論をしたいと思います。資料は、A3の「認証評価報告書 C評価項目一覧」と「認証評価報告書 W評価項目対応一覧」の二つです。ご確認ください。

本日のテーマは「平成22年度専門職大学院認証評価の実施結果を受けて」です。昨年、情報アーキテクチャ専攻が認証評価を受けました。また、来年は創造技術専攻が認証評価を受ける予定です。そういう意味で、特にW(Weak)評価をいただいた項目の改善案を含めて、活発な議論をしたいと思います。今回は酒森専攻長ほか、情報アーキテクチャの方々にいろいろとご協力いただいておりますが、よろしくお願いいたします。

最初に、学長よりごあいさつをいただきます。

石島学長：今年度第1回のFDフォーラムの開催に当たり、ごあいさつをさせていただきます。

専門職大学院大学は設立後5年以内に分野別評価を受けなければならないという法令があるのはご存じだと思います。この法令に従いまして、昨年度に情報アーキテクチャ専攻が分野別評価を受けたということです。

この大学は我々の理念に従って、一定の方法によってシステムチックに教育しているという自負は持っているのですが、外からの評価となりますと若干別の意味合いもあります。例えば一番大きなテーマは、学生の達成度の客観評価をどうするかということだと思います。そういうことに関して、従来型の大学院ではないがゆえにということもあると思いますが、我々にとっては不本意かもしれませんが、W評価の項目があるわけです。これは真摯に受けとめて、改善していかなければいけないと思っております。

実はつい最近、この評価とは別に、東京都の行政法人の評価委員会がありました。出席したのは私と川田研究科長です。川田研究科長から後でコメントがあるかもしれませんが、その場では、私どもの大学の教育方針及び将来目指していく方向性みたいなものは、評価委員の方々に非常に理解されました。特に情報アーキテクチャ専攻については、ある意味ではかなり高い評価をいただいております。一つは、入学倍率が年々、徐々に高くなってきているということです。そういう数値的な側面からの評価も入っているのですが、かなり良好な評価をいただいております。

ただ、その中では、情報アーキテクチャ専攻はあまり問題なさそうですが、創造技術専攻のほうはいかがですかという話がありました。今度5年目を迎えるということで、来年度には創造技術専攻が外部評価を受けることになるわけですが、そういう指摘が事前にあったということをぜひ頭に入れておいていただきたい。また、今日の議論も踏まえて、情報アーキテクチャ専攻が昨年度受けたという経験を十分に生かしていただいて、来年度には創造技術専攻も満点に近い評価がいただけるように、ぜひご協力をお願いします。

そういう意味では、今日はいつもの外部講師による講演などは入っていませんが、充実した議論をしていただけたと思います。よろしくお願いします。

2010 年認証評価結果の概要報告

小山FD委員長：ありがとうございました。それでは早速、議事に入りたいと思います。ただいま14時29分ですが、まず昨年度の認証評価結果の概要報告を川田研究科長より、約40分の予定でお願いします。その後、30分、討議をして、休憩に入りたいと思います。それでは川田先生、よろしくお願いいたします。

川田研究科長：こういう産業技術分野の専門職大学院の評価機関というものがなかなかなくて、結局、我々が情報分野で受けたのはJABEEでした。私もいろいろな外部の委員会に出ましたが、JABEEが専門職大学院の評価を出した第1号が我々です。試行期間はあったのですが、彼らにとっても我々が本当に初の評価であったということです。評価結果そのものの中にはW(Weak)評価とかC評価もあるんですけども、適合しているということで、そういうことが結構話題になっているということが最近わかりました。あちこちで「おたくが第1号で評価されて、オーケーになったんですね」という話を聞きますので、いろいろな大学が相当意識して見ているということがわかりました。

それから、先ほど学長からお話がありましたように、法人のほうの評価の中で創造技術専攻について、入学者や修了生の問題など、いろいろなことを含めてまだ問題点がありますが、いわゆる自己評価書をつくる段階で相当議論ができると思います。今日の情報アーキテクチャ専攻の評価結果などを踏まえて、創造技術専攻でも十分に議論してい

ただきたいと思います。

もう1点、確認させていただきます。皆さんは専門職大学院で教鞭をとっておられるわけですが、中央教育審議会が、最近、大学院に関する報告がいろいろと出ている中で、先生方もご存じだと思いますが、従来の大学院に対しても学位プログラムをちゃんとやりなさいと。特に修士について、教員の研究を手伝わせるようなプログラムではなく、本当に修士としての学位プログラムをちゃんとやって、修士論文を課さずにやりなさいと。そういうことを中央教育審議会が、いわゆる従来の研究型大学院に対して相当強く提言しています。ドクターコースについても学位プログラムとしてちゃんとやりなさいという提言もあわせてあり、専門職大学院のやっている試みが相当影響しているようです。

もう1点は、文部科学省のホームページで専門職大学院についての説明のページが、ここ数カ月間にアップデートされています。英語名称についても、我々も最初はgraduate schoolとはつけずに、school of何とかと書いていたのですが、文部科学省ではProfessional graduate schoolということで、専門職大学院の内容を相当細かく書いています。その中で本学がやっている試みを、どの大学がやっているとは言わずに取り上げて、こういうことをやっている大学院もありますということが結構出ています。どれを見ても、我々の大学のやっている試みが事例として挙げられているような感じがします。そういうことをご報告させていただきます。

それでは、皆さんにも既にお配りしていますが、実施計画報告です。これは今年の3月25日にJABEEから出された結果です。3月25日のちょっと前だったと思いますが、文部科学大臣にこの報告書が提出されています。

評価委員会の委員長は阿草(清滋)先生で、名古屋大学大学院の教授で、JABEEの理事です。阿草先生も本学にお見えになる予定だったのですが、震災の直後に名古屋大学は東京方面への出張を禁じていたようです。

そして、評価をするための基準ができております。その基準専門委員会には、本学の小山裕司先生が委員として参加されていまして、その後、私が委員として参加しました。

それから、今回の評価を直接担当した評価チームとしては、情報処理学会の吉澤(康文)先生、神戸情報大学院大学の吉本(富士市)先生、社団法人日本技術士会情報工学部会CPD実行委員会委員長の黒澤(兵夫)さん、佐賀大学の掛下(哲郎)先生です。この4名が実地調査も含めて、評価されました。

それでは、お手元の資料をごらんいただきながら、評価報告書についてご説明します。評価報告書をお持ちでない方は、画面に映しております。

まず、評価報告書の13ページの(1)から(4)を確認します。「(1) JABEEは本認証評価報告書を文部科学大臣に報告する」、この報告が3月にされております。「また、専攻が提出した自己評価書(本文編)とともに、本認証評価報告書をJABEEホームページで公

表する」。本学のホームページでも公表しております。

「(2) JABEEは、認証評価報告書において「適合」と判定された専攻に対し適格認定証を交付する」。本学が認定証を受け取っております。

「(3) 適格認定を受けた専攻は、認証評価報告書を受け取ってから2年以内に、「弱点(W)」と判定された項目についての改善報告書をJABEE会長宛に提出しなければならない」、これが求められているアクションです。「また、認証評価報告書を受け取ってから2年以内に、「懸念(C)」と判定された項目についての改善報告書をJABEE会長宛に提出することができる」。今日の議事ではW評価項目だけを議論するということになっていますが、Cについても別に資料を用意しています。Cについては、見解の相違もあるかもしれませんが、改善できるものは改善案を提出することがよいと考えております。これについても後ほど意見交換をしたいと思います。

「(4) JABEEは、改善報告書を検討、審議し「改善報告書検討結果」を決定する。その後、速やかに当該認定大学に通知するとともに、JABEEホームページで公表する」。

ただ、文部科学省から昨年度内に通達があり、2年以内に出すだけでなく、彼らの用語で「アフターケア報告書」を作成すること、そして、逐次、JABEEは本学に対して改善状況がどうなっているかということを知ることができ、それに対して速やかに回答しなければいけないことになっています。つまり、2年たって出す報告書をつくるまで何も作業をしなくてもいいということではなく、できるだけ速やかに改善に着手し、アフターケア報告書の提出を求められれば、それを速やかに出すことが必要です。今日は特にこれについて理解していただいて、情報アーキテクチャ専攻ではチームをつくっていただき、WとC評価項目についての改善案を月単位でアップデートしていただくのがいいかなと考えております。

それでは、まず総合的所見からご説明します。結論は、適格認定の可否は「適合」、欠陥がなかったということです。可否の判定根拠は、「日本技術者教育認定機構が定めた47項目の産業技術系専門職大学院基準のすべてにおいて、D(欠陥)と評価された項目はない」です。

評価の記述は、S(優良)、A(適合)、C(懸念)、W(弱点)、D(欠陥)です。今日、特に議論したいのはW(弱点)とC(懸念)です。では、W(弱点)とは一体何かというと、「当該項目における専攻の取り組みが、現時点では認証評価基準をほぼ満たしているが、その適合の度合いが弱く、改善を必要とする。したがって、適合の度合いを強化する何らかの対処が必要となる」ということです。C(懸念)については、「当該項目における専攻の取り組みが、現時点では認証評価基準を満たしているが、改善が望まれる。したがって、当該項目が認証評価基準への完全な適合を継続するためには、何らかの対処が望まれる」ということで、これも重要な検討事項です。A(適合)は「満たしている」、S(優良)は「特に評価に値する」ということで、これは今後も継続していけばいいと思います。

次に、全般的な長所・問題点・コメントです。まず長所としては、「学生の目指すキャリアを考慮し、ITスキル標準に沿ったキャリアモデルコースや授業科目の設計を行い、かつ実施している」「専任教員は長期に亘る高度な技術・技能を有する実務経験者が多く、多彩かつ実践的な教育を行っている」「個々の専任教員はFD(ファカルティデベロップメント)に極めて熱心に取り組み、授業の改善に務めている」「4学期制による集中的教育、社会人の利便性を考慮した時間割、多彩な履修制度、通年授業としてのPBL教育、修了生にも継続的な生涯学習を可能とする制度、などの特色ある教育制度を実施している」「実務に明るく優れた実践経験を持つ教員陣、理想に近い情報機器設備、十分なスペースと財源、都心という恵まれた立地条件、等々、専門職大学院の教育環境として欠けるものは見あたらない」。「自ら学費を支払っている社会人学生が90%を占めており、学生の学習意欲が高い」。現時点では、両専攻を合わせると75%が社会人ですが、情報アーキテクチャ専攻では90%以上、95%近くですので、90%という表現になっています。

次に問題点、ここからが検討課題です。「専攻が設定した学習・教育目標において、修了生が身につけている知識・スキルの記述に関する具体性が不足している」。知識・スキルを書いているのですが、その具体性が不足しているということです。

「学習・教育目標と個々の科目の間の関連が明確でなく、一部には不整合も見られる」。これも後ほど細かく見たいと思います。関連ということについてだけコメントしますと、カリキュラムという表現がありますけれども、社会人のための大学院教育のプログラムの組み方というスライドを私のほうで作り、皆さんに配付しており、実際にごらんいただいていると思います。基本的には全体の教育目標があって、個々の教員の授業科目が全体のカリキュラムの中でどういう位置づけにあるかということが、個々の授業科目の設計において重要なのですが、その関連が不十分という見方をされているようです。

「多様な学生の目標達成度を専攻が確認・指導する仕組みがなく、目標として掲げた学習・教育目標を達成したことが確認されていない」。評価した教員が学生のインタビューをしています。この大学にはさまざまな年齢層や職業の学生が入ってきています。入学時に入学試験はあるんですけれども、いろいろなレベルの学生が入ってきているわけです。そうすると、一人一人の学習目標とか、アウトカムも含めて、本来、達成度は違うはずなのに、それをちゃんと確認していない。また、確認できていないから、そういう意味での指導ができていないのではないかと。それについては我々としてもいろいろな考え方があるのですが、そういう判断をされています。

「シラバスに不適切な点が散見される(成績評価法が適切でない、必要な授業時間に達していない、など)」。これは皆さんにメール等でご案内していますように、15回の授業プラス修了試験ということで、試験を含めれば16回でなければいけないのですが、シラ

バスの中には明らかにそれより少ない表現がある。また、出席というのは点数にならない。要は、試験や授業中のレポートの評価など、いろいろなことがあるのですが、出席点というものも書かれてあったりして、それは不適切だということです。「成績評価法が適切でない」とは、出席点が入っていたということです。「必要な授業時間に達していない」とは、15回プラス試験になっていなかった例があるということです。

「実地調査時に必要とされる根拠資料の準備が不十分であった」、これについては相当現場でやりとりしましたが、全教員のPBLの内容についての資料が閲覧できるような形になっていなかった。また、当日、電子的に見ることになっているのですが、準備不足もあったと思いますけれども、デモに時間がかかってしまった。「これが原因となり、認証評価報告書(案)での資料不足の指摘や低評価を受け、さらに意見申立時点での大量の根拠資料提出などの望ましくない事態を招いた」、そういう資料を出せとは言われていなかったということで、その場で準備したのですが、今ごろこんなに大量に出されても読めるわけがないとか、ちゃんと読みますとか、委員の中にも混乱があって、最終的にJABEEからは「そのような事態を避けるためにも、根拠資料の確実な収集と次回の認証評価に向けた十分な準備が必要である」と指摘されました。

これについては、創造技術専攻の先生方にこの経験を十分に引き継いでいただきたい。資料を十分にそろえ、当日に何ら指摘されないような状況をつくる必要があるということです。これは認証評価の担当教員だけでできる代物ではありません。教員の数は少ないですので、全員で協力して実施していただきたい。情報アーキテクチャ専攻については、恐らく一部の教員に負荷が集中して、資料収集で問題があったと感じています。実際には違うということであれば意見をいただきたいのですが、資料をそろえるには相当時間がかかります。一度こういう指摘を受けていますので、次にはこういうことがないようにしたいと考えております。

ここまででご質問がありましたら、お願いします。

小山FD委員長：では、今までの説明で疑問点やご質問がありましたら、どうぞ。

加藤FD委員：今回、情報アーキテクチャ専攻はJABEEで受けましたが、創造技術専攻もJABEEで受けることが決まっているのでしょうか。

石島学長：認証評価機関がJABEEしかないんですよ。

加藤FD委員：では、ほぼ同じような形で(受けることになるのでしょうか)。

川田研究科長：全く同等になると思います。基準専門委員会には小山先生の後を受けて私が委

員として入っていきまして、そこでは我々の経験を言う機会がありますが、大きな改変はないと思います。

加藤FD委員：ありがとうございます。

瀬戸：47の適合性のための基準があるということですが、適合性にはもう一つドキュメントがあります。code of best practice、つまり実施基準、実施ガイダンスみたいなものがあわせてあるのですが、今回の評価の場合、そういうものはあったのでしょうか。我々教員はベストと思われることをやっているつもりですが、客観的にはいろいろな問題点もあり、何がベストなのかということとはわからない状態です。一般的な国際標準では、適合性の基準にあわせて、code of best practice、実施規範みたいなものがあるのですが、今回はそういうものはないのでしょうか。

川田研究科長：今回は、まず基準というものがあります。私はベストプラクティスのようなものは見ていないのですが、小山裕司先生はいかがですか。

小山(裕)：瀬戸先生がおっしゃるようなものはないですね。評価報告書を書くための手引きと、評価する側がどういう基準で評価するかという手引きはあります。ただ、それにはあいまいなところがたくさんあります。これから5年間かけて何がベストかということ積み上げていく形になります。今の段階では、ないというのが答えになるかと思います。

実際に会議では、効率よく報告書を作成するため、もっとしっかりとした評価基準に相当するものはないのかと聞いたのですが、今のところはない、これから積み上げて決めていきたいと思いますということでした。

川田研究科長：要は、ルールを明確にしてくれないと困るという話だと思います。我々にもそういう感覚はありました。資料の不備についても、どの資料をどこまで用意すればいいかについてお互いの合意ができていなくて、我々としては十分に準備したつもりではあったんですね。ただ、全部のプロジェクトについて、例えば冊子ベース、ドキュメントベースで完璧に準備できていたかということ、その当日には用意されていなかったことは間違いありません。

瀬戸：今後は整備されていくんでしょうね。

川田研究科長：そうですね。

酒森：JABEEでは専門職大学院をやるのは初めてということですが、一般の大学はやっているんですね。うちの大学は、ほかの大きな大学と比べて科目数はそんなにないと思いますが、資料をそろえるというのはJABEEの基準ですよね。よそでもそういうことをやっているのでしょうか。

川田研究科長：JABEE認定というものがありますよね。JABEEとして学校を認定する。それはそれぞれの学会で分野別にいろいろとされていますので、特に問題があるという話は聞いたことはありません。今回の評価は、通常のJABEEの認定とはちょっと違うんですね。

石島学長：JABEEのさまざまな基準や規定は、アメリカのABETのものをそのまま翻訳して使っているようなところもかなりあり、かなり成熟したものが用意されています。ところが、それはいわば学部レベルぐらいのものを対象にしている、大学院となると、研究型の大学院などはJABEEの認証、つまりABETの認証にはそぐわない。私も明確には知りませんが、多分、アメリカにおいてもABET認証は大学院には適用されないと思います。

つまり、同じ機関が違う仕事をやることになってしまった。日本の法規が専門職大学院に対する認証評価を要求するというつくりにしてしまったので、それを実務として機関を探したんですね。最初は東京都でつくろうと思ったのですが、さすがにお客さんが少な過ぎてペイしないということで、既存の組織が受けることになったわけです。最初は情報処理学会という話もあったのですが、そこでは情報系しか受けられない。ここには創造技術専攻もありましたので、文部科学省が産業技術分野を新しくつくり、その認証評価機関として既存のJABEEが受けることになったという経緯のようです。

川田研究科長：よろしいでしょうか。——それでは、時間的なこともありますので次に進めたいと思います。

全般的な長所・問題点・コメントの続きで、コメントです。「個々の教員の教育改善活動は積極的であるが、教育プログラムとしての整合性の向上および、教員集団としての協力体制の強化を図ることで、国際的にも通用する教育の質的保証を推進することを期待したい」「学習・教育目標の設定、カリキュラム設計、教育の実施、教育点検、継続的改善から構成されるPDCAサイクルの実質化に向けた取組の強化が期待される」。教育の分野にPDCAサイクルを持ち込んだのはABETのようで、ある時期にそういう議論がされています。今のはやりで、どの大学でもPDCAサイクルということを言っていますが、いろいろな意見があります。そういうことだけを申し上げて、次に行きます。

ここからが評価項目についてのご説明です。お手元には、特にW評価とC評価の項目だけを抜粋し、「取組状況と今後の対応(案)」ということで、今日の後半の議論のたたき

台となるような資料を用意していますが、ここではまず根拠・指摘事項だけをご説明します。

まず「基準1：専攻の使命・目的および学習・教育目標の設定と公開」です。これは総合的にC評価となっています。1(2)がW評価となっています。その評価項目としては、「専攻の使命・目的に沿って高度な専門職業人を育成するために、学生が課程修了時に保有しているべき知識・能力を、社会の要請を反映させつつ、学習・教育目標として明確に設定しており、学生および教員に周知していること。その知識・能力には、下記の(i)～(vi)が含まれていること」ということで、読み上げませんが、そこに並べられています。

それがなぜW評価だったかということです。「1. 学習・教育目標として、(a)情報アーキテクトに必要とされる知識・スキルの修得、および、(b)情報アーキテクトに必要な業務遂行能力(コンピテンシー)の修得が挙げられている。このうち、学習・教育目標(b)については、3つのメタコンピテンシーおよび7つのコアコンピテンシーにより、その内容が具体的に示されている。しかし、学習・教育目標(a)については以下の問題があるため改善が必要である」ということで、2項目の問題点が指摘されています。

一つ目は、「「情報アーキテクト」は経済産業省ITスキル標準における職種「ITアーキテクト」と混同しやすいが、ITアーキテクトよりもはるかに広い職種をカバーする概念である。そのため、「情報アーキテクトに必要とされる知識・スキル」も幅広いものであるが、その内容および水準が具体的に示されていない。ITスキル標準では職種およびレベルごとにスキル領域、スキル熟達度、知識項目が示されているが、これと比較しても記述の具体性が不足している」。

二つ目は、「「情報アーキテクト」は広い範囲の職種をカバーしているが、各学生は、これに含まれるいずれかの職種について学習・教育目標(a)および(b)を達成することを求められていると判断できる。この点を踏まえた学習・教育目標(a)の具体化が求められる」。

要は、学習・教育目標(a)と(b)の項目について、具体的でないという指摘です。

「2. 以下に示す項目2-1～2-3については、指摘の趣旨に沿った改善が必要である。

2-1. 自己評価書(本文編) p.10～11において、(a)情報アーキテクトに必要とされる知識・スキルについてはITスキル標準レベル4(他の技術者を指導できるレベル)を、(b)情報アーキテクトに必要な業務遂行能力については、「システムのライフサイクル全体に関するビジョンに基づくシステム設計が可能になる」レベルをそれぞれ設定している。これらは高度なレベルであるが、「大学院案内」等では「学生は自らの専門領域に高度な知識とノウハウを備えつつ、他の領域に対しても一定レベル以上の知識を備えたプロフェッショナルとなることを期待されています」としか表現されておらず、修了時点における知識・能力の水準が明確に設定されているとは言えない。そのため、水準の

設定を具体化する必要がある。

2-2. 大学院案内(補足版)にはキャリアモデルコース毎に修得可能な知識項目の充足率が示されているが、自己評価書や平成22年度のシラバスに掲載されているキャリアモデルコースとは一致していない。また、知識項目の充足率は基準が求めている「学生が課程修了時に保有しているべき知識・能力の水準」を記述したものとは評価できない。

2-3. 大学院案内(補足版)に示されているレーダーチャートには、以下に示す問題がある。(1)6つのコースのほとんどでコンサルタントおよびITアーキテクトの知識項目をほとんど充足するとしているが、キャリアモデルコースの推奨科目と比較すると、対応する科目が含まれていないコースが多く見られる(例:ITアーキテクトの知識項目は情報アーキテクチャ特論Ⅰ～Ⅲで教育されているが、プロジェクト・マネジメントコース等の推奨科目には含まれていない)。(2)セキュリティコース、ネットワークコース、データベースコースはITスペシャリストに含まれるが、レーダーチャートではそのような位置づけになっていない。(3)ソフトウェア開発コースがアプリケーションスペシャリストに対応するとしているが、推奨科目と対応していない」。

そして、「3. 学習・教育目標は「大学院案内」やホームページ等を通じて学生および教員に周知されている」「4. 学習・教育目標はITスキル標準や共通キャリア・スキルフレームワークを参照して設定されており、社会の要請を反映している」。3番と4番は(A)となっていますが、これは問題ない、W評価ではないということです。これは後ほど議論していただきたいのですが、JABEEとしては、学生は何を獲得するのか、どのレベルで獲得するのか、どういう内容かということを書いてくれということのようです。これは大学院教育とは何かという議論とも絡みますけれども、こういう指摘を受けているということです。

次に、「基準2：学生受け入れ方法」です。これも全体的にC評価となっています。評価項目は、「学習・教育目標を達成するために必要な能力を持った学生を入学(編入学・転入学を含む)させるため、アドミッションポリシーを明確に設定しており、学内外に公開していること。それを選抜の方法等に反映させて、公正・適切に実施していること」です。これについては、ちゃんと出しているんです。ですから、根拠・指摘事項の前半部分を見ていただくと、アドミッションポリシーについてはA評価がついています。

ただ、後半のパラグラフ、「本専攻では極めて多様な学生を受け入れているため」ということで、「極めて」という修飾語があります。「学生の能力にバラツキが大きい。そのため、学習・教育目標を達成するために必要な能力を持った学生を入学させるために、プレスクール等による入学前指導の重要性が高い」、我々はプレスクールをやっているわけです。「しかしながら、プレスクール等への参加は学生の自主性に任されており、出欠の確認も行っていないため、入学時に学生が必要な能力を持っていることを専攻は確認できていない。このため、個別の学生のフォローアップおよび指導を行う仕組みを

整備するなどの改善が望まれる。特に、入学試験の成績が下位の合格者に対しては、入学後の学習に支障が生じないよう、確実なフォローアップを行うことが望まれる」ということで、C評価となっています。

これについても、出欠をちゃんととらなかったことは問題があるかもしれないけれども、かなりの学生が受けたことは教員が確認しています。40人ぐらい受けていましたということですが、その数字に根拠(エビデンス)がなければ評価できないということで、C評価となったわけです。もう一つは、そういうことを入学後に指導に反映させていることのエビデンスがないということです。

こちらが「それについてはこういうことをしています」と言っただけでは、認めないという対応をとります。「出席者が多かった」と言うだけでなく、そのときの出席者名簿を出しなさいということです。

次に、「基準3：教育方法」です。これは全体でC評価です。まず3(1)ですが、評価項目は「学生に学習・教育目標を達成させるために、カリキュラムを体系的に設計しており、当該専攻に関わる学生および教員に開示していること」です。根拠・指摘事項に三つのパラグラフがありますが、最初の二つはA評価となっています。ですから、内容も悪くないし、開示もされているということです。

ところが1点だけ、倫理なんです。創造技術専攻では、技術倫理という授業科目を開設しています。ところが情報アーキテクチャ専攻では、明示的に倫理という授業科目はないんですね。職業倫理の理解、規範を守り職務を果たす能力と態度を養うために、複数の科目が設定されていると書いてあるけれども、明示的に合致するのは情報社会特論だけで、倫理を教えていないじゃないかということです。シラバスではあちこちに倫理ということに触れているのですが、体系性がないとか、ちゃんと学生に修得させていないということで、C評価になっています。これも厳しくて、これだけで総合的にC評価をつけるのかという議論もありました。

次に、3(2)です。評価項目は、「カリキュラムでは、実践教育を充実させるために、講義、討論、演習、PBL、インターンシップ等、適切な教育手法や授業形態を採用し、各科目と学習・教育目標との対応関係を明確に示していること」です。これについては二つのパラグラフがあり、最初のほうはS評価で、我々のカリキュラムは非常にいいと評価されています。ただ、「これに対して、1年次に開講される各科目は、学習・教育目標(a)に対応づけられている。しかし、学習・教育目標(a)の具体性が低いと、各科目の位置づけが明確でない」、これは先ほどW評価をつけられたところです。「7種類のキャリアモデルコースによって各科目の位置付けをある程度は推測できるものの、これを明確化・具体化することが望まれる」。

これについては、情報アーキテクチャ専攻では運営諮問会議の提言を受けて、カリキュラム充実に努めています。この大学の規模からすれば、相当な講義を開講していま

す。ところが、その体系性や焦点などが逆にわかりづらくなっているという指摘です。以前、酒森先生にも、次のカリキュラムを考えるとときにはもうちょっと整理していただきたいという話をしましたが、それは大体このあたりです。

次に、3(3)です。これはW評価です。評価項目は、時間の関係で読み上げるのは省略しますが、「カリキュラム設計に基づいて授業に関する授業計画書(シラバス)を作成し」ということです。まず、シラバスは公開されているのでA評価です。ただ、先ほど総合評価のところでお話しましたが、成績評価基準が明確でない。また、出席点のように履修生が身につけた能力とは無関係な評価基準が含まれている。また、独立で採点されたものを足し算するのは構わないのですが、何かができていなかったときに、かわりにこちらで点数がつけられる。要は、かさ上げする、げたを履かせるという表現でしょうか。そういう表現を評価委員が使いまして、げたを履かせるような評価方法になっているのではないかと指摘されました。

あとシラバスについては、本来、講義は試験で評価することになっており、レポート試験というものも当然あるわけですが、多くの科目が通常の筆記試験ではなくレポートによる成績判定を行っている。「提示されたレポートは採点結果が示されたものの、設問や採点基準等が提示されていないケースが多く、適切な成績評価が実施されているか否かを確認できなかった」。

従前から先生方をお願いしていますが、本来、講義は試験で評価するというのが、文部科学省の大学の基準に書かれてあるのですが、レポート評価の場合は相当慎重にする必要があります。試験問題をつくるのが面倒でレポートをやっているのではないとか、レポート相互評価でも単に丸をつけて90点とか書いているということがあるのではないかと指摘によって、W評価となっています。

4はC評価ですが、これはPBLについての資料が足りなかったということです。5は、「『個別の学習・教育目標に対する達成度評価を行っている科目は無い』と明言しており、水準判定以外に、学習・教育目標の達成度評価を行う仕組みが存在しない」ということです。自己評価書に「個別の学習・教育目標に対する達成度評価を行っている科目は無い」と書いていますから、そういうものが必要ではないかという指摘です。これも後で議論していただければと思います。

確かにPBLについても、「(1)各クォーターにおける評価(素点)では、担当教員による点数のみ示されており、評価理由が説明されていないケースが散見された。(2)全学生のセルフアセスメント資料を集積しているのは評価に値するが、これを成績評価や学生指導にどのように活用しているかの説明が不足している」ということで、システムは評価しているけれども、それをちゃんと活用して、明示的にわかる形で論理的に評価をつけているところが見られないということです。

次に3(4)です。評価項目は、「学習・教育目標に対する学生自身による達成度の継

続的な点検や、授業等での学生の理解を助け、勉強意欲を増進し、学生の要望にも対応できる仕組みの構築、学生および教員への仕組みの開示、およびその仕組みに従った活動の実施に努めていること」です。ここは三つの項目に分かれており、1番目はA評価です。ITSS-DSによるITスキル診断はやっていますよね。また成績書配布などを通じて、学生が継続点検が行えるような仕組みがある。それから、「KPH制度、モデルコースの提示、学生による授業評価等の制度を整備している。特に、学生による授業評価の結果は教授会でも配布され、授業担当教員が学生に対するフィードバックを行う仕組みが整備されている」。これはFD活動も含めて、全体的にA評価です。

ただ、今回の評価者は、「極めて多様なバックグラウンドを持った学生を受け入れている」ということを問題としたようです。「ITSS-DSによる診断結果を参照しても学生間の能力のばらつきが極めて大きい。入学試験合格者に対してプレスクールや科目等履修生制度を活用した授業の事前受講を推奨しているが、基本的に学生の自主性に依存した仕組みであることから、入学試験の成績に応じた個別対応を行うことが望まれる。また、1年次に開講される専門科目等は全て選択科目であることから、学生の適性や希望に応じたきめ細かな支援を組織的に行うことが望まれる。これを通じて、修了時点での学生の能力保証を促進することもでき、学習・教育目標の達成にも寄与することが期待される」。大学院教育でこういうことを縛るのかということについて考え方の違いもあり、そういう意見も交換したのですが、やはり彼らは、明確に学生に応じて、野放しにはせずにやるようなことが指摘されています。

3番目は、「当該専攻のカリキュラムはITスキル標準に基づいたものであることから、情報処理技術者試験との関連が強く、学生のニーズも高い。そのため、学生が自主的に勉強会を開催し、意欲のある教員が個人的に勉強会を指導しているが、このような取り組みは専攻として組織的に行うことが望まれる」。これについて我々が組織的にしていないからC評価になったということです。

次に3(7)、W評価です。評価項目は、「一年間の授業を行う期間は、定期試験等の期間を含め、35週にわたることを原則とするとともに、各授業科目の授業は、原則として10週または15週にわたる期間を単位としたものとなっていること」。後半もありますけれども、学生向けに夜と土曜日にやっているということについてはA評価です。W評価は、「15回目の授業時に定期試験を行っている科目が多く見られた」ということです。ここは下手をすると、設置基準を満たしていないので不適合だと言われかねないところです。今後、基準に従っていろいろとやっていくときには、教員が自覚して絶対にこういうことはしない。また、シラバスのチェック等も明確にして、こういうことが書かれているシラバスは載せない。ここははっきりしなければいけないということです。

次に、「基準4：教育組織」です。これについてはA評価です。S評価とかA評価といういい話は、後で読んでおいてください。

4 (14)がC評価です。評価項目は、「カリキュラムに設定された科目間の連携を密にし、教育効果を上げ、改善するための教員間連絡ネットワーク組織があり、それに従って活動を実施し、有効に機能していること」です。二つのパラグラフがあります。PBLに関しては、PBL委員会やPBL成績判定会議、あるいは非常勤講師15名との教育関連のネットワークについては明確にレベル調整を行っているということで、A評価です。

C評価を受けたのは、「すべての専任教員が参加する専攻会議が毎月開催されている。この会議では、教育システム全般を網羅し議論する場であることが自己評価書(本文編)p.52では説明されている。しかし、各科目の教育内容は担当教員がほぼ任意に決定する仕組みになっており、教員相互のチェックも限定的である。また、シラバスは教務学生委員会の審議を経るとしているが、それを確認できる根拠資料が提示されておらず、シラバス自体にも」、幾つか基準があるのですが、指摘したような不備——先ほど言いました15回とか出席点などの問題がすり抜けているじゃないかと。教務学生委員会をやっているのであれば、そんな漏れがあるはずがないだろうということです。

「そのため、関連する科目間の連携を密にし、教育プログラム全体やコースとしての教育効果を上げ、改善する教員間の連絡ネットワーク組織が実質的に機能しているとは言えないため、改善が望まれる」ということです。

これは二つあります。一つは、ちゃんとやっているところを見せるということでは、まだ資料が不十分であったという点です。もう1点は、シラバスを提示したときに、言われてもしようがない不備があったということです。シラバス1個で何か所もC評価とかW評価になっています。

ただ、カリキュラムについては、先ほど全体のところでご説明しましたように、情報アーキテクチャ専攻がどういう教育目的を持っているのか、あるいは幾つかコースがあるとしたら、その教育目的の中でなぜこのコースがあって、そのコースではどういうことを教えるのかということが明確になって、その中でそれぞれの教員の行う授業科目が体系的に位置づけられていることが求められているということです。教員が勝手に授業科目を決めており、全体では調整していないと見られるのは、どこに問題があったかということを議論していただければと思います。

次に、「基準5：教育環境」です。これは我々からすれば、S評価とは言わないまでもA評価かなというところですが、5(8)だけがC評価となっています。この評価項目は、「学生の勉学意欲を増進、支援し、履修に専念できるための教育環境面での支援、助言や、学生の要望にも配慮するシステムがあり、その仕組みを当該専攻に関わる学生および教員に開示していること。また、それに従って活動を実施し、有効に機能していること。また、通信教育を行う場合には、そのための学習支援、教育相談が適切に行われていること」です。

これについては後半のパラグラフ、「しかし、PBL等において、学生にどのような指

導・助言が行われたかを示す根拠資料が提示されなかった」、これが一番の問題でした。「多様な背景を持ち、ITSSレベルも様々な学生を対象とした履修支援を行うためには、学生の能力、修学状況、適性、希望等を個別に把握して適切に指導・助言する仕組みを実効的に運用する必要があると判断されるため、改善が望まれる」。これについては、我々としては指導教員、主担当1名、副担当2名を設置してやっており、十分にできているという説明はしたのですが、要はエビデンスがないということです。

「基準6：学習・教育目標の達成」はA評価です。

「基準7：教育改善」については、C評価です。7(1)がW評価です。評価項目は、「当該専攻は教育システムが基準1～6を満たしているかを点検・評価する仕組みを有すること」です。「当該専攻には教育システムを点検・評価する仕組みとして、運営諮問会議、FD委員会、東京都地方独立行政法人評価委員会、認証評価検討委員会、などが設置されている。これらの存在と活動実績は自己評価書(本文編) p.74-78に説明されているとおり、継続的かつ組織的な取り組みとなっている。これらの委員会以外にも、自己点検・評価委員会、教育研究審議会、などが設置されている」。

ところが、そんなに委員会をやっているのに、「15回目の授業で試験を行っているため、必要な授業時間に達していない事例や、成績評価基準が明記されていない事例が見られた」ということで、すり抜けているじゃないかと。また、「シラバスに従って教育および成績評価が実施されていることを示すための講義資料(教科書、配布資料等)が蓄積されていなかった。成績資料(学生が提出したレポート、成績表等)は蓄積されていたが、レポートやPBL成果物等の評価基準が不明確なものがほとんどだった」。

結局、先ほどから同じ言葉がすべてのところで使われています。一つでも漏れがあったら、そんなに委員会があっても機能していないじゃないかという指摘になる。

次に7(4)、これもW評価です。評価項目は、「定期的な点検・評価の結果に基づき、教育システムを継続的に改善する仕組みがあり、有効な活動の実施に努めていること」です。これについても、FD委員会でアクションプランを作成しているとか、情報科学特論を新設したとか、就職支援策の強化ということが挙げられているのですが、「運営諮問会議からは、(1)学生の学習効果・実力判定等の評価方法を検討されたい、(2)PBL教育における多目的評価方法等について検討されたい、(3)修了生の追跡調査の実施と教育へのフィードバック等の課題が指摘されている」。課題が指摘されているからW判定というのは、我々としてもよくわからないのですが。

「また、本認証評価を通じて、以下に示す問題点が指摘された。(1)専攻が設定した学習・教育目標において、修了生が身につけている知識・スキルの記述に関する具体性が不足している」、これも最初に出てきました。「(2)学習・教育目標と個々の科目間の関連が明確でなく、一部には不整合も見られる」、要は、個々の教員がやっている授業科目が全体の中でどういう体系にあるか。「(3)多様な学生の目標達成度を専攻が確認・

指導する仕組みがなく、目標として掲げた学習・教育目標を達成したことが確認されていない」。それから何度も出ていますように、「(4)シラバスに不適切な点が散見される(成績評価法が適切でない、必要な授業時間に達していない、など)」。そして、「(5)実地調査時に必要とされる根拠資料の準備が不十分であった」、これも何度も出てきます。「これらの指摘を踏まえた改善活動を組織的かつ継続的に行う必要がある」。

「基準8：特色ある教育研究活動」はS評価を得ています。

途中で意見交換を挟みましたので時間をとりましたが、以上です。

小山FD委員長：ありがとうございました。予定を5分ぐらい超過していますけれども、途中でも意見を聞いていますのでいいかなと思います。この後、今のご報告に対して意見交換をしたいと思います。特に情報系のお話が多いので、情報系の先生、よろしくお願いします。15時50分までとっていますので、あと20数分あります。活発なご意見をお願いいたします。今のご説明に対する不足分の説明の要望でも結構ですので、よろしくお願いします。

それでは、ご意見等がございましたら、どうぞ。

瀬戸：「基準3：教育方法」に関して、やはりJABEEの基準は学部教育かなと思います。3(3)について、私もレポートが多いのですが、教える対象が実務者ですので、生の課題というか、完全解がないようなものが多いんですね。なるべく調べたり、考えたり、発表したりする訓練をさせるということでレポートみたいなものを出し、それで評価しています。

確かに1点、2点という評価はかなり難しく、90点、80点、70点ぐらいのレゾリューションになるのですが、単純に括弧を穴埋めして採点するという試験は、実務者というか社会人対応の大学院での教育の最終チェック方法としては、それほど好ましいものではないと思っています。何でもかんでも15週やって、試験をやるというような基準にされてしまうと、この大学院のよさが逆に死んでしまうのではないかという危惧があります。

川田研究科長：15回の授業をして、試験をするというのは、設置基準、法律で定められているんですよ。

瀬戸：それはいいのですが、レポートはだめだとありますよね。

川田研究科長：レポートはだめということではなく、レポートが多過ぎることがまず一つあるんですよ。それはなぜかというと、設置基準では試験になっていますし、学校教

育法にも講義に対しては試験と書かれています。レポート試験があっても構わないんです。例えば小論文試験をやっても構わないですし、専門職大学院ですから多様な評価があっても構わないわけです。それを否定しているのではなく、あまりにも多過ぎるということが一つです。

それから、それぞれのレポートの成績評価を見ても、なぜその評点がついたのかわからない。ですから、レポートが悪いのではなく、そのレポートを使って、その学生に対して5、4、3、2、1をちゃんとつけたかどうかが見えないという指摘です。

小山FD委員長：今のコメントに対して何かありますか。——それでは、ほかにご意見がありましたら。

石島学長：今聞いていて一番ひっかかったのは、審査員はどうもITSS(ITスキル標準)がこの大学のカリキュラムを決定していると思っている嫌いがある。実はITスキル標準は見直されており、ここで大幅に変わるかもしれないわけです。ITスキル標準のITアーキテクトと情報アーキテクトは違うことはわかるけれども、違うのであれば、情報アーキテクトというものをもう一度定義しておく必要があると言っていますよね。

(基準1の)(a)と(b)ということで、(b)はコンピテンシーの話で、それについての注文はほとんどない。ところが、(a)では情報アーキテクトが未定義だということがあるような気がします。未定義だから教育内容との関係が必ずしも明確にならないというロジックになっているような気がしますので、ここについては専攻でぜひ定義を(考えたい)。例えばITスキル標準のITアーキテクトに加えて、どういう分野をカバーしているのか、どういう要件をカバーしているのかということを少し明確にしておく必要はあると思います。そこが一番ひっかかったところです。

あとは、直そうと思えばすぐに直せるようなところもたくさんあります。特にシラバス関係はほとんど全部、割と機械的に簡単に訂正できると思います。それはそれで、すぐに手を打てるものは打ってもらうということでもいいと思いますが、情報アーキテクトをどう定義し直すかということはちょっと考えなければまずいという気がします。

小山FD委員長：ただいまの学長の前半のご指摘に対して、酒森専攻長から何かございますか。

酒森：この後、出番がありますのでとっておきたかったんですけれども(笑)。評価を受けたときに、ITSSとうちの標準は違うということも最初うまく伝わっていなかったのですが、そこは頑張って、伝わったんですね。伝わったら今度は逆に、きちんとした基準がないという話になっていったということです。来年のカリキュラムを考えているチームで話をしているのですが、ITSSが新しくなるのであればといいますか、共通キャリアフ

レームワーク(共通キャリア・スキルフレームワーク)だと思いますが、いっそのこと、それに全く合わせてしまったほうがいいのではないかと思います。その辺は後で議論したいと思います。

小山FD委員長：では、今の件は後半でしっかりと議論したいと思います。他にございますか。

特に私が気になったのは、多様な学生の目標達成度を専攻が確認・指導する仕組みがないというところですが、それに関して情報アーキテクチャ専攻の先生から何かございますか。

川田研究科長：一般論で大学院の教育を考えると、専門職ではなく通常の大学院とすれば、そういう仕組みはないですよ。指導教授がいて、その人が全部指導して、就職まで面倒を見るわけです。通常、機械工学ではこういう基準とか、教える内容や項目まで明確です。その基準に達してそこを出れば、機械工学の学部を出たということで認定する。その感覚が多少残っていると思います。先ほどの学長の話もそうですよね。機械工学や電気工学などには体系があるわけですが、ここで教えている体系がわからないと。JABEE側が体系を持っていないので、ここに来て資料を見たときにどうしてもわからなかったということが一つあると思います。

それから、学生の指導については、従来の学部であればそういう体系があるのですが、大学院であるがゆえに、なかったと見たのではないかと。我々としては、あると見ているわけです。PBLで、一応3人の教員の名前が載ってやっています。そういう意識の違いがあると思います。

小山FD委員長：ありがとうございました。他にございますか。

國澤：冒頭に指摘されている、修了時点における知識・能力の水準が明確化という問題ですが、それをどこで触れて、どのように記述するかということについて、情報アーキテクチャ専攻のほうではもう議論されているのでしょうか。あるいはアイデアというか、どうすればいいか。私は具体的にはイメージできないのですが。

川田研究科長：1(2)ですか。

國澤：そこでもいいですし、最後(基準7)にも「修了生が身につけている知識・スキルの記述に関する具体性が不足している」とあります。

小山FD委員長：酒森先生、いかがでしょうか。

酒森：それも後半の話だと思いますけれども、今回、そういう欠点というか、ほかの方が見て Weakだと言われているところは確かにあります。しかし、そういうものをきちんと改善する仕組みがないと言われている後ろのほうが、全体評価が悪かった理由だと思います。一つ一つはそんなに大した話ではないような気もしますが、それが残っているということは、そういう仕組みが回っていないということです。小山(裕)先生、この学習・教育目標というのは設置基準に書いてあった文言ですよ。

小山(裕)：学習・教育目標・設置基準は、そのままJABEEの報告書には使用できないので、要素をまとめて、(A)と(B)というものを設定しました。(A)は講義科目で修得できる内容、要は知識とスキルで、(B)はPBLで修得できるコンピテンシーという書き方になっています。そのレベルも46ページに書いてはいるんですけども。

酒森：今おっしゃったように、これを受けるに当たっては、どこにどういうものを書いてあるということを集めて説明しています。ほかの場所、例えば大学院案内など、いろいろなところに書いてあるのですが、書いてあることが微妙にずれているという指摘も受けています。JABEEの認証を受けるのであれば、JABEEの基準に合わせた、我々はこうやっているというドキュメントがあったほうがいいと思います。それを見せればいい。我々はあちこちから持ってきていますので、我々には気づかない不整合を見つけられたということが幾つかあったと思います。

小山FD委員長：JABEEの認証を受ける前にこちらから出す資料が相当あるのですか。そこにきちんとそういうものを載せていれば、話は少し違うわけですか。

酒森：そこにありますという書類はあります。

川田研究科長：報告書の33ページからですね。

酒森：これは自己評価書で、それに対するエビデンスの資料をつけるわけです。そうすると、エビデンス間の矛盾というか、彼らの目で見たとときにおかしいというものがあったということです。

小山FD委員長：矛盾なく準備する必要があるということですね。

石島学長：基本的に、教育内容についての評価は彼らにはできない。例えばこの授業科目で教えている内容はここが悪いという評価ではなく、仕組みや体制、関係性などが整理され

ているかどうかで評価しているのもあって、かなりテクニカルなわけです。先ほど言いましたように、情報アーキテクトの定義を明確に書いていないということですが、ITスキル標準でもITアーキテクトの中身についてはかなり望洋とした書き方になっているわけですね。中身ではなく、ITスキル標準で言っているITアーキテクトと何が違うのかがちゃんと書いていないということですよ。

そういうかなりテクニカルな問題ですので、すべて対応できると思います。言った・言わないで感情的になってもしょうがないので、体制がないと言われれば、こういう体制をつくりましたということでもいい。そんなに深刻に考え込む必要はないと思います。ただ、次回、創造技術専攻が受けるときには、そういうことを意識して整備しておいたほうがいいと思います。

小山FD委員長：ご指摘ありがとうございました。

加藤FD委員：今のことに関連した質問です。目標などが書かれている資料をいろいろなところから集めてきたということでしたが、その一番大もとはどこからとってくるのが正解なのか。それがあれば、みんなそこからとってきて資料をつくるということで、そんなに問題はなかったのではないかという気がします。私が開学のすぐ後ぐらいに大学案内をつくったときには、そういうものをどこから持ってきてつくったのですが、担当が変わって次の人がやったり、ホームページを書きかえたりしているうちに、少しずつ変わっていつの間にか変わっているのではないかと思います。大もとの正解があればそんなことにはならなかったと思うのですが、それはどれなんですか。

川田研究科長：一番の大もとは、設置認可申請書です。

加藤FD委員：最初はそれを見ながらパンフレットをつくった記憶があるんですよ。ただ、カリキュラムを見直したときなどに少しずつ変わってきてしまっているのではないかと。

酒森：今回の基本は多分、設置認可申請書です。

加藤FD委員：それが公表されていて、みんなにわかるところがないと、あまり意味がないですよ。

酒森：先ほど言いましたように、そういう柱が一つなければいけないと思います。

加藤FD委員：創造技術専攻でも同じことが起こりますよね。

小山(裕)：設置認可申請書はウェブサイトにありますので、見るができます。

川田研究科長：議論を整理します。先ほど小山裕司先生が、自己評価書を作成するときに本学の学習・教育目標の要素をJABEEへの報告書向けにまとめて、(A)と(B)に分けて書いたと発言されましたが、それがお手元の資料の43ページの「学習・教育目標」です。どなたと一緒にやりになったかはわかりませんが、これはすべて小山先生たちが苦労しておつくりになったわけです。全ページ、苦労してつくられていると思いますが、JABEEの基準が最初にあって、(それに基づいて)我々の大学の説明をしているかという、そんなものはない。基準は我々の大学ができた後にできているわけです。設置基準に従ってやっていて、文部科学省で認定されたわけですから、別に違法も不法も何もなく、ちゃんとした教育をやっているわけです。

認証評価が始まったときに評価機関が基準をつくるわけですが、その基準とうちが公表しているものとの間に整合性がないのは当たり前の話です。基準がなかったのだから、それに従ってつくことはできないわけです。自己評価書をつくるときには、小山裕司先生が基準に合わせて書いていくわけです。その中で(A)と(B)という分類をされたのだと思いますが、それでよろしいでしょうか。

小山(裕)：はい。

川田研究科長：そうすると、認証評価機関ができ、今のところはJABEEしかないのも、そこに出さざるを得ない。その評価(基準)に合わせて、我々の大学院案内やホームページの記述については、このスタイル(実施計画報告)でオープンしていく。オープンしたら、その内容のとおりやっているかどうかで評価されますので、その前に傾向と対策として、体系性や仕組みなどをそれに合わせてやっていけば、何のそごもなくいけるのだろうと思います。

小山FD委員長：ありがとうございました。大変よくわかりました。それでは吉田先生、最後になりましたがご意見お願いいたします。

吉田：基本的には今出た話にかなり近いのですが、今、情報アーキテクチャ専攻のほうからいろいろなお話をお聞きしました。我々がちょっと気になるのは、創造技術専攻では、感性という言葉も入っているとおり、例えば抽象性が評価基準に入ってこざるを得ない分野が大分あります。

これで誤解がないのかどうか、こういう方針でいいのかどうかを確認したいのですが、学長からもあったように、JABEEがチェックするところは教育内容というより仕組

みである。また、具体的な評価基準や目標があつて、それを達成しているかが明確になっているかどうか議論の対象になり得る。それで素直に理想形を追おうとすると、ちょっと難しいだろうと思います。そうすると、こういう分野ではむしろ(こちらが)判断基準をつくってあげて、JABEEが評価しやすくするという工夫が必要になるような気がします。私はそういう理解なのですが、皆さんのご意見をお伺いしたいと思います。

小山FD委員長：今の吉田先生のご意見に対して何かございましたら、コメントでも結構ですので、どうぞ。

吉田：具体的には、人間の感覚からはこういう理想的な空間が必要で、この人はそれができるようになったと評価するときに、真正面から評価するとかなり抽象性の高い評価基準が必要となつて、言葉で説明し尽くせるかどうか、ちょっと問題が出てくると思います。しかしJABEEに対しては、この人はこういうレベルをクリアしている、5段階でこうだと言葉で説明してあげる必要があると思いますが、それは教育の理想からはちょっと外れかねないわけです。それは戦略的にみんなで工夫してやっていくことが必要なのか、それがこれから向かわなければならぬ道なのかどうかということを確認したいのですが。

小山FD委員長：何かアドバイスはございますか。

石島学長：評価軸をちゃんと決めるのは我々である。つまり、教育を実施しているのは我々ですから、我々の組織としての教育目標に従って評価軸を決める。例えば感性の問題にしても、正確なデッサンが描けるかどうかという評価軸を一つつくったときに、それをどういう項目で評価するかという項目立てはこちらでやる。それは教育理念に従ってやればいいと思います。

ただ、JABEEが我々の設定した項目で全部やってくれるかということ、残念ながら、JABEEは勝手に委員を任命したりしますから、どの委員も賛成してくれるとは限らないわけです。設定した項目や評価方法などが明示されており、トータルとして矛盾のないように設計されていれば、我々としてはそれを最大限主張すればいいのではないかと思います。

ひょっとすると怪しげな美大の先生が来て、「こんなものはだめだ。これがどうして芸術的価値を持つんだ」と言う可能性もないことはないわけです。しかし、先ほど情報アーキテクチャ専攻のほうでもあったように、多分、教えている個々の科目の中身にまでは立ち入ってこないだろう。それは評価機関のやるべきことではないと思います。今回の情報アーキテクチャ専攻を例として、そういう仕組みを意識的につくっておいてい

ただくのがいいのではないかと思います。

情報アーキテクチャ専攻のときには、JABEEでも初めてのことでしたので、こちらの意見を結構聞かざるを得ないこともあったんですね。ところが今度は、できていると思ってしまっている可能性があるわけです。JABEEは、JABEEこそ正義だと思っているかもしれません。JABEEというか評価機関の思考としては、トータルの組み立てがどうかということが一番大きいと考えていただくのがいいと思います。

川田研究科長：吉田先生の質問に対する回答としては、今の学長のお話のとおりです。また、JABEEも、授業時間の足りないシラバスがあることに対しては、D評価をつけられることもあると思います。私はそういう感覚を持っています。

JABEEの親委員会、あるいはJABEEそのものは、我々のところに報告書を持ってきたときに、第1回が我々で非常にありがたかったということでした。

また、当日の対応についても我々は意見書を出しています。向こうからはそれに対して、意見は意見として受けとめるけれども、評価は変えないということでした。ただ、委員長からは別に、当日の委員の対応は無礼だったというような謝罪的なものはいただいています。

吉田：個人的に若干懸念したのは、創造技術専攻の評価に何学部の先生が来るのかということです。

川田研究科長：それは大いなる懸念ですね。(笑)

小山FD委員長：それはだれにもわかりませんので。

ほかにはよろしいでしょうか。——では、予定時間を5分オーバーしましたけれども、前半のディスカッションはできたかなと思います。ここで15分間の休憩をとり、16時10分から再開します。後半は酒森専攻長にバトンタッチして、アクションプランにつなげたいと思います。よろしくお願いします。

(休憩)

W (Weak) 評価改善についてのディスカッション

小山FD委員長：それでは、後半の部を始めます。「W (Weak) 評価改善についてのディスカッション」ということで、W (Weak) 評価とC評価についても検討するということです。その後にアクションプランについての意見交換を行い、最終的には前回のFDフォーラムと同様にパワーポイントでアクションプランを提示するというで締めたいと思いま

す。それでは、酒森先生にバトンタッチしますので、よろしくお願いします。

酒森：本当は私がこれを全部読むのかと思っていたのですが、川田先生に読んでいただいたので、すごく楽になりました。なるべく議論の時間をたくさんとりたいと思います。全体の話は頭に入っていると思います。もしかすると先ほどの話がもう一度出てくるかもしれませんが、せっかく事務局にコピーをつくっていただきましたので、「W評価項目対応一覧(50頁以降資料添付)」を見ながら話をしていきたいと思っています。画面に出ているのは一つバージョンが古いもので、「取組状況と今後の対応(案)」は書いてあることが少し違うところもあるのですが、左側の二つの項目はそのままです。ポイントのところを赤字にしていますので、両方を見ながら議論していきたいと思っています。

まず、1(2)です。先ほどから何度か出ていますが、左側の2行目から読みます。「学生が課程修了時に保有しているべき知識・能力を、社会の要請を反映させつつ、学習・教育目標として明確に設定しており、学生および教員に周知していること」。ここでは学習・教育目標が明確に設定されており、周知されていることということです。

我々の認証のときには、学習目標はこうで、それを大学のホームページや学生案内などいろいろなところで周知していると説明しています。先ほども出ましたように、少し内容が違ったりしましたが、ここでの指摘事項はその辺というより、学習・教育目標を(a)と(b)に分けたんですね。(a)は情報アーキテクトに必要とされる知識・スキルの修得、(b)は情報アーキテクトに必要な業務遂行能力(コンピテンシー)の修得です。

(b)に関しては特に何もなく、評価としては問題ありませんでした。(a)に関しては、1年次の科目に対応しているということと、情報アーキテクトとITアーキテクトがちょっと混同しているということも最初にあったのですが、それはきちんと説明して理解していただきました。その結果、「ITスキル標準では職種およびレベルごとにスキル領域、スキル熟達度、知識項目が示されているが、これと比較しても記述の具体性が不足している」。つまり、情報アーキテクトに必要とされる知識・スキルに関して具体的に書いたものがないという指摘でした。そして一番下に、「この点を踏まえた学習・教育目標(a)の具体化が求められる」ということです。

現在、情報アーキテクチャ専攻ではカリキュラム委員会というチームをつくり、数名でカリキュラムを検討しています。その中でこういうことも少しは考えているのですが、まだお示しできるようなところまでは行っていません。今日の議論も踏まえて、カリキュラムの改定に反映したいと思っています。これに関してご意見はありませんでしょうか。

石島学長：参考情報ですが、IPAが『IT人材白書』というものをつくっており、その中でもこれに近いような話が結構議論されています。ITスキル標準でいうところのITアーキテクト

のニーズなども入っていますので、参照しておいていただくといいと思います。

また、ITスキル標準では職種があって、ITアーキテクトは職種名です。うちの大学という情報アーキテクトは職種名ではなく、専門性に対する呼称です。その違いをどうするか。職種名の意味で使い始めると、悪く言うわけではありませんけれども職業訓練校風にとらえられてしまって、必ずしも大学院レベルでなくてもいいのではないかという話になる可能性もあるので、ここでは職種ではなく専門性に対する呼称だと定義し直したという経緯があります。

それと一緒に何が起ころかという、職種であれば、その職業における経験値がレベル感を決めるということになるわけです。ITスキル標準では、何人以上のプロジェクトを仕切った経験があるかというような経験値によるレベル分けがされており、ベースがそこにあります。しかし、専門性に対する呼称であるとすれば、それはおかしいという話になります。そのマトリックスの整理をしていただいた上で、それぞれの授業科目としてはこれがあるという仕組みの見える化をしていただければ、この問題はいいのではないかと思います。

酒森：ありがとうございます。この件に関してご意見をぜひいただきたいのですが、何かありますでしょうか。記述の具体性が不足しているということですが、先ほども質問がありましたけれども、そういうものはどこに書けばいいのでしょうか。

川田研究科長：恐らく評価者が気にしたところは、ITスキル標準に比べてもこちらの記述は足りないという表現がありますので、比較すべきものがあつたんですね。うちはITスキル標準そのものをやっているとは言わないまでも、記述のレベルについてはITスキル標準で書いているようなものを意識して書いていけばいいのではないかな。もちろんそれよりも上になればいいわけですが、少なくとも劣っている評価は出ないですね。

酒森：(b)については、三つのメタコンピテンシーと七つのコアコンピテンシーは記述されていると書いてあるんですね。これもそんなにたくさんは書いていないと思いますが、記述されていると。このレベルでもいいのかなと。

石島学長：コンピテンシーについては、その粒度をさらに上げることは非常に難しいわけです。ですから、そういうレベルになると思います。しかし、例えば情報アーキテクトではこういう知識があるべきだと。それはITスキル標準でいうところのITアーキテクトの知識だけではだめで、もう少し幅広い知識が要るとか、そういうことが出てくるのだろうと思います。

昔のことなのでもう忘れましたがけれども、ITスキル標準でいうところのITアーキテ

トにどういう知識群が要るかということは「スキルディクショナリ」に出ています。それに対応するような表を1個つくればいいのではないか。それをつくった上で、この授業科目に対応するのはこれだというように言えば、それでいいような気がします。それをどこに載せるかはまた議論がありますが。

川田研究科長：コンピテンシーのほうはこれでよかったのかというご質問については、業務遂行能力(コンピテンシー)を獲得させる、人間力を獲得させるとただ書いてあるだけでは、評価者としては、中身がないじゃないかということになる。彼らは、コンピテンシーをメタとコアの二つに分類して、中身が書かれているというレベルで納得したと私は理解しています。コンピテンシーの各項目をどう評価するかということは確かに書いていないのですが、評価者としてはそうではなく、業務遂行能力をここまで分類してちゃんとやっているという視点で、(b)は問題なかったとしていると思います。ですから、それに甘んじていいかどうかという問題は残っていると思います。

酒森：考えてみますと、(a)に関してはほとんど書き物がなかったかもしれません。

小山(裕)：(a)に関しても、情報アーキテクトに必要な知識とは何かと言われたので、自己評価書と実地調査の間に若干やりとりがあったのですが、そこでそれを一応提出しました。何を書いたのか、細かいところまでは覚えていませんが、例えばITに関する専門知識、マネジメントに関する知識、業務に関する知識みたいなことを書いて出しました。これは、大学院説明会で、戸沢先生が作成した資料にちゃんと説明しています。それを大学院説明会だけではなく、パンフレットやウェブサイトにもちゃんと載せればいいのではないかという気がします。

石島学長：粒度の問題ですよ。要するに、ITスキル標準で定義しているITアーキテクトの粒度と、うちで定義している情報アーキテクトの粒度が同じレベルなのかどうかだと思います。ITに関する知識ということでは粒度が大き過ぎて、抽象的じゃないかという話になってしまうんですね。どの粒度にすればいいかというのは、ITスキル標準をベースにする必要はないけれども、彼らの頭の中にはITスキル標準があって、その粒度に比べてどうかということだと思います。

ですから、この粒度でいいんだという説得性があり、そういうものをベースに学習・教育目標の具体化のようなことに結びつけられれば、それでいいのだと思います。あまりに粒度が粗いと、文句を言われるのではないかという気がします。

瀬戸：この大学は、実社会に受け入れる人材ということを意識して教育していると思います。

IPAのほうも調べなければいけないし、もう一つは、今の企業ではどういう職制体制なのか。例えば情報アーキテクトはどのような職制で、どの程度のレベルのスキルが望まれているかということファクト・ファインディングした上で、この大学のカリキュラムを定義しなければいけないと思っています。

酒森：これはカリキュラム委員会をベースとして、この後、専攻の中でつくっていくものだと思います。これはつくればいいという話で、アクションとしてはそれほど難しくないと思います。つくっていく過程で、情報アーキテクチャ専攻の先生にも一緒に中身を見ていただくということで、ここはいいのではないかと思います。ほかにはよろしいですか。——では、次に行きます。

今の続きですが、まず2-1の後半に「[大学院案内]等では「学生は自らの専門領域に高度な知識とノウハウを備えつつ、他の領域に対しても一定のレベル以上の知識を備えたプロフェッショナルとなることを期待されています」としか表現されておらず、修了時点における知識・能力の水準が明確に設定されているとは言えない。そのため、水準の設定を具体化する必要がある」とあります。まず目標をつくった後、その目標の達成度ですね。ほかのところでも出てきたと思いますが、ここでも出てきています。

我々の大学院には多様な学生さんがいて、学生さんごとに目的が異なっているということはかなり理解してもらったのですが、修了時点の目標達成の水準がないということだと思います。これに関してご意見がございましたら、お願いします。

川田研究科長：資料の47ページの「(B)情報アーキテクトに必要な業務遂行能力(コンピテンシー)の修得」に、設置認可申請書に1から5のレベルがあり、修了時の目標レベルを5としてと書かれてあります。これはかなり高度なんですよ。このことは大学院案内などには書かれていなくて、設置認可申請書以外にないですよ。

小山(裕)：そうですね。

川田研究科長：そうすると評価者としては、それが学生に示されていないじゃないかと。なおかつ、こんなにすごいことを書いてあって、レベル5修得をどう保証しているのかと。ここはすごく重要だと思うんですね。先ほどの瑣末な議論とは違い、ここは相当議論して、もう一度(A)と(B)について整理し、それをホームページや授業案内などで学生に周知し、それで教育されて評価できるという具体的なシステムを見せなければいけない。そのときには、設置認可申請書にあるレベル1から5が本当にできるのかという問題がまだ残っていると思います。

酒森：ありがとうございます。ほかにはどうでしょうか。(b)まで入れると、PBLの修了の基準にも合ってくるのではないかと思います。

石島学長：これは業務遂行能力ですよね。要するに、コンピテンシーで書かれている能力が十分に高まっていればこういうことができるはずだということですね。最初のもにに戻るかもしれないのですが、本学では情報アーキテクトという名前を専攻全体にかぶせています。専攻全体が情報アーキテクチャ専攻なんです。ですから、職種としてのITアーキテクトというものよりもはるかに広いところをカバーしているわけです。先ほどから何度も言っていますように、その整理をやらなければいけないだろうということです。

また、例えばここに書いてある「他の領域に対しても一定のレベル以上の知識」など、そういう高度な領域まですべて修得するのは不可能だとすれば、一つの軸があり、昔はパイ型とか言われていましたが、もう一つか二つ、周辺分野のスペシャリティも修得しなければいけないとか、そういう書き方になるのだろうと思います。

最初の設置認可申請書を書いたときの意識は、全員が共通して必ずプロジェクトマネジメントを持っていなければいけないということプラス、例えばシンセシス能力などがなければいけないというイメージだと思います。ですから、情報アーキテクチャ専攻を出る人間は、中心的なスペシャリティのテーマを二つ以上、持っていなければいけないというように書けばいいと思います。

酒森：今の件については、2年前に我々がカリキュラムを見直したときにはそういうことをあまり意識せずに、例えばPMについてはそれまで必須科目でしたが、全員がPMの講義を受けるというのもなかなか大変でしたので、必須科目ではなくした経験があります。ですから今、情報アーキテクチャ専攻では必須科目がありません。そういうところも少し見直さなければいけないかもしれません。必須科目があれば、これは全員に共通な達成指標だと言えたかもしれないですね。

石島学長：専攻と副専攻というのがよくありますが、そういうものをつくれば、ここで言っていることは外形的には満たされるような気がします。

酒森：その下の2-2と2-3は、キャリアモデルコースのことが書かれています。2-2に「自己評価書や平成22年度のシラバスに掲載されているキャリアモデルコースとは一致していない」とあります。いろいろな資料を渡しましたので、モデルコースが少し変わってたりして、一致していないということです。2-3も(1)に「キャリアモデルコースの推奨科目と比較すると、対応する科目が含まれていないコースが多く見られる」とあります。キャリアモデルコースについてはあくまでも推奨だという説明はしたのですが、評

価値するほうとしては、キャリアモデルコースが我々の学習の達成目標という位置づけで、逆にいい意味で見てくれたのかもしれませんが。ただ、そうするとその記述がちょっとあいまいだったりするという指摘がありました。

キャリアモデルに関して、ご意見はございますでしょうか。

成田：キャリアモデルをつくったときは、あくまでも一般的な推奨というレベルでしたのであまりコメントしなかったのですが、実際の評価では、現実のキャリア、ITキャリアの人たちがやっている仕事にこれがそのままぴったりと当てはまっているかどうかについては若干疑問があります。要するに、重要度から考えて、重要なものがちゃんとカバーされているというか、うまく重みづけがなされているかどうかが結構気になっています。そういうことに合わせて見直すのがいいのではないかと思います。

酒森：キャリアモデルの種類が重要かどうかということですか、それとも、一つのキャリアモデルの中の推奨科目があまりよく考えられていないということですか。

成田：種類そのものが、まずいというわけではないですが、整理されていないのではないかと思います。

酒森：キャリアモデルの種類ですね。今は六つとか七つとかつくっていますけれども。

成田：それそのものが外部評価のときに必要かどうかはわかりませんが、それを本筋にするのであれば、ちゃんと現実のキャリアと見比べなければいけないと思います。

酒森：国際コースなども入れなければいけないということもありますので、それも含めて、キャリアモデルというかコースを見直さなければいけないという方向で動いてはいます。ほかにご意見はございますか。戸沢先生はいかがでしょう。

戸沢：まず、情報アーキテクチャ専攻に入ってくる学生さんの全員が同じ目標を持っているかというと、そうではなく、それぞれ違ったキャリアを目指しているのだろーと思います。そのバラエティをカバーできる形で、現在のコースをつくってあるわけです。それは、皆さんが目指しているキャリアは大学で出しているコースのどれに近いかを見て、自分に近いコースに推奨科目が書いてありますから、どの科目を受講するかを決める参考にしてくださいという目的でつくったわけです。ですから、大学自体、こういうキャリアの人を育てるという強い意識は持っていなかった。それが現在のカリキュラムをつくるときの基本的な考え方でした。

今でも学生さんが大学に期待していることには大きな差があるという気がしています。先ほどレベル5の話がありましたが、ITスキル標準におけるレベル5のスキルを本学で学ぶことができる学生さんがいることは確かですし、実際にPBLをやってきちんと指導すれば、そのレベルに到達する学生さんがいるのは確かです。ただ一方、入学時にはスキルレベル2でもいいと言っていますので、スキルレベル2で入ってきた新卒の学生さんがスキルレベル4に到達するかどうかについては、2年間で教育できる中身はある程度限られていますので、確かに疑問符があります。

私が前からカリキュラムの見直しのときなどにずっと疑問に思っていたといいますか、困ったなと思っているのは、卒業時、学生さんの持っている知識やコンピテンシーのレベルがどれだけあれば大学院と言えるのかということです。つまり、学部でPBLをやっている大学と専門職大学院では、PBLで教えている中身は当然違わなければいけないのですが、その差はどこにあるのか。それはどこにも答えがなく、自分たちで見出さなければいけない。まだ専攻の中でもきちんとした答えはなく、これからずっと考えていかなければいけないことだと思っています。

JABEEの評価の基本には大学院としてのクオリティを保証するという意味があるのですが、うちの大学でも、どのレベルであれば大学院の卒業生として認めていいかということについては、まだきちんとした答えを持っていないのではないかとこのところがあります。

酒森：我々がきちんとした達成基準については難しいと言っていたところが、評価委員としては、きちんとしていないとか難しいという指摘になっているのだと思います。今後の方針としては、今ではキャリアモデルコースはあくまでも推奨、リファレンスという形だったのですが、これをもう少し前面に出してきちんとしたほうがいいのか、それとも、あくまでも補助的なものとしたほうがいいのか。その辺は今後も議論しなければいけないところだと思いますが、皆さんはどのようにお考えでしょうか。成田先生は、もう少しきちんと見直したほうがいいとおっしゃっていますけれども。

川田研究科長：今の戸沢先生のお話ですが、通常の大学に対するJABEE認証というものがありますよね。一部の大学で困って議論されるのは、そのとおりやると今までどおり卒業生を出せないということです。ですから、JABEE認証コースとそうでないものを分けてやろうという議論があります。日本の大学なので、普通に授業に出てきていれば卒業させたい。そうしなければ、学生を入れられない。しかし、JABEE認証を取り、そのとおりに動かすと、かなりの学生が卒業できなくなる。それでは経営が成り立たない。だから二つに分けるしかない。こういう話があるんですね。これはJABEEの一つの考え方で、うちのシステムどおりやってくればJABEE認証を出すけれども、それ以外に卒業

生を出せば認証を取り消すというやり方です。

今回の我々の場合は、仕組みとしては国のいわゆる分野別認証評価ですので、本来は違うはずなのですが、JABEEではそういう意識を持っているんですね。評価する人たちは、専門職大学院の評価は初めてですが、従来の情報系大学のJABEE評価は結構やったという経験者です。ですから、今の戸沢先生のお話のとおり、最後はそういうところが議論になるのですが、彼らも、そう言ってはいるものの、そこまでやっていいかどうかということについてはあまり突っ込めないわけです。うちはJABEE認証評価の学校ではなく、あくまでも国が定めた外部評価を受けたということです。

ただ、そうはいっても、最後にはそこが残りますよね。レベルを書いて、うちの修了生はすべてレベル4とか5だと言おうとした瞬間に、どう評価しているのかという話が出てきますので、その議論はどこかでしていただかなければいけないと思います。

ただ、それについては大学としてどういう方針かという話が一方であり、それは別のところで議論したいと思います。また、教育のカリキュラムとか教育の評価としてどうかについては、カリキュラム委員会で議論していただきたい。それは分けて議論しなければ多分、結論は出ないと思います。

戸沢：カリキュラム委員会では今、これはこれから専攻の中できちんと議論していかなければいけないのですが、本学を修了した人たちで非常に優秀な人、例えばレベル5のスキルがあると認められる人に対しては、単に卒業したということではなく、大学側が「あなたはこの分野できちんとしたスキルがある」と認定してもいいのではないかということを検討しています。つまり、卒業のレベルとは別の形で管理を導入してはどうかということなのです。

川田研究科長：その議論をしていただくのは重要だと思いますし、その話はまた聞かせていただきたいのですが、その一方、もともと大学の成績評価は成績表なんですね。5段階評価の成績表があり、GPAもそうですけれども、どの授業科目をとり、どういう成績で単位を獲得したか。2から5までの幅がありますよね。その仕組みが前提としてあるわけです。それがレベル4とか5と相当うまく整合性がとれていなければ、教育機関としてダブルスタンダードを持つようなことになってしまいますので、その議論も重要だと思っています。

酒森：今の川田先生のご指摘のとおり、大学の講義の成績をベースに最終的な評価すると。我々も今、そのような形で考えていると思います。

2-2と2-3は単に我々が出した書類の不適合ですので、すぐにでも修正できます。2-1に関しては、専攻会議、あるいは大学全体でも考えていかなければいけないと思い

ます。

次に、3(3)です。これは何度も出てきている話ですのでいいと思いますが、評価項目に「なお、成績評価にあたっては、各学生のその科目の最終的な合否・水準判定だけでなく、シラバスに記載された達成が期待される各学習・教育目標に関し、それらの個別の達成度評価にも努めていること」とあります。

根拠・指摘事項としては、2に「しかし、成績評価の方法や配点のみが記述されており、成績評価基準が明確でないものが多く見られる。また、出席点のように履修生が身に付けた能力とは無関係な評価基準が含まれているなど、不適切な評価法がシラバスに記載されているだけでなく、現実の採点結果にも反映されている例も見られた」とあります。

これについては、各先生にはシラバスの書き方をかなり改定してもらっています。ただ、去年、私もシラバスの改定をしたのですが、例えば40個ぐらいの科目のうち5個ぐらいは、何度言っても直っていないところがあります。最後の評価点が100点満点にならないと、結局、それはげた履かせになるということです。差し戻して変えてもらうのも大変ですので、最終的に私のほうで勝手に修正したシラバスもあります。恐らく創造技術専攻でも、どんなに言ってシラバスが直らないということもあると思いますので、どなたかが最後にじっくりと見なければ一つ二つの漏れが出てきて、それによってこういう指摘をされるのではないかと思います。

シラバスに関してご意見があれば、お願いします。

川田研究科長：要は、漏れが出ないように仕組みにすればいいわけですので、結局、シラバスのフォーマットですね。成績のつけ方についても、外形的には統一しておく。評価の内容については個々の教員が詳しく書くわけですが、100点がどう構成されているかについては、ある程度フォーマットを決めて、問題ないようにすればいい話です。真っ白なところに書いてもらうということでは、全く問題意識なく書いてくるような教員が実際にいたわけですが、そういうことのないようにしていただければと思います。

また、今回の評価で指摘されたように、いろいろな委員会を通してあるのであれば、教務学生委員会になると思いますが、最低限チェック項目を設けておいて、それに基づいて機械的にチェックできるようにしていただければと思います。

酒森：根拠・指摘事項の3は、「多くの科目およびPBLの教材は教科書および教員の配布資料であるが、それらの資料が提示されず、シラバスに従って教育が実施されていることが確認できなかった。また、多くの科目がレポートによる成績判定を行っているが、提示されたレポートは採点結果が示されたものの、設問や採点基準等が提示されていないケースが多く、適切な成績評価が実施されているか否かを確認できなかった」。

つまり、シラバスだけでなく、そういうことをきちんとやっているという証拠(エビデンス)がないということです。あるいは、やっていないことを示すエビデンスがあるということです。今、創造技術専攻では今年の認証評価に向けて資料を集めていると思いますが、ただ集めるだけでなく、どこかで中身のチェックを行う必要もあるのではないかと思います。

これに関してご意見などがありましたら、お願いします。

成田：3の3行目に「それらの資料が提示されず、シラバスに従って教育が実施されていることが確認できなかった」とありますよね。ここがよくわからないのですが、具体的にはどういう意味でしょうか。例えばPBLのときの教材はすべて残しておきなさいということなのか、あるいは、しゃべった内容をすべて記録しておきなさいということなのか。もし具体的なことを念頭に置いているのであれば、教えていただきたいと思います。

酒森：ここで言っているのは、教科書や教材の話です。通常科目であれば、そのときに教員が配布した教材をとっておいて、それを示す。この指摘は、PBLの教材があまりなかったということではないかと思います。PBLの教材については、最後に集めた経験もないような気がします。

成田：そういうものを出せとは言われませんでしたよね。

酒森：でも、この説明ではそうですね。本当はPBLの教材も出さなければいけなかったのかもしれないですね。小山(裕)先生、どうでしょうか。

小山(裕)：来た人は、出してほしかったようです。ただ、前に専攻会議でもお話ししましたが、彼らは、学部レベルでのすごく小規模で、テンプレートが決まっているようなPBLを想定していたようです。例えばPMの教育教材のように、こういうウェブのシステムをつくり、こういうことがありますというように、ある程度シミュレーションができる教材があってしかるべきだと思っていて、それを出してほしかったようです。

しかし、我々のところでは毎年テーマが変わったり、実在する企業に行ったりすることもありますので、必ずしもすべての段階において教材があるわけではないという話をしたところ、納得はしないものの理解したという形で、じゃあ最後のリザルトを出してくださいという話だったと思います。

酒森：ここは、シラバスに従って教育が実施されていることが確認できなかったということと、もう一つは、結果は出ているけれども採点基準等が提示されていないレポートがあ

ったという指摘です。先ほど吉田先生からもありましたが、学生が提出するレポートの採点基準を、デザイン関係ではどのように出されるのか。それはちょっと大変かもしれませんが、そういう採点基準をきちんと用意してくださいということのようです。それは今後、各教員に徹底していかなければいけないのではないかと思います。しかも、それがエビデンスとして残されていなければいけないということです。

では、時間があまりありませんので、3(7)に行きます。先ほど出ましたように、15回の授業がないということです。日本の大学では15回やっていないところがまだたくさんあって、我々も絶対に15回ということではないと思っていたのですが、最近は厳密に15回というのが各大学での流れのようです。今は15回の授業をやって、その後に定期試験をするという流れになっていますので、これはいいと思います。これについてご意見はありますか。

加藤FD委員：15回やるようになったのはいいのですが、現状、補講期間がほとんどなかったり、学年暦に非常に無理がありますので、日程については全体的にもう少し考えたほうがいいと思っています。

酒森：昨年、急いで川田先生と福田先生と私で、これで何とかいけるということで頑張って入れたのですが、実際に運用していると大変ですね。今年は10月の秋入学も入れて、学年暦もいろいろと変わっていますので、その辺も含めて、学年暦をもう一度きちんと見ることは必要かもしれません。

川田研究科長：学年暦を見る限り、補講期間を置くことはほとんどできないんですね。皆さんにお願いしたことがちゃんと伝わっているかどうか分からないのですが、補講期間に補講するという考え方ではなく、海外出張で休講にしたら、その週のうちのどこかでやるのが一番いいと思います。

補講期間を潤沢にとったとしても、2～3回、授業が抜けた人は入らないと思います。ですから、できるだけその週の中、あるいは土曜日の遅い時間ですね。今は土曜日の5限、6限は活用されていませんので、そこを使うとか、そういうことが一番合っていると思います。

酒森：では、次に7(1)です。これは、シラバスや成績評価の仕組みなど、先ほど出てきた内容を根拠に、こういうことを点検するシステムが有効に機能していないという指摘です。シラバスや教育方法などの個々の話ではなく、PDCAのC(Check)の機能が漏れているということです。委員会などはいろいろと設置されているけれども、漏れているということです。どこかに点検する仕組みを入れなければいけないと思いますが、これに

ついてご意見をお願いします。

川田研究科長：これは結構無理のある指摘をされていると思っています。どんな仕組みがあったとしても、漏れはあるはずなんですよ。一つの漏れがあったからこのシステムは機能していないというのは、ちょっと言い過ぎだと思っています。ただ、システムがうまく機能しなかったということに気づいたときに、それを戻せるようなことが柔軟に行われていなかったのではないかと。例えばシラバスもそのまま出ている、本当にだれも気づかなかったのか。そういう反省はあります。仕組みをいろいろと変えていったところで漏れは絶対に出ますので、もうちょっと別のレベルで議論したほうがいいと思います。

石島学長：研究科長の言うとおりでと思いますが、ここで要求しているのは多分、そういうものをつくれということですよ。例えば今ある会議でいえば、企画会議の中にそういう機能を持たせる。そういう機能があれば、それをくぐり抜けて漏れたことはアクシデントだと言えるのですが、それがなければアクシデントではないという話になってしまうわけです。アクシデント的に漏れが起こるのは、どんなに完璧なシステムだろうとあり得ますのでやむを得ないのですが、企画会議がいいかどうかはわかりませんが、こういう問題を定期的にチェックするチェック機関をつくるということが一応の答えになるのではないかと思います。

川田研究科長：おっしゃるとおりですが、チェックシステムだけでは今回の話はなかなか難しいと思っています。先ほど酒森先生も言われていましたが、これは全員に連絡しているんですね。ですから、例えば人事評価などの別の評価システムもあると思います。通達しているのに、それを守らない人がいる。守らなかったのをチェックしてやりましょうというやり方だけでなく、別のものもあるのではないかと。そういう意味で、工夫が要るのではないかと考えたわけです。

ただ、学長がおっしゃるとおり、何も解答がないということはないと思いますが、何が実効性があるかということがちょっと気になって発言しました。

石島学長：要は、重みが(パラグラフの)上にあるのか、下にあるのかがわからない。細かい事例で漏れがあるということなのか、それとも、大層な委員会はいっぱいあるんだけど、それを統括しているところがないということなのか。それによって違ってくると思います。下の問題は(川田先生が)おっしゃるような話ですが、とりあえず上に対しては……。確かに運営諮問会議の諮問を受けて、継続的に状況をウォッチングしている機関があるかということ、ないですよ。ですから、次の諮問のときにまたそういう話になってしまうわけですね。ですから、一応形としては「やります」ということを出しておくこ

とが当座は必要ではないかということです。

酒森：7(1)はPDCAのC(Check)で、7(4)はA(Action)で、それに対して改善する仕組みに対する指摘です。その中に挙がっている項目としては、運営諮問会議からの指摘ということが載っていますが、それ以外にもこれまでに出来たようなことが残っているので、まだ改善が回っていないということです。

また、点検あるいは改善をするための新しい組織をつくるという答えを出すよりは、今ある組織の中でこういうシステムを回すということのほうが実質的なような気がします。例えばシラバスのことであれば教務学生委員会ですし、広報系の指摘事項であれば広報委員会がやらなければいけないと思いますし、それを全部見ていく委員会(も必要ではないか)。自己点検・評価委員会というものが名前的には一番いいという気もしますが、結局、全委員会できちんとやっていかなければいけないと思います。

ご意見がありましたら、お願いします。——よろしいでしょうか。では、W評価項目についてはこれですべて見たと思います。結局、大きく指摘されていることはあまりなく、一番大きいのは学習目標とその達成基準のところだと思っています。

では、C評価について、どういうものがあるかということだけ見ていきたいと思います。C評価項目については、一つ一つは割とアクションしやすいようなものが多く、「指摘されましたので、そうしました」というものがほとんどだと思います。最初から簡単に見ていきたいのですが、時間はまだ大丈夫ですか。

小山FD委員長：予定では、アクションプランの意見交換の時間に入っています。残り時間は20分です。

酒森：では、C評価については見ておいていただくということにして、アクションプランのディスカッションをしたほうがいいかと思います。C評価に関しては専攻会議で一度取り上げていますので、創造技術専攻のほうで興味がありましたら、どこかで聞いてください。

アクションプランについての意見交換

酒森：では、今まで議論してきたことのキーポイントについて、加藤先生にメモをつくっていただいていますので、それを使ってディスカッションしたいと思います。

加藤FD委員：今日、一通り(答えを)出すというレベルまで行くのでしょうか。

川田研究科長：時間が限られていますので、次につながるような……。

加藤FD委員：この後、どう検討していけばいいかというあたりまででいいでしょうか。

川田研究科長：そうですね。

加藤FD委員：では、メモしたもの(63頁パワーポイント画面資料添付)をざっくりと説明します。まず、学習・教育目標との対応がきちんとできていないということで、これが一番大きいですね。これについて出てきた意見としては、そもそも情報アーキテクトは職種名ではなく、専門性に対する呼称なので、この定義をきちんとしなければいけないということです。そのときには必要な知識やスキルを適切な粒度で記述できればよくて、レベルとしてはITSSを意識して書いていってもいいのではないかと思います。それに伴って、(a)と(b)に分かれていましたけれども、その整理と基準の見直し、また、それを行った上で、教員や学生にどのように周知徹底していくべきか。このあたりが最初の項目から出てきているのではないかと思います。

次に、これは1番目と関連しているのですが、こちらは修了時点における知識・能力の水準をどう保証していくかということです。これは先ほどのものが明らかになればおのずと明らかになりますが、出てきた話としては、情報アーキテクチャという概念を整理して、もともとはPM+専門性、専攻と副専攻という考え方がありましたので、この辺をカリキュラムの見直しのときにもう一度考えていってもいいのではないかと。また、そういう意味では、必須科目、必ず押さえておかなければいけない科目があってもいいのではないかと。

そして、モデルコース、キャリアモデルというものの整合性があまりとれていなくて、今はモデルコースのほうが前面に出ていますが、モデルコース自体が実態と合っているのか、重要度が考慮されているのかなどを検討する必要があるということです。ただ、もともとは学生が目指すキャリアが多様なので、それに合わせてきたということがあり、大学が育成する人材像としてのイメージがキャリアモデルであったわけではないのですが、この辺は恐らくカリキュラム委員会で整理していく必要があると思います。

また、それらの知識やスキルの項目とは別に、到達レベルという概念がもう一つある。こちらはまだ全然議論できていませんが、学生によって異なっているものの、本来、専門職大学院としてあるべきレベルみたいなものがあるのではないかとことが出ました。

次に、この辺は細かい話をまとめて書いています。シラバスの記述については、記述を見直すことと、フォーマットを統一して漏れがないようにするということが、また、委員会でのチェックをきちんと行うということです。あと、シラバスに従った教育においては、今後、創造技術専攻でやっていかなければいけないと思いますが、教科書や配布資料をどこかできちんととっておく仕組みをつくっておくことと、レポート試験採点基

準等もきちんと保管しておきましょうということです。そして、15回の授業を実施するという点については、実施するということで対応すればいいので、大学として対応していく。補講等は土曜日に実施することにして、現在の学年暦で工夫してやっていくということです。

最後に、教育システムの点検・評価の仕組みです。漏れがない仕組みをつくるのは大変なので、何かしらの工夫が必要となる。ただし、アクションプランとしては、現在ある機能の中で気づける仕組みとか、どこかにチェック機構をつくるという回答をつくるのが妥当ではないかということです。また、それと関連して、継続的に改善する仕組みとしては、今ある組織のどこかでこのような仕組みを回していけばいいのではないかと。教務学生委員会、広報委員会、自己点検・評価委員会など、それぞれが適しているのではないかとということです。

後半の2枚については、これでアクションプランとして回答がつくれると思いますが、一番の問題は最初の二つだと思います。これは恐らく今日答えが出るものではありませんので、今後、どういう方向性でアクションプランをつくっていけばいいかということまで話せばいいのではないかと思います。

酒森：ありがとうございました。これで全部入っていると思います。学習・教育目標に関するアクションプランは専攻でまとめる必要があると思いますが、専攻だけでは決められないというか、大学としてきちんとつくることも重要だと思います。専攻でもやろうとしていたのですが、全体での話はどうすればいいでしょうか。

加藤FD委員：それが今日なんですけれどね。

小山FD委員長：この場をうまく活用して。

戸沢：一番気になるのは、コースという言葉なんですね。少なくとも情報アーキテクチャ専攻の現在のコースは、ここに書いてあるように、大学が育成する人材像としてのイメージではないというところがあります。しかし国際コースについては、育成したい人材のイメージでコースという名前を使っていますよね。そういう言葉の使い方については非常に気をつけないと学生をミスリーディングする可能性がありますので、その辺がすごく気になっています。

加藤FD委員：今のようなことは専攻で話すことではないと言っています。

戸沢：そうですね。

川田研究科長：この大学の両専攻で使っているコースという名称は、いわゆる専攻とか専修に相当するコースではなく、あくまでも履修モデルを提示しているだけです。従来にない分野を教育する二つの専攻を持っている大学院大学であり、学生がたくさんの授業科目から何を取ればいいのかということがわからないと困るので、履修モデルを提示しているというスタンスをもう少し明確にする。現状のコースはそういうことなんですね。そのコースを出ればどういうものが獲得できるのかということに踏み込むとすれば、ちゃんとした議論をしなければ出てこないわけです。

コースという名称にはいろいろなとり方があって、今回、認証評価機関は、明確に特殊なコースだという意識は持っていなかったと思いますが、コースという言葉に引きずられてこういうことが出ているという印象はあります。ですから、今の時点でいえば履修モデルでしかないということです。

また、なぜ履修モデルを出すのかについては、先ほどの議論にもありましたけれども、学生が学びたいものを自由に取ればいいじゃないかということであれば、教育機関としてはちょっと違うのではないかという視点があります。JABEEもその視点を持っているのですが、技能とか専門的な知識には、カリキュラムとしてある程度体系があるだろうというのがJABEEの考え方です。

体系があるというのはどういうことかということ、学生がこれを学びたいから学ぶんだということであれば、それは単なる講習会業ですよ。教育機関は、学生がこういうキャリアを身につけたいと思えば、あなたが想像もしていなかったこんなことも学ばなければいけないし、こういうことも学んでもらいたい。「倫理なんか要らないよ」と言ったとしても、ちゃんと倫理も教える。そういうフルセットを見せて、それが教育システムだという視点が明確に出されていればいいのかなと思います。ちょっと理念的な話になったかもしれませんが。

石島学長：モデルコース、キャリアモデルについては、ここに「大学が育成する人材像としてのイメージではない」とありますが、それは基本的におかしいでしょう。大学としてはこういう人材を育成したいというねらいがあるので、コースや履修モデルなどをつくるわけですよ。今、職業上の名称に合わせざるを得ないということでそごが発生しているのだとすれば、そこも大学として責任を持つべきだと思います。それぞれのコースにふさわしい名称を与えるべきだし、先ほど研究科長が言ったように、単に何でもいから勉強して単位だけを取ればいいということでは、大学の果たすべき役割を果たしていないことになる。それは塾でもなんでもできるわけで、それでは不十分だと思います。

ですから、ある程度の履修モデルをつくることになると思いますが、それには人材像がかぶっていなければいけないですよ。人材像のない履修モデルは、ほとんど意味がないわけです。ですから、「大学が育成する人材像としてのイメージではない」というこ

とだけを見ると、ついいいかげんな名前を使ってしまったということの言いわけになってしまっているような気がします。そこはちょっと考えていただければと思います。

それから、まず専攻で考えていただくことが重要で、それを受けて大学として決定していくというプロセスが最後には入る。そのときには運営諮問会議なども活用すればいいと思います。

酒森：最初の二つ、学習目標とそのレベルの話については、現在、専攻のカリキュラム委員会でそのたたき台みたいなものをつくっており、まだ皆さんには話をしていないのですが、12日にPBLの成績評価会議もやります。そこで情報アーキテクチャ専攻の先生たちにたたき台を見せて、もう一回もむという計画を持っています。それが固まってきたところで、大学のほうで相談していただく。我々で勝手に変なことをして、創造技術専攻と全く合わなくなってしまうのも困りますので、一緒にアイデアを出していきたいと思っています。これはそういうアクションをお願いします。

小山FD委員長：FD委員会としては、アクションプランですので期限や日程を入れたいと思うのですが、いかがでしょうか。来年、創造技術専攻が受けますので、それも参考にしたいと思いますし、総合的にある程度提示していただければありがたいと思います。

酒森：カリキュラムはこれをベースにつくらなければいけないので、カリキュラムを考えるとときにはこれができていないといけませんよね。カリキュラムをつくるのは9月いっぱいぐらいですか。

戸沢：9月には何らかのきちんとしたものがないとまずいかなと思います。

酒森：情報アーキテクチャ専攻からのたたき台はそれぐらいです。

小山FD委員長：9月末ですか。

酒森：はい。それを大学全体として、あるいは創造技術専攻も合わせるということになれば、それからですね。

小山FD委員長：学校としては年内ぐらいですか。

酒森：認証評価のアクションとしては、平成23年度末です。

小山FD委員長：来年の3月ですね。

酒森：そうです。それでも、2年以内の1年目で出すということではあると思うんですけども。

小山FD委員長：目標値でもいいと思うのですけれども、期限があったほうがいいかなと思います。

酒森：そうですね。

石島学長：おっしゃるように、これに対する回答をつくっていくための期限はあったほうがいいし、年内なのか、年度内なのか、それは決めていただいたほうがいいと思います。ただ、私が気になるのは、情報系はある程度組織的に話が進んでいる。創造技術専攻ではどこまでの話をどの期限までに進めて、ここで報告してくれるのかということを決めてほしいと思います。なぜかという、そちらはこれから受けなければいけないわけで、そちらのほうが準備期間が要る。

情報系は、非常におざなりのものをつくるだけであれば、そんなに苦勞せずにJABEEに対する回答程度のものでできてしまうわけです。しかし創造技術専攻はこれからですので、そうはいかない。FD委員会でやるのがいいのかどうかわかりませんし、教授会でもいいのですが、創造技術系も並行して、いつまでに各種問題点を洗い出し、それについてのアクションプランをつくっていくかということを出していただければうれしいです。

加藤FD委員：この辺に対応するものが同じように要るんですよね。

川田研究科長：というより、今日欠席している人もいるでしょう。事情のある方がいるのも知っているんですけども、はっきり言うと、そういうことが気になってしょうがない。

加藤FD委員：創造技術専攻の期限は(どうしましょうか)。

川田研究科長：それは専攻長が判断されるでしょう。

戸沢：今日の議論では全く触れていなかったことで非常に大事なことに、入試ということがあります。情報アーキテクチャ専攻では入試の仕方が少しずつ変わっていて、今の入試の形になってから、来る学生たちのレベルというか、関心事の中心が変わってきていま

す。どういう学生さんを教育したいか、どういうキャリアの人たちを育てたいかということと、入試というのは無関係ではありませんので、入試まで含めてきちんと考えなければいけないと思っています。創造技術専攻でもきっとそうではないかと思います。

管野：私のJABEEの経験からのコメントですが、ざっくりばらんな言い方をすると、今回の情報系の評価は非常に高いと思います。ですから、別にそんなにきちんとする必要はないのではないかというのが私の感想です。JABEEは基本的に、だめだったからということではなく、それをフィードバックして修正するという回路が組織的に形成されているかどうかポイントです。倫理教育が重要視されており、倫理に関する項目か何かがあれば、JABEEのメンバーは判断しやすいということです。

また、例えばJABEEの機械系の評価は、4力(ヨンリキ：4力学)にこだわっているんですよ。最先端の科目名などは切ってしまって、結局、4力集中型のカリキュラムを編成したという記憶があります。創造技術専攻の場合、古典に引っ張られるのではなく、こちらで新しいものをつくっているという意味合いを前面に出し、こちらのやり方を持っていくという論点のほうがいいと思います。JABEEのメンバーは、とにかく古くてオーソドックス、安心・安全なところで評価すれば都合がいいという考え方をするということです。

川田研究科長：今日はみんなで基準を読むという時間がとれなかったのですが、本来、傾向と対策でいえば傾向をやらなければいけないわけです。

ただ、創造技術専攻は初めてですので、JABEEが我々のやっていることに対して、これはいいと思ってくれるか、あるいは、大したことはないと思うかという分水嶺があります。ですから、大学のプライドとしては、管野先生がおっしゃったとおり、すごいものを向こうに持っていかせようということにしたいと思っています。

小山FD委員長：ありがとうございます。最後に風向きが創造技術専攻に向いて来ましたので、福田専攻長に締めていただきたいと思います。

福田：先輩の情報系の先生たちには、まだこれからもあるのですが、本当にお疲れさまでした。おかげさまで、我々がやらなければいけないことも少しは見えてきたのかなという気がします。これを受けて早速、17日に丸一日かけて議論を始めることになっています。まだ明確にコンセンサスはとれていないのですが、それぞれ解決しなければいけないところですね。

私もこの説明会に行かせていただいて、いろいろなお話を聞きました。今、研究科長からあったコンピテンシーの話も含めて、やらなければいけない三つの柱というのも、

まさにうちの大学のものをそのまま書いてあったと記憶しています。周りには、これでは認証が取れないのではないかと、事務方と一緒に小声でいろいろなところでやっていた学校もありましたけれども、基本的にはうちの大学はほとんど全部網羅しているのではないかと。ですから、今日の教訓を踏まえてきちんとつじつまが合っていれば、一つはいいと。

また、管野先生に言っていただいたように、我々も新しい形で発信できればいいなと思っています。ぜひ創造系の先生方には活発な議論の中で前向きなご意見をいただき、前に進めていきたいと思っています。

期限については、企画会議で報告させていただきます。

小山FD委員長：ありがとうございました。予定時間をちょっと過ぎましたが、今日はいつになく本音レベルの議論ができたのではないかと思います。

第2回は12月(予定)ごろに開催したいと思っており、テーマを議論中です。またよろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。

認証評価報告書 W 評価項目対応一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
1(2)	<p>専攻の使命・目的に沿って高度な専門職業人を育成するために、学生が課程修了時に保有しているべき知識・能力を、社会の要請を反映させつつ、学習・教育目標として明確に設定しており、学生および教員に周知していること。その知識・能力には、下記の（i）～（vi）が含まれていること。</p> <p>（i）当該専攻が対象とする技術分野に関する高度の専門的知識及びこれを実務に応用できる能力</p> <p>（ii）当該専攻が対象とする技術分野において、複合的な問題を分析し、課題を設定・解決できる卓越した能力</p> <p>（iii）当該専攻が対象とする技術分野に関する基礎的素養</p> <p>（iv）継続的に学習できる能力</p> <p>（v）当該専攻が対象とする技術分野に関する実務を行うために必要なコミュニケーション能力、協働力、マネジメント力などの社会・人間関係スキル</p> <p>（vi）職業倫理を理解し、倫理規範を守りつ</p>	<p>1. 学習・教育目標として、(a) 情報アーキテクトに必要とされる知識・スキルの修得、および、(b)情報アーキテクトに必要な業務遂行能力（コンピテンシー）の修得が挙げられている。このうち、学習・教育目標(b)については、3つのメタコンピテンシーおよび7つのコアコンピテンシーにより、その内容が具体的に示されている。しかし、学習・教育目標(a)については以下の問題があるため改善が必要である。</p> <p>(W)</p> <p>・「情報アーキテクト」は経済産業省 IT スキル標準における職種「IT アーキテクト」と混同しやすいが、IT アーキテクトよりもはるかに広い職種をカバーする概念である。そのため、「情報アーキテクトに必要とされる知識・スキル」も幅広いものであるが、その内容および水準が具体的に示されていない。IT スキル標準では職種およびレベルごとにスキル領域、スキル熟達度、知識項目が示されているが、これと比較しても記述の具体性が不足している。</p> <p>・「情報アーキテクト」は広い範囲の職種をカバーしているが、各学生は、これに含まれるいずれかの職種について学習・教育目標(a)および(b)を達成することを求められていると判断できる。この点を踏まえた学習・教育目標(a)の具体化が求められる。</p>	<p>（取組状況）</p> <p>○講義のレベルはカリキュラム委員会で対応しているが、大学の学習・教育目標などは別途定義する必要があり、現在検討中である。（専攻）</p> <p>（その他改善事項の今後の対応）</p> <p>◆IT アーキテクトよりもはるかに広い職種をカバーする「情報アーキテクト」に必要とされる知識・スキルの具体的な内容及び水準について</p> <p>◇必要とされる知識・スキルの具体的な内容及び水準の明確化</p> <p>◇どのような形で行うか（主として専攻）</p> <p>◇いつまでに行うか（平成23年度末）</p> <p>◆学習・教育目標の具体化について</p> <p>◇学習・教育目標の明確化（項目、分類など）</p> <p>◇どのような形で行うか（主として専攻）</p> <p>◇いつまでに行うか（平成23年度末）</p>

認証評価報告書 W 評価項目対応一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
	<p>つ職務を果たす能力と態度</p> <p>また、当該専攻がその特色として、(i)～(vi)以外の知識、能力を修得・涵養させているときには、これを明示していること。</p>		

認証評価報告書 W 評価項目対応一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
		<p>2. 以下に示す項目 2-1～2-3 については、指摘の趣旨に沿った改善が必要である。(W)</p> <p>2-1. 自己評価書（本文編）p.10-11 において、(a)情報アーキテクトに必要とされる知識・スキルについては IT スキル標準レベル4（他の技術者を指導できるレベル）を、(b)情報アーキテクトに必要な業務遂行能力については、「システムのライフサイクル全体に関するビジョンに基づくシステム設計が可能になる」レベルをそれぞれ設定している。これらは高度なレベルであるが、「大学院案内」等では「学生は自らの専門領域に高度な知識とノウハウを備えつつ、他の領域に対しても一定のレベル以上の知識を備えたプロフェッショナルとなることを期待されています」としか表現されておらず、修了時点における知識・能力の水準が明確に設定されているとは言えない。そのため、水準の設定を具体化する必要がある。</p> <p>2-2. 大学院案内（補足版）にはキャリアモデルコース毎に修得可能な知識項目の充足率が示されているが、自己評価書や平成 22 年度のシラバスに掲載されているキャリアモデルコースとは一致していない。また、知識項目の充足率は基準が求めている「学生が課程修了時に保有しているべき知識・能力の水準」を記述したものとは評価できない。</p> <p>2-3. 大学院案内（補足版）に示されているレーダーチャートには、以下に</p>	<p>（取組状況）</p> <p>○平成 22 年度の大学院案内は、平成 22 年度のシラバスと内容が統一されている。</p> <p>経済産業省の「IT スキル標準 Ver.3」に合うように設計され、「共通キャリア・スキルフレームワーク（第 1 版）」が考慮されたコースになっている。</p> <p>また同様に、平成 22 年度の大学院案内のレーダーチャートにも反映されている。</p> <p>（専攻）</p> <p>（その他改善事項の今後の対応）</p> <p>◆修了時点における知識・能力水準の具体化について</p> <p>◇修了時点における知識・能力水準の明確化（項目、分類など）</p> <p>◇どのような形で行うか（主として専攻）</p> <p>◇いつまでに行うか（平成 23 年度末）</p>

認証評価報告書 W 評価項目対応一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
		<p>示す問題がある。</p> <p>(1) 6つのコースのほとんどでコンサルタントおよび IT アーキテクトの知識項目をほとんど充足するとしているが、キャリアモデルコースの推奨科目と比較すると、対応する科目が含まれていないコースが多く見られる （例：IT アーキテクトの知識項目は情報アーキテクチャ特論Ⅰ～Ⅲで教育されているが、プロジェクト・マネジメントコース等の推奨科目には含まれていない）。</p> <p>(2) セキュリティコース、ネットワークコース、データベースコースは IT スペシャリストに含まれるが、レーダーチャートではそのような位置づけになっていない。</p> <p>(3) ソフトウェア開発コースがアプリケーションスペシャリストに対応するとしているが、推奨科目と対応していない。</p>	

認証評価報告書 W 評価項目対応一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
3(3)	<p>カリキュラムの設計に基づいて授業に関する授業計画書(シラバス)を作成し、当該専攻に関わる学生および教員に開示していること。</p> <p>また、シラバスでは、科目ごとに、カリキュラム中での位置づけを明らかにしており、その教育の内容・方法、履修要件、この科目の履修により達成できる学習・教育目標、および成績の評価方法・評価基準を明示し、それに従って教育および成績評価を実施していること。</p> <p>なお、成績評価にあたっては、各学生のその科目の最終的な合否・水準判定だけではなく、シラバスに記載された達成が期待される各学習・教育目標に関し、それらの個別の達成度評価にも努めていること。</p>	<p>2. シラバスには教育内容・方法、履修要件、修得できる知識・能力、成績評価方法等が示されている。しかし、成績評価の方法や配点のみが記述されており、成績評価基準が明確でないものが多く見られる。また、出席点のように履修生が身に付けた能力とは無関係な評価基準が含まれているなど、不適切な評価法がシラバスに記載されているだけでなく、現実の採点結果にも反映されている例も見られた。これらの点に対する改善が必要である。(W)</p> <p>3. シラバスに従った教育および成績評価を実施していることについては、実地調査によって確認を試みた。多くの科目および PBL の教材は教科書および教員の配布資料であるが、それらの資料が提示されず、シラバスに従って教育が実施されていることが確認できなかった。また、多くの科目がレポートによる成績判定を行っているが、提示されたレポートは採点結果が示されたものの、設問や採点基準等が提示されていないケースが多く、適切な成績評価が実施されているか否かを確認できなかった。(W)</p>	<p>(取組状況)</p> <p>○成績評価基準の明確化などシラバスを改善した。</p> <p>(その他改善事項の今後の対応)</p> <p>◆PBL の成績判定について</p> <p>◇設問や採点基準等の明確化（項目、分類など）</p> <p>◇どのような形で行うか（主として専攻）</p> <p>◇いつまでに行うか（平成23年度末）</p>

認証評価報告書 W 評価項目対応一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
3(7)	<p>一年間の授業を行う期間は、定期試験等の期間を含め、35 週にわたることを原則とする。とともに、各授業科目の授業は、原則として 10 週または 15 週にわたる期間を単位としたものとなっていること。</p> <p>夜間授業および集中授業については、教育上特別の必要があると認められる場合に行っていること。</p>	<p>1. 本専攻では、一年を 4 学期で構成するクォーター制である。大学院設置申請書から、実質的に年間 35 週相当の授業期間として確保されている。しかし、シラバスの授業計画を点検したところ、15 回目の授業時に定期試験を行っている科目が多く見られた。このことから、大学設置基準第 21 条第 2 項で要求されている授業時間に達していない場合があり、担当教員が必要な授業時間を確保するよう、授業計画を立てた上でそれを実行するための改善が必要である。(W)</p>	<p>(取組状況)</p> <p>○大学として学年歴や補講の方法などを見直し、講義が 15 回になるようシラバスを改善した。</p>
7(1)	<p>当該専攻は教育システムが基準 1～6 を満たしているかを点検・評価する仕組みを有すること。</p>	<p>当該専攻には教育システムを点検・評価する仕組みとして、運営諮問会議、FD 委員会、東京都地方独立行政法人評価委員会、認証評価検討委員会、などが設置されている。これらの存在と活動実績は自己評価書（本文編）p.74-78 に説明されているとおり、継続的かつ組織的な取組みとなっている。これらの委員会以外にも、自己点検・評価委員会、教育研究審議会、などが設置されている。</p> <p>しかし、以下に示すとおり、点検システムが有効に機能していなかったと判断されるケースがある。これらの問題は教育の質を保証する上で重要性が高いため、改善が必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シラバスにおいて、15 回目の授業で試験を行っているため、必要な授業時間に達していない事例や、成績評価基準が明記されていない事例が見られた。 ・シラバスに従って教育および成績評 	<p>(その他改善事項の今後の対応)</p> <p>◆実効性のある点検・評価システムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇点検・評価システムの明確化（項目、分類など） ◇どのような形で行うか ◇いつまでに行うか（平成 23 年度末）

認証評価報告書 W 評価項目対応一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
		<p>価が実施されていることを示すための講義資料（教科書、配布資料等）が蓄積されていなかった。成績資料（学生が提出したレポート、成績表等）は蓄積されていたが、レポートや PBL 成果物等の評価基準が不明確なものがほとんどだった。</p>	
7(4)	<p>定期的な点検・評価の結果に基づき、教育システムを継続的に改善する仕組みがあり、有効な活動の実施に努めていること。</p>	<p>定期的な点検・評価の結果に基づき、教育・学生支援システムを継続的に改善する仕組みについては、自己評価書（本文編）p.80-83 に 15 個の委員会が挙げられている。また、改善活動の実績として、(1)「情報科学特論」の新設、(2)学生による授業評価に対応したアクションプランの作成、(3)就職支援策の強化が挙げられている。</p> <p>しかし、運営諮問会議からは、(1)学生の学習効果・実力判定等の評価方法を検討されたい、(2)PBL 教育における多面的評価方法等について検討されたい、(3)修了生の追跡調査の実施と教育へのフィードバック等の課題が指摘されている。</p> <p>また、本認証評価を通じて、以下に示す問題点が指摘された。</p>	<p>（取組状況）</p> <p>○成績評価基準の明確化などシラバスを改善した。</p> <p>（その他改善事項の今後の対応）</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆大学の組織として継続的に改善する仕組みづくり ◆修了生が身につけている知識・スキルの具体的な記述方法 ◆学習・教育目標と科目の関連性の整合性を保つ仕組み ◆学生の達成度を測る仕組みづくり <p>◇どのような形で行うか</p>

認証評価報告書 W 評価項目対応一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
		<p>(1)専攻が設定した学習・教育目標において、修了生が身につけている知識・スキルの記述に関する具体性が不足している。</p> <p>(2)学習・教育目標と個々の科目の間の関連が明確でなく、一部には不整合も見られる。</p> <p>(3)多様な学生の目標達成度を専攻が確認・指導する仕組みがなく、目標として掲げた学習・教育目標を達成したことが確認されていない。</p> <p>(4)シラバスに不適切な点が散見される（成績評価法が適切でない、必要な授業時間に達していない、など）</p> <p>(5)実地調査時に必要とされる根拠資料の準備が不十分であった。</p> <p>これらの指摘を踏まえた改善活動を組織的かつ継続的に行う必要がある。</p>	◇いつまでに行うか（平成23年度末）

認証評価報告書 C 評価項目一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
2（1）	学習・教育目標を達成するために必要な能力をもった学生を入学（編入学・転入学を含む）させるため、アドミッションポリシーを明確に設定しており、学内外に公開していること。それを選抜の方法等に反映させて、公正、適切に実施していること。	<p>アドミッションポリシーの実施は、推薦入試、一般入試、プレスクール、科目等履修制度を組み合わせで行われている。推薦入試ではプレゼンテーションを主体に、一般入試は IT 基礎知識と小論文そして面接を行って選抜している。また、プレスクールの実施による入学前指導や科目等履修生制度による講義科目の事前受講の推奨を実施している。</p> <p>本専攻では極めて多様な学生を受け入れているため、学生の能力にバラツキが大きい。そのため、学習・教育目標を達成するために必要な能力を持った学生を入学させるために、プレスクール等による入学前指導の重要性が高い。しかしながら、プレスクール等への参加は学生の自主性に任されており、出欠の確認も行っていないため、入学時に学生が必要な能力を持っていることを専攻は確認できていない。このため、個別の学生のフォローアップおよび指導を行う仕組みを整備するなどの改善が望まれる。特に、入学試験の成績が下位の合格者に対しては、入学後の学習に支障が生じないよう、確実なフォローアップを行うことが望まれる。</p>	
3（1）	学生に学習・教育目標を達成させるために、カリキュラムを体系的に設計しており、当該専攻に関わる学生および教員に開示していること。	<p>自己評価書（本文編）p.9 には、職業倫理の理解、規範を守り職務を果たす能力と態度（基準 1（2）（vi））を養うために、複数の科目が設定されていることが説明されている。しかし、シラバスを点検した結果、本基準に対して明示的に合致する科目は「情報社会特論」のみである。この点については改善が望まれる。</p>	

認証評価報告書 C 評価項目一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
3（2）	カリキュラムでは、実践教育を充実させるために、講義、討論、演習、PBL、インターンシップ等、適切な教育手法や授業形態を採用し、各科目と学習・教育目標との対応関係を明確に示していること。	1 年次に開講される各科目は、学習・教育目標(a)に対応付けられている。しかし、学習・教育目標（a）の具体性が低いため、各科目の位置付けが明確でない。7 種類のキャリアモデルコースによって各科目の位置付けをある程度は推測できるものの、これを明確化・具体化することが望まれる。	
3（3）	カリキュラムの設計に基づいて授業に関する授業計画書（シラバス）を作成し、当該専攻に関わる学生および教員に開示していること。 また、シラバスでは、科目ごとに、カリキュラム中での位置づけを明らかにしており、その教育の内容・方法、履修要件、この科目の履修により達成できる学習・教育目標、および成績の評価方法・評価基準を明示し、それによって教育および成績評価を実施していること。 なお、成績評価にあたっては、各学生のその科目の最終的な合否・水準判定だけではなく、シラバスに記載された達成が期待される各学習・教育目標に関し、それらの個別	4. 本専攻が最大の特色としている PBL（Project Based Learning）に関して、PBL 成果発表会資料および学生評価資料に基づき、採点基準に従った成績評価が行われていることを確認した。ただし、以下の点について改善が望まれる。 (1)各クォーターにおける評価（素点）では、担当教員による点数のみ示されており、評価理由が説明されていないケースが散見された。(2)全学生のセルフアセスメント資料を集積しているのは評価に値するが、これを成績評価や学生指導にどのように活用しているかの説明が不足している。(C)	
		5. 自己評価書（本文編）p.22 では、「個別の学習・教育目標に対する達成度評価を行っている科目は無い」と明言しており、水準判定以外に、学習・教育目標の達成度評価を行う仕組みが存在しない。この点に関しては、学習・教育目標(a)を具体化し各科目と対応付けた上で改善が望まれる。(C)	

認証評価報告書 C 評価項目一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
	の達成度評価にも努めていること。		
3（4）	教育・学習目標に対する学生自身による達成度の継続的な点検や、授業等での学生の理解を助け、勉学意欲を増進し、学生の要望にも対応できる仕組みの構築、学生および教員への仕組みの開示、およびその仕組みに従った活動の実施に努めていること。	2. 極めて多様なバックグラウンドを持った学生を受け入れていることから、ITSS-DS による診断結果を参照しても学生間の能力のばらつきが極めて大きい。入学試験合格者に対してプレスクールや科目等履修生制度を活用した授業の事前受講を推奨しているが、基本的に学生の自主性に依存した仕組みであることから、入学試験の成績に応じた個別対応を行うことが望まれる。また、1 年次に開講される専門科目等はすべて選択科目であることから、学生の適性や希望に応じたきめ細かな支援を組織的に行うことが望まれる。これを通じて、修了時点での学生の能力保証を促進することもでき、学習・教育目標の達成にも寄与することが期待される。	
		3. 当該専攻のカリキュラムは IT スキル標準に基づいたものであることから、情報処理技術者試験との関連が強く、学生のニーズも高い。そのため、学生が自主的に勉強会を開催し、意欲のある教員が個人的に勉強会を指導しているが、このような取り組みは専攻として組織的に行うことが望まれる。	

認証評価報告書 C 評価項目一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
4（14）	カリキュラムに設定された科目間の連携を密にし、教育効果を上げ、改善するための教員間連絡ネットワーク組織があり、それに従って活動を実施し、有効に機能していること。	すべての専任教員が参加する専攻会議が毎月開催されている。この会議では、教育システム全般を網羅し議論する場であることが自己評価書（本文編）p.52では説明されている。しかし、各科目の教育内容は担当教員がほぼ任意に決定する仕組みになっており、教員相互のチェックも限定的である。また、シラバスは教務学生委員会の審議を経るとしているが、それを確認できる根拠資料が提示されておらず、シラバス自体にも基準3（3）指摘事項2や基準3（7）で指摘したような不備が発見されている。そのため、関連する科目間の連携を密にし、教育プログラム全体やコースとしての教育効果を上げ、改善する教員間の連絡ネットワーク組織が実質的に機能しているとは言えないため、改善が望まれる。	

認証評価報告書 C 評価項目一覧

番号	評価項目	根拠・指摘事項	取組状況と今後の対応（案）
5（8）	<p>学生の勉学意欲を増進、支援し、履修に専念できるための教育環境面での支援、助言や、学生の要望にも配慮するシステムがあり、その仕組みを当該専攻に関わる学生および教員に開示していること。また、それによって活動を実施し、有効に機能していること。</p> <p>また、通信教育を行う場合には、そのための学習支援、教育相談が適切に行われていること。</p>	<p>自己評価書（本文編）p.62-64 の説明の通り、学生の勉学意欲を増進、支援し、履修に専念できるための教育環境面での支援、助言や、学生の要望にも配慮するシステムとして、奨学金制度、授業料免除制度、修学年限を3年とする長期履修制度、キャリア開発支援、オフィスアワー制度、その他の取り組みを実施している。さらに、2年時のPBLにおいては、学生5名程度に対し、教員3名で指導・助言できる体制を構築している。</p> <p>これらの学生支援制度は、履修の手引き、ホームページ、掲示版などで学生および教員に開示・周知されている。</p> <p>しかし、PBL等において、学生にどのような指導・助言が行われたかを示す根拠資料が提示されなかった。多様な背景を持ち、ITSSレベルも様々な学生を対象とした履修支援を行うためには、学生の能力、修学状況、適性、希望等を個別に把握して適切に指導・助言する仕組みを実効的に運用する必要があると判断されるため、改善が望まれる。</p>	

<p style="text-align: center;">アクションプラン</p> <ul style="list-style-type: none"> • 学習・教育目標との対応(1(2)) <ul style="list-style-type: none"> – 情報アーキテクトは職種名ではない – 専門性に対する呼称 – 必要な知識を適切な粒度で記述する <ul style="list-style-type: none"> • 記述のレベルはITSSを意識して書いても良いのでは – (a)と(b)の整理、基準の見直し – 教員、学生への周知の徹底 – 専攻で議論する、全学的に議論する <ul style="list-style-type: none"> • 運営諮問会議の活用 	<p style="text-align: center;">アクションプラン</p> <ul style="list-style-type: none"> • 教育システムの点検・評価の仕組み(7(1)) <ul style="list-style-type: none"> – もれのない仕組みを作るのは大変、工夫が必要 – 現在ある機能の中で気づける仕組みを作る – どこかにチェック機構を作る(企画会議など) • 継続的に改善する仕組み(7(4)) <ul style="list-style-type: none"> – 今ある組織のどこでこのような仕組みを回していくか? – 教務学生委員会、広報委員会、自己点検委員会など
<p style="text-align: center;">アクションプラン</p> <ul style="list-style-type: none"> • 修了時点における知識・能力の水準の保証(1(2)) <ul style="list-style-type: none"> – 情報アーキテクチャという概念の整理 <ul style="list-style-type: none"> • PM+専門性(2つ以上)、専攻と副専攻 • 必須科目の復活 – モデルコース、キャリアモデル <ul style="list-style-type: none"> • 実際と合っているか、重要度が考慮されているか • 学生の目指すキャリアは多様、それに合わせている • 大学が育成する人材像としてのイメージではない – 到達レベル <ul style="list-style-type: none"> • 学生によって異なるが、目指すべきレベルはあるはず 	<p style="text-align: center;">アクションプラン</p> <ul style="list-style-type: none"> • 期限 <ul style="list-style-type: none"> – 情報アーキテクチャ専攻からの回答: 9月末 – 創造技術専攻からの回答: – 大学としての回答: • その他 <ul style="list-style-type: none"> – 入試についても検討が必要 – JABEE: フィードバックが組織的にできていることが重要
<p style="text-align: center;">アクションプラン</p> <ul style="list-style-type: none"> • シラバスの記述(3(3)) <ul style="list-style-type: none"> – 記述の見直し、フォーマットの統一 – 委員会でのチェック(チェックリストの利用) • シラバスに従った教育(3(3)) <ul style="list-style-type: none"> – 教科書、配布資料を取っておく – レポート、試験、採点基準等を取っておく • 15回の講義を実施する(3(7)) <ul style="list-style-type: none"> – 大学として対応していく – 補講は土曜等を実施する 	

**2011 年度前期「学生による授業評価」
結果の概要報告**

2011 年度前期「学生による授業評価」結果の概要報告

FD 委員会委員

加藤 由花

2011年度第1クォータ・第2クォータ「学生による授業評価アンケート」の結果を以下にまとめる。前回に引き続き、1年次の授業評価に加え、2年次の情報システム学特別演習および創造技術特別演習についても授業評価の結果を提示している。2010年度から、授業評価アンケートのオンライン化を実施しているが、2011年度2Qからは、PBL科目を含め全ての科目がオンライン化された。情報アーキテクチャ専攻は、情報システム学特別演習Ⅰの講義期間を半年単位で設計しているため、今回のアンケート結果は全てアンケートシステムにより実施したものである。創造技術専攻は、創造技術特別演習Ⅰ、Ⅱの講義期間をクォータ単位で設計しているため、1Qの調査は紙ベースで行い、2Qの調査はアンケートシステムにより実施した。

授業評価のオンライン化により、アンケートに回答する学生の利便性が向上すること、これまで事務局が手作業を行ってきたデータ解析の効率化が進むこと、アンケートの期間、内容を柔軟に設定できること等の効果を前回の分析で指摘した。一方、リマインダメールを送付する等の手立てを講じているものの、アンケートの回答率が低下する傾向がみられることも指摘した。2011年度は、よりきめ細かにリマインダメールの送付を行っているが、1Qは全体的に回答率が向上したものの、2Qは再び回答率がやや低迷し、なかなか抜本的な改善には至っていない。講義時間中のアンケートの実施等、引き続き具体的な対策を検討していきたい。一方、PBL科目に対するアンケートの回答率は大きく向上しており、今年度から実施したオンライン化の効果と考えられる。

評価に用いたアンケート(講義科目)およびアンケート(PBL科目)のフォーマットは、この報告書の最後のページに別添資料1、2として添付した。また、アンケート集計結果の表示例を別添資料3として添付した。

1. アンケート調査の方法

アンケートの調査項目は、過去のデータとの比較ができるように、従来と同様の項目を用いた。具体的な評価項目については2章で説明する。学生授業評価システムでは、システムにアクセスするためのURLと回答期限を各学生にメールで通知する。学生は、メールに書かれた手順に従い、Webブラウザ経由でアンケートシステムにアクセスし、回答を入力する。学生にとってアンケートへの回答は任意であるが、回答率を上げるために、4回のリマインダメールを送っている。

PBLは各教員が提示したテーマを選択した学生が、少人数(5名程度)でチームを構成し、共同作業として行っている。そのため本来はチーム毎に評価を行うべきであるが、匿名性が守られない可能性を考慮し、全教員分をまとめた評価としている。そのため、PBL科目に対するアクションプランは専攻ごとに作成している。

2. アンケートの内容

アンケートの質問項目は、一般講義科目、情報システム学特別演習／創造技術特別演習(PBL)ともに前回と同一の項目である。それぞれの項目について、「1：全くそう思わない」から「5：強くそう思う」までの5段階評価で答える部分と、文章で自由に記述する部分とで構成されている。自由記述項目については、①この授業をより良くするための提案、②この授業で特に良かった点、他の授業でも取り入れて欲しい点など、③その他、授業、カリキュラムなどについて、の3項目を用意した。以下に、一般講義科目の調査項目と情報システム学特別演習／創造技術特別演習の調査項目をそれぞれ示す。

□一般講義科目の調査項目

【学生の授業に対する取組について】

- 問1 この授業への出席率は？
- 問2 私は、この授業に意欲的・積極的に取り組んだ。
- 問3 私は、この授業を適切に、客観的に評価する自信がある。

【授業について】

- 問4 この授業は、目的が明確で、体系的になされていた。
- 問5 教科書、レジュメ、黒板、PC、ビデオ等の使用が授業の理解に役立った。
- 問6 教員の話し方は聞き取りやすかった。
- 問7 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見等)を促していた。
- 問8 教員は、学生の質問、意見等に対し、明快にわかりやすく対応していた。
- 問9 授業に対する教員の熱意が感じられた。
- 問10 この授業の選択に当たってシラバスが役立った。
- 問11 この授業のテーマは自分の関心にあっていた。
- 問12 授業内容の難易度は、シラバスから読み取れる難易度と比較して適切であった。

【授業についての満足度】

- 問13 私は、この授業を受講して満足した。
- 問14 私は、この授業を受講して、より興味を持ち、深く学びたいと感じた。
- 問15 私は、この授業の受講を他の人に薦めたい。

□情報システム学特別演習／創造技術特別演習の調査項目

【学生の授業に対する取組について】

- 問1 コアタイムに参加した時間 週×時間
- 問2 コアタイム以外での学習時間
- 問3 私は、この授業に意欲的・積極的に取り組んだ。
- 問4 私は、この授業を適切に、客観的に評価する自信がある。

【授業について】

- 問5 10個のテーマ設定・内容は適切であった。
- 問6 チームの決め方は適切であった。
- 問7 運営方法は適切であった。
- 問8 授業を行う環境は十分であった(部屋、机、PC、サーバ等)。
- 問9 プロジェクトの選択に当たってPBLプロジェクト説明書が役に立った。

【授業についての満足度】

- 問10 私は、この授業を受講して満足した。
- 問11 私は、この授業を受講して、より興味を持ち、深く学びたいと感じた。
- 問12 私は、この授業の受講を他の人に薦めたい。

3. アンケート結果／回収された調査票の扱いとフィードバック

学生授業評価システムでは、アンケート結果は授業ごとに集計され、総評とともに閲覧が可能である(結果の表示例については別添資料3を参照)。原則として専任教員の授業に関しては、全教員に結果を配布しお互いの結果を共有する方針がとられている。各教員は、アンケートの結果をもとに、次回に活かすためのアクションプランを作成し、FDフォーラムなどで改善方法などを議論する。すぐに対応が取れる改善項目については、教員ごとに、あるいはFD委員会や事務局において、逐次改善を実施し学生にフィードバックしている。

4. 調査結果の分析

本稿に続いて、アンケート調査の結果をグラフ形式で掲載している。具体的な評価結果についてはそちらを参照して頂きたい。また、個々の講義別の分析結果については、それぞれの教員のアクションプランに詳述されている。ここでは、総合的な観点から、調査結果を分析する。

まず、最初のグラフは、クォータごとに各項目の評価点を加重平均して、年度ごとにまとめたものである(前期と後期では講義科目が異なるため、年度ごとに前期の結果を比較している)。両専攻とも、「難易度」の項目において評点が低くなっているが、これは他の項目と評点の付け方が異なるためである(難易度が適切であると評点は3になり、3に近いほど良い評価を意味する。また、学生授業評価システムでは、難易度のみ3が最高点となっており、2009年度までと計算方法が異なっている)。情報アーキテクチャ専攻では、ここ数年の傾向は似通っ

ているが、昨年度に引き続き全体的に評点が下がっている。しかし、項目ごとのばらつきは平準化されており、全体的に4点前後の評点であることから、年度ごとの学生の特質の違いと考えられる。アクションプランの作成により、各教員が講義内容、教授法の改善を継続して行っていること、継続したFD活動の成果と考えられる。評価項目の中では「教員熱意」「テーマ関心」「興味」などの項目の評価が高く、教員、学生双方が高い意欲をもって講義に取り組んでいることがわかる。創造技術専攻については、前年度に比べ全体的に評点が上がっており、4点前後の値となっている。「教員熱意」の項目の評価が特に高く、教員の高い意欲が感じられる。データの傾向は毎年ほぼ同じであるが、「シラバス」の項目が相対的に低い評価である。前回のレポートでも同様の傾向が見られ、今後の改善が望まれる。

情報システム学特別演習(PBL)については、全体的に評点が高く、項目ごとのばらつきも小さくなっている。「演習環境」が相対的に低い値を付けているが、「満足度」「興味」「推薦度」についてはいずれも4.4点以上の高評価となっており、学生がテーマに関心を持ち、意欲的にPBL活動に取り組んでいることがわかる。また、情報アーキテクチャ専攻では、今年度から「チーム決定」方法を変更したが、「テーマ設定」とともに前年度と比較して評点が上がっており、満足度の高いチーム決定方法になっていると考えられる。創造技術特別演習(PBL)については、2010年度と比較して全体的に評点が大きく下がっている。特に、「チーム決定」「演習環境」「説明書」等の評点が低下しており、物理的な仕組みに問題があると考えられる(演習環境は2.85点と特に低い値になっている)。「意欲的」「興味」の評点は4点を超えていることから、学生は意欲的にPBL活動に取り組んでいることがわかる。設備の充実や環境の整備等、今後も引き続き検討を続けていく必要があるだろう。

分析グラフ

47ページから50ページのグラフと表は、71ページから81ページに示したアンケートの回答を以下の通り数値化し、平均値をグラフ化したものである。

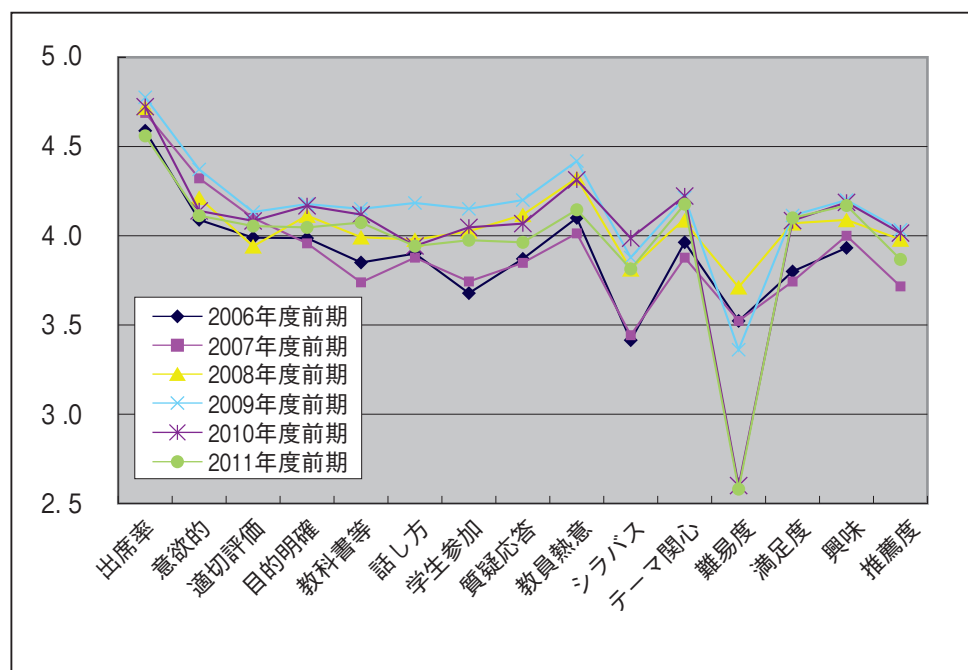
「5：強く思う」「4：思う」「3：どちらとも言えない」

「2：そう思わない」「1：全くそう思わない」

【情報アーキテクチャ専攻（前期）】

	出席率	意欲的	適切評価	目的明確	教科書等	話し方	学生参加	質疑応答	教員熱意	シラバス	テーマ関 心	難易度	満足度	興味	推薦度
2006年度前期	4.59	4.09	3.98	3.99	3.85	3.90	3.68	3.87	4.10	3.41	3.96	3.52	3.80	3.94	
2007年度前期	4.69	4.32	4.10	3.96	3.74	3.88	3.75	3.85	4.05	3.45	3.88	3.52	3.74	4.00	3.72
2008年度前期	4.72	4.21	3.95	4.12	3.99	3.98	4.03	4.12	4.32	3.81	4.09	3.71	4.07	4.09	3.98
2009年度前期	4.78	4.37	4.13	4.18	4.15	4.19	4.15	4.20	4.42	3.88	4.21	3.36	4.11	4.20	4.03
2010年度前期	4.72	4.14	4.09	4.17	4.12	3.94	4.05	4.08	4.31	3.99	4.22	2.60	4.08	4.19	4.01
2011年度前期	4.56	4.12	4.06	4.05	4.08	3.94	3.98	3.97	4.14	3.81	4.18	2.58	4.10	4.17	3.87

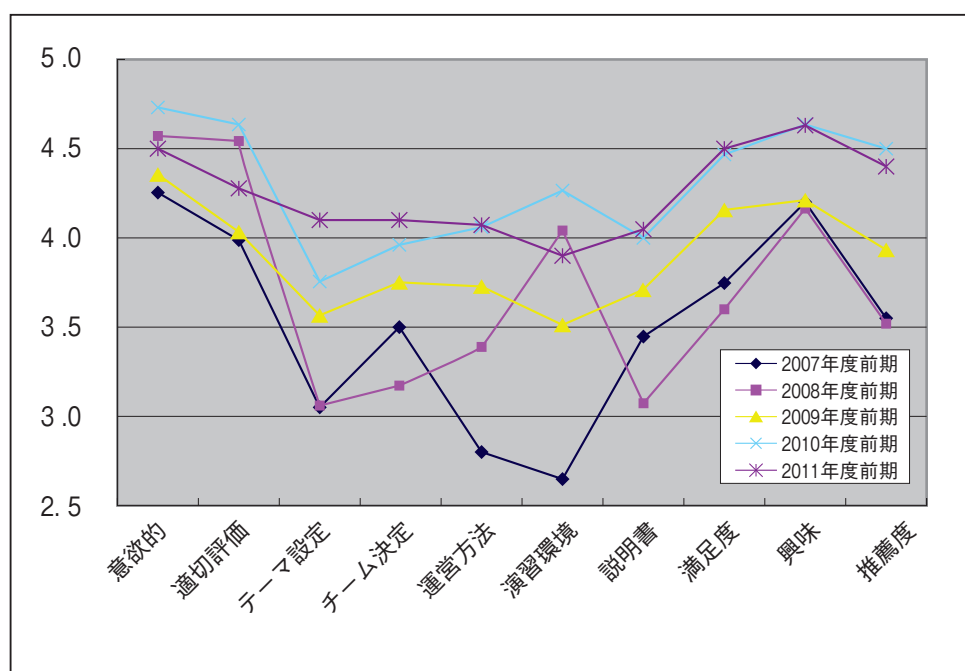
前期学生授業評価平均値（2006年度～2011年度）



【情報アーキテクチャ専攻（情報システム学特別演習Ⅰ）】

	意欲的	適切評価	テーマ 設 定	チーム 決 定	運営方法	演習環境	説明書	満足度	興味	推薦度
2007 年度 前 期	4.25	3.95	3.05	3.50	2.80	2.65	3.45	3.75	4.20	3.55
2008 年度 前 期	4.56	4.54	3.06	3.18	3.39	4.05	3.08	3.60	4.16	3.51
2009 年度 前 期	4.37	4.04	3.57	3.78	3.74	3.52	3.71	4.16	4.21	3.94
2010 年度 前 期	4.73	4.64	3.76	3.97	4.06	4.27	4.00	4.48	4.64	4.50
2011 年度 前 期	4.50	4.28	4.10	4.10	4.08	3.90	4.05	4.50	4.63	4.40

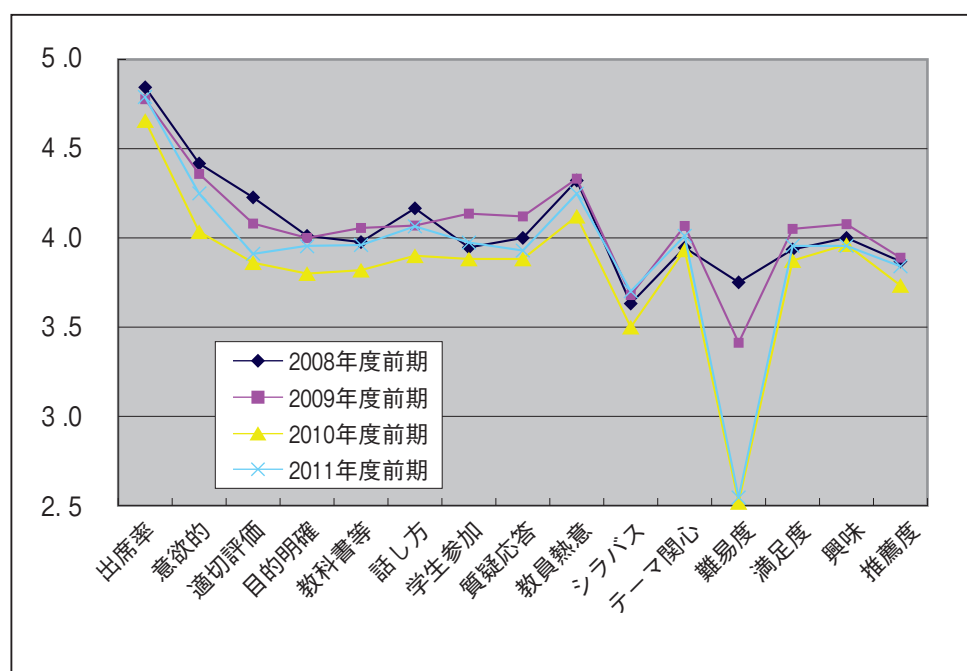
前期学生授業評価平均値（PBL：2007 年度～2011 年度）



【創造技術専攻（前期）】

	出席率	意欲的	適切評価	目的明確	教科書等	話し方	学生参加	質疑応答	教員熱意	シラバス	テーマ関 心	難易度	満足度	興味	推薦度
2008年度 前期	4.84	4.41	4.23	4.01	3.98	4.17	3.95	4.00	4.32	3.64	3.94	3.75	3.96	4.00	3.87
2009年度 前期	4.78	4.37	4.09	4.00	4.06	4.08	4.13	4.12	4.34	3.69	4.08	3.41	4.05	4.08	3.89
2010年度 前期	4.66	4.04	3.87	3.80	3.81	3.90	3.89	3.89	4.12	3.50	3.92	2.51	3.87	3.96	3.73
2011年度 前期	4.79	4.25	3.91	3.96	3.97	4.07	3.98	3.93	4.25	3.70	4.01	2.55	3.96	3.96	3.84

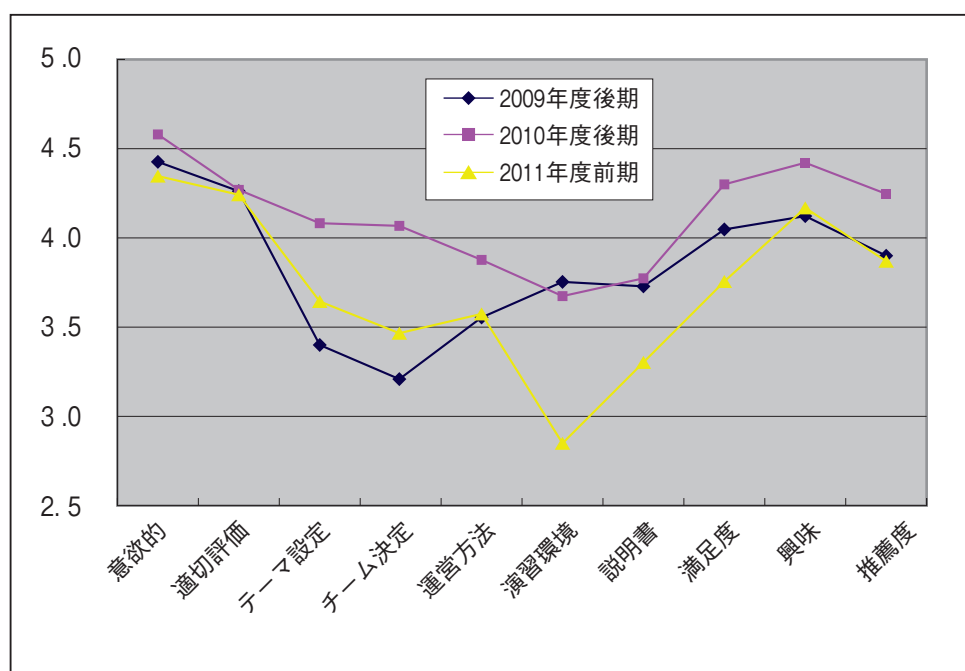
前期学生授業評価平均値（2008年度～2011年度）



【創造技術専攻（創造技術特別演習Ⅰ，Ⅱ）】

	意欲的	適切評価	テーマ 設 定	チーム 決 定	運営方法	演習環境	説明書	満足度	興味	推薦度
2009年度 前期	4.41	4.28	3.40	3.21	3.55	3.76	3.72	4.04	4.12	3.90
2010年度 前期	4.58	4.28	4.09	4.08	3.89	3.67	3.79	4.30	4.42	4.24
2011年度 前期	4.34	4.25	3.65	3.48	3.58	2.85	3.30	3.76	4.18	3.88

前期学生授業評価平均値（PBL：2009年度～2011年度）



別添資料1：2011年度「学生による授業評価」アンケート

別添資料2：2011年度第1Q「学生による授業評価」調査票（PBL科目）

別添資料3：アンケート集計結果の表示例

インダストリアル・デザイン特別演習Ⅲ

以下の質問について、次の5段階評価に従って最も適切と思われるものを選択してください。

【授業に対するあなたの取り組みについて】

(1) この授業への出席率は？

☐ 0-29% ☐ 30-49% ☐ 50-69% ☐ 70-89% ☐ 90%以上

(2) 私は、この授業に意欲的・積極的に取り組んだ。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(3) 私は、この授業を適切に、客観的に評価する自信がある。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

【授業について】

(4) この授業は、目的が明確で、体系的になされていた。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(5) 教科書、レジュメ、黒板、P C、ビデオ等の使用が授業の理解に役立った。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(6) 教員の話し方は聞き取りやすかった。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(7) 教員は、効果的に学生の授業参加（質問、意見等）を促していた。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(8) 教員は、学生の質問、意見等に対し、明快にわかりやすく対応していた。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(9) 授業に対する教員の熱意が感じられた。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(10) この授業の選択に当たってシラバスが役に立った。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(11) この授業のテーマは自分の関心にあっていた。

☐全くそう思わない ☐そう思わない ☐どちらとも言えない ☐そう思う ☐強くそう思う

(12) 授業内容の難易度は、シラバスから読み取れる難易度と比較して適切であった。

☐易しすぎる ☐やや易しい ☐適切である ☐やや難しい ☐難しすぎる

【授業についての満足度】

(13) 私は、この授業を受講して満足した。

☐全くそう思わない ☐そう思わない ☐どちらとも言えない ☐そう思う ☐強くそう思う

(14) 私は、この授業を受講して、より興味を持ち、深く学びたいと感じた。

☐全くそう思わない ☐そう思わない ☐どちらとも言えない ☐そう思う ☐強くそう思う

(15) 私は、この授業の受講を他の人に薦めたい。

☐全くそう思わない ☐そう思わない ☐どちらとも言えない ☐そう思う ☐強くそう思う

下記 (16)～(18)へ記述してください。

(16) この授業をより良くするための提案を記述してください。

--

(17) この授業で特に良かった点、他の授業でも取り入れて欲しい点などを記述して下さい。

--

(18) その他、授業、カリキュラムなどについて、自由に記述して下さい。

--

学生による授業評価（2 年用）

以下の質問について、次の5段階評価に従って最も適切と思われるものを選択してください。

【授業に対するあなたの取り組みについて】

(1) コアタイムに参加した時間(1週間あたりの時間)

☐ 2時間以下 ☐ 2～3時間以下 ☐ 3～4時間以下 ☐ 4～5時間以下 ☐ 5時間以上

(2) コアタイム以外での学習時間

☐ 2時間以下 ☐ 2～3時間以下 ☐ 3～4時間以下 ☐ 4～5時間以下 ☐ 5時間以上

(3) 私は、この授業に意欲的・積極的に取り組んだ。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(4) 私は、この授業を適切に、客観的に評価する自信がある。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

【授業について】

(5) 10個のテーマ設定・内容は適切であった。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(6) チームの決め方は適切であった。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(7) 運営方法は適切であった。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(8) 授業を行う環境は十分であった(部屋、机、PC、サーバ等)。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(9) プロジェクトの選択に当たってPBLプロジェクト説明書が役に立った。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

【授業についての満足度】

(10) 私は、この授業を受講して満足した。

☐ 全くそう思わない ☐ そう思わない ☐ どちらとも言えない ☐ そう思う ☐ 強くそう思う

(11) 私は、この授業を受講して、より興味を持ち、深く学びたいと感じた。

☐全くそう思わない ☐そう思わない ☐どちらとも言えない ☐そう思う ☐強くそう思う

(12) 私は、この授業の受講を他の人に薦めたい。

☐全くそう思わない ☐そう思わない ☐どちらとも言えない ☐そう思う ☐強くそう思う

下記 (13)～(15)へ記述してください。

(13) この授業をより良くするための提案を記述してください。

--

(14) この授業で特に良かった点、他の授業でも取り入れて欲しい点などを記述して下さい。

--

(15) その他、授業、カリキュラムなどについて、自由に記述して下さい。

--

本学では、ファカルティ・ディベロップメント(FD)活動の一環として、教育の現状を把握し、今後の授業改善などに役立てるために「学生による授業評価」を行っています。この授業評価は、学生の日から見て、現在受講している授業についての意見を尋ねる内容となっています。この授業評価の結果は、個人のプライバシーを守るため統計的に処理するとともに、得られたデータは上記の目的以外には一切使用しません。また、この授業評価が、あなたの成績に影響することは一切ありません。

【授業名】 ()

以下の質問について、次の 5 段階評価に従って最も適切と思われる番号を○印で囲んでください。

全くそう思わない そう思わない どちらとも言えない そう思う 強くそう思う
1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5

【授業に対するあなたの取り組みについて】

問 1 コアタイムに参加した時間 (1 週間あたりの時間)

1 2 時間以下 2 2 ～ 3 時間以下 3 3 ～ 4 時間以下 4 4 ～ 5 時間以下 5 5 時間以上

問 2 コアタイム以外での学習時間

1 2 時間以下 2 2 ～ 3 時間以下 3 3 ～ 4 時間以下 4 4 ～ 5 時間以下 5 5 時間以上

問 3 私は、この授業に意欲的・積極的に取り組んだ。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

問 4 私は、この授業を適切に、客観的に評価する自信がある。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

【授業について】

問 5 10 個のテーマ設定・内容は適切であった。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

問 6 チームの決め方は適切であった。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

問 7 運営方法は適切であった。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

問 8 授業を行う環境は十分であった (部屋、机、PC、サーバ等)。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

問 9 プロジェクトの選択に当たって PBL プロジェクト説明書が役に立った。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

【授業についての満足度】

問 10 私は、この授業を受講して満足した。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

問 11 私は、この授業を受講して、より興味を持ち、深く学びたいと感じた。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

問 12 私は、この授業の受講を他の人に薦めたい。

1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5

【 裏 面 に 続 く 】 裏 面 に も 記 述 し て 下 さ い 。

事務室確認印

① この授業をより良くするための提案を記述してください。

② この授業で特に良かった点、他の授業でも取り入れて欲しい点などを記述して下さい。

③ その他、授業、カリキュラムなどについて、自由に記述して下さい。

※個人を誹謗中傷するような記述はしないでください。

(ご協力有り難うございました。 産業技術大学院大学 FD 委員会)

産業技術大学院大学FD委員会 アンケート管理

回答期間 2011年5月20日～2011年6月6日

組 織 産業技術大学院大学FD委員会

科 目 名 プロジェクト管理特論Ⅰ

年度・学期 2011年度・第1クォータ

学 部 学 科 情報アーキテクチャ専攻

教 員 濱 久人

履修者数 39

総 評 「適切評価」「シラバス」「難易度」はまだ改善できる余地があります。

設 問	1	2	3	4	5	平 均	前年度	ALL	自組織	専 攻	分 野
Q.1 出席率	0	0	1	4	21	4.77	4.90	0.00	4.64	4.60	0.00
Q.2 意欲的	0	0	1	17	8	4.27	4.47	0.00	4.19	4.16	0.00
Q.3 適切評価	0	0	4	15	7	4.12	4.30	0.00	4.05	4.08	0.00
Q.4 目的明確	0	1	0	6	19	4.65	4.70	0.00	4.09	4.14	0.00
Q.5 教科書等	0	1	0	10	15	4.50	4.50	0.00	4.06	4.08	0.00
Q.6 話し方	0	0	1	6	19	4.69	4.83	0.00	4.04	4.00	0.00
Q.7 学生参加	0	0	1	7	18	4.65	4.67	0.00	4.05	4.02	0.00
Q.8 質疑応答	0	0	1	10	15	4.54	4.70	0.00	4.06	4.07	0.00
Q.9 教員熱意	0	1	0	10	15	4.50	4.73	0.00	4.23	4.23	0.00
Q.10 シラバス	0	0	6	12	8	4.08	4.13	0.00	3.85	3.94	0.00
Q.11 テーマ関心	0	0	3	12	11	4.31	4.47	0.00	4.17	4.21	0.00
Q.12 難易度	0	3	22	1	0	2.85	2.70	0.00	2.61	2.61	0.00
Q.13 満足度	0	1	0	13	12	4.38	4.40	0.00	4.09	4.12	0.00
Q.14 興味	0	1	3	9	13	4.31	4.37	0.00	4.15	4.21	0.00
Q.15 推薦度	0	0	2	10	14	4.46	4.47	0.00	3.96	3.98	0.00

～ 25%	25% ～	50% ～	75% ～
～ 25%	25% ～	50% ～	75% ～

～ 3.5	3.5 ～	4.00 ～	4.5 ～
～ 2.25	2.25 ～	2.50 ～	2.75 ～

記述回答

Q.16 この授業をより良くするための提案を記述してください。

- ・現状でよいと思います
- ・非常に経験豊かな先生から経験談も交えた授業で非常によいと思います。私自身この分野の知識があまりない状態でしたが、授業を受けることにより、プロジェクトマネジメントの基本的知識を得ることが出来たと思っています。
- ・十分良い授業だと思います。
- ・今のところ思いつきません。
- ・贅沢をいえば、先生の実際に経験したプロジェクトについての事例のお話をもっと聞きたかった。しかし、演習や理論を学ぶ時間をこれ以上減らすことはできないと思うので、今の時間の枠組みでは今のバランスが最良に近いものであると思う。
- ・このままで十分良い。
- ・グループ討議がレベルのよってばらつきがあるので、それを勘案したグループ割も検討してほしい
- ・平易な説明で好感が持てるが、事例や演習等が一般的すぎ、入門講座の域を出ない。もう少し密度をあげ

てもいいのではないか？

- ・授業中に何度かグループディスカッションをしましたが、すべてのグループではないにしろ、いくつかのグループに前で発表してもらう時間を設けたほうがいいのではないのでしょうか。学生が授業に参加しているという意識が高くなるし、ディスカッション自体より熱が入ると思います。
- ・演習が多すぎるので、もう少し知識に特化した講義が聞けると良いと思いました。
- ・自分の理解度を確かめるテストのようなものがあっても良かったかなと思います。
- ・グループワークにかける時間が長く、学生の集中力が切れている場面もあったと思います。小まめにグループワークをやっていたくのは良いとして、時間をもっと絞る、あるいは少し困るくらいの量の課題があっても良いと思います。
- ・演習課題の仕様が全般的にあいまいだった。何をどれくらいやるのが明確でないまま、学生側の解釈でできる範囲が大きすぎてやりづらかった。もう少しきめ細かい指示があれば、内容自体に集中できてより深い議論ができたと思う。
- ・自分の事例がグループのテーマになってしまい、機密情報を含んでいる案件だったため、困惑しました。可能であれば、ケースをもちいて各グループ共通テーマで議論する方がよいかと思いました。
- ・グループワークで、「いままでと話したことがない人と組んでください」といわれたことが何回かあるが、チームが組みにくいことやバランスが悪いと論議が難しいことがあるので、固定チームで取り組んでいくほうが良いような気がします。チーム変更は授業の前半と後半で1回ずつ変えるとか。

Q.17 この授業で特に良かった点、他の授業でも取り入れて欲しい点などを記述して下さい。

- ・この授業で特に良かった点、他の授業でも取り入れて欲しい点などを記述して下さい。
- ・事例が多かった点が良かったです。講師の方の経験が元なのでとても説得力がありました。
- ・講義ノートを毎回チェックしていただいた。
- ・他の学生との情報の交換の機会が多くあり、様々な情報を得ることが出来ました。
- ・先生が企業の方でもあるので、事例がとても分かりやすいし、生徒が実業務に還元しやすいと思う。いろいろな人と話せるよう工夫してくださるところも良い。
- ・講師の授業の進め方がとても良かった。
- ・結構グループで話し合う機会を頂いた事。色々な人の話が聞けて勉強になった。
- ・最初に決めたチームを成熟させるプロセスとともに、別のチームで集まっての作業・情報共有の機会が与えられるのが良いです。プロジェクトについてチームで検討し、まとめていくことそのものがプロジェクトになっており、授業で学んだ理論がすぐ使えるのも良いです。
- ・毎回の講義において目的が明確に提示されていた。
- ・提出レポートへのフィードバックが必ずあった点
- ・毎回のレポートにコメントをつけて頂けるのは良かった。
- ・訊ねる機会を逸した疑問点をアンケート等で吸い上げ、次回講義冒頭で纏めて解説していただくのは有益だった。
- ・授業終了後に講義レポート記載し、その中の質問を次回の授業の最初に紹介し回答する、という点。
- ・講義メモにコメント付けして返却していただけたのがうれしかったです。
- ・資料が質・量ともに充実していて、実務でも使用できそうなものでした。実務でも使用できる資料というのは、大変ありがたいです。他の科目でも意識していただきたいです。
- ・毎回必ずあるチーム活動は良かったです。メンバーも毎回変わるなど、飽きさせない工夫がされていました。

- ・ PMBOKに沿って体系的に学ぶ事が出来たのが良かったです。
- ・ 第一線の現場にいる先生が講義してくれたおかげでリアルな講義が聞けて興味を持つことができた
- ・ 多くの方のコミュニケーションを取ることができました。
- ・ 自分はプロジェクト管理について、中途半端な知識しかなかったので、体系的に学べて良かったです。

Q.18 その他、授業、カリキュラムなどについて、自由に記述して下さい。

- ・ 非常にためになりました。また、授業の内容も非常に興味深かったです。
- ・ プロジェクト管理の方向に進まない人でも絶対役に立つ。
- ・ 楽しいです。
- ・ 講義自体が面白く、勉強になる内容であったためその他の講義も行って頂きたい。
- ・ 秋葉原でも受講できるとよい
- ・ 最終発表課題はグループで1つ発表しますが、グループ内での作業者が偏ってしまいがちです。実際に作業する人、作業した人の成果に対してコメントを言うだけの人、グループ内ディスカッションに参加しない人 等、多少不公平感があると思います。それで、最後にグループアセスメントをしたらいかがでしょうか。
- ・ もうちょっと、学生に求めるレベルを高めても良いと思います。個人に各種計画書を作成させるくらいでも良いと思います。
- ・ 講義の内容(チーム活動の題材)であったり、先生の喋り方など、一見簡単そうに感じてしまうが、プロジェクトをリードしていくことがいかに難しいかが理解出来た。
- ・ ヒューマンスキルに関する特別講義を楽しみにお待ちしております。
- ・ プロジェクト管理の入門としては、全般が見てとても良かったと思います。ただ、メンバーの中に既にプロジェクトマネージャーとして働いている人がいましたが、その人の先生に対する質問が本当に「質問」なのか先生が言ったことに対する「解説」なのか、非常に発言が微妙で聞いている方としては非常に不快でした。授業の受講については、個人の自由なので仕方ないですが、ある程度の知識が有る人が授業をうけ、このような行為をとられると、あくまでも「基礎科目」という位置づけで受講している学生が混乱するので困ります。

**2011 年度第 1、2 クォータ
教員各自のアクションプラン**

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： ソフトウェア工学特論

氏 名： 秋口 忠三

1 良い評価を受けた点

- ・ソフトウェア工学の対象範囲や考え方が体系的にまとめられていて、とてもわかりやすかった。UMLに特化せず、他のモデリングも丁寧に扱い、良く理解できた。
- ・たくさんの参考書籍と会えたこと。参考書を読む大切さが理解できた。
- ・レポートの添削で、加点・減点箇所も分かり、非常に良かった。返却されたレポートの成績にも納得感があった。4回の課題の最後は4000字の論文形式の課題で取り組みがよいのあるもので、非常に有益であった。

2 改善すべき点

- ・参加している学生の経験等も反映したディスカッションのコマがあるとより身近な知識となる。
- ・理論的なものが多かったが、具体的な例があると、より理解がしやすい。
- ・新しい設計手法などの説明では、その都度課題あると、理解度が増す。
- ・概念ではなく、具体的な演習があると、もっと理解しやすい。
- ・講義資料を早めにLMSに登録してほしい。
- ・課題のボリュームが大きいので、考え方のヒントやポイントの説明がほしい。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

今年度の講義資料は、ソフトウェア工学の教科書として定評のある3冊の書籍の内容に、教員の経験を加味して作成しており、ソフトウェア工学の基礎知識を体系的に教えることを第一に考えて講義全体を設計した。この点は、学生から良い評価を得られている。これまでは詰め込み過ぎるとい意見があったが、内容を厳選した結果、適度な内容にできた。今後も内容を吟味し、講義資料の改良を継続したい。学生参加の程度については、改善が必要である。質疑応答の時間を十分取れるように、講義内容の整理を行いたい。

課題レポートは、学生の負荷もかなり高いように思われたが、提出状況はかなり良く、講義内容を理解する上で有効であったと思われる。昨年度から継続して、解答の解説を丁寧に行うことを心がけた。学生の評判も良かったので今後も継続したい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD活動に対する意見

特になし。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： システムソフトウェア特論

氏 名： 小山 裕司

1 良い評価を受けた点

今年度の評価平均(4.23)は昨年度の評価平均(4.42)よりは下がったが、ほとんどの評価が4以上(92.5%)であった。相対的には、出席率、話し方、学生参加、教員熱意、テーマ関心、満足度、興味が4.3以上と高い評価を受けた。これらはskype等を活用することで、学生の授業参加及び理解度の向上をはかったり、新しい話題を積極的に取り上げたりしたことが効果を上げていると思われる。難易度(2.63)は昨年(2.44)から改善に成功している。

2 改善すべき点

シラバスの評価は3.84という評価であり、改善したい。また、演習課題と講義資料の分離、参考書・推薦図書の指定、試験回数、グループワーク、skypeの活用等に関する改善提案をいただいた。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

シラバスには、取り上げる話題、演習の内容等、授業の構成をできるだけ詳細に反映することにした。また、試験回数、グループワーク等の改善提案は、実現できるように授業の構成を調整したい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

特に無し。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： データベース特論

氏 名： 嶋田 茂

1 良い評価を受けた点

- ・ 講義内容が豊富で、多様で広範囲な観点からのデータベース技術を学習できる点
- ・ 全5回にわたり出題される課題レポートのフォロー方法として、単純な回答例を示すのではなく、学生間のディスカッションによる課題のとらえ方の紹介が行われるので、学習の刺激となり理解も深まった

2 改善すべき点

- ・ 課題レポートの解説とディスカッションに時間を多く取られ過ぎて、その回の講義内容の説明に時間が不足するケースが多々あった。これによって、シラバス記載通りの講義の時間配分になっていない場合があった
- ・ 関係論理など、数理的な論理を説明する部分を時間不足の理由から省略する部分があったが、それを補うような資料を必要とする。

3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・ 課題レポートの説明とディスカッション時間を精査して、できるだけシラバスに記載された講義内容に十分な時間が割かれるよう時間配分する
- ・ 規定の講義時間内では説明が十分いきわたらない講義項目に関しては、補足資料を提示するなどして、理解を自習できるような工夫をする

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

本講義の位置付けとして、データ構造や索引構造などの情報処理基礎理論を習得していることを条件にしたい。現状の受講生の構成だと、能力と知識に差が大きく、講義内容の選定が大変難しい。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 情報セキュリティ特論

氏 名： 瀬戸 洋一・清水 将吾

1 良い評価を受けた点

- ・用意した資料の質、量ともに十分なものであった。教材の準備にかなりの時間と労力をかけられたことが把握できる。学生に自主的な学習を促すための参考資料が充実していた。また、取り組むべき姿勢を初回に明示してくれた点は、特に良かった。
- ・毎回の確認テストによって講義を聞いて理解したつもりでいた事を、再度確認して自分が理解できていない部分を見つけ出すことができた点。 レポートの趣旨が明確であったこと。単位(点数)の為では無く、自分自身の理解を進める為であるという事を前もって示してもらえた点。
- ・カリキュラムの網羅性。情報セキュリティを全般的に学ぶことができ大変満足です。
- ・レポート課題の成績を適宜開示していただけたので良かった。
- ・タイムリー(新しい)事案も積極的に授業に取り入れている点が良かった。
- ・かなり完成度の高いシラバスと講義なので、誰もが安心して受講できる。「全体像を示す」「興味をもたせる」などの講義目的に合致したよく練られたカリキュラムだと思った。

2 改善すべき点

- ・業務都合がつきにくい平日夜間の科目については、試験等は極力避け、レポート等のウェイト付けを重くして頂けないか？
- ・技術的な仕組みの説明では、具体的に実存するケースや値を適用してのご説明により、理解がより深まる。
- ・話し方が早かったです。もう少しゆっくり話してほしい。

3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・カリキュラム自体の完成度は上がっているので、具体的な事例をプログラム実行などし、より具体性をもって理解を深まるようにする。
- ・レポートの指導の意見もあった。1Qの講義であり、配慮が必要な事項と考える。
- ・講義の順番を変えたことで、シラバスとの整合性に関し、意見があった。本件は説明済であったが、講義中の話し方の間の取り方、スピードなど、学生の立場にたち再考必要。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・授業評価した学生へのフィードバックするルートが欲しい。特に悪い評価をした学生への説明責任を果たす必要がある。
- ・年ごとに学生の質も変わる。教員が学生の授業評価を行う仕組みも必要(個々の成績評価ではなく、全体的な授業態度に対する評価)。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 情報アーキテクチャ特論Ⅲ

氏 名： 南波 幸雄

1 良い評価を受けた点

今回は受講生も少ないことが幸いして、教員と学生との間で、密なコミュニケーションがとれた。この結果、各チーム毎の進行度に応じて、適切なコメントや指導ができた。

2 改善すべき点

実際には難しいが、チーム分けのやり方。2コマ連続授業であるため、第1回の講義日に決めなければならないが、その後受講しない人がでてしまい、結果としてチーム間に大きな差がでてしまう。これを解決するためには、一部の受講生の不便を耐えてもらって、2回目以降でチーム分けの補正を行うしかない。

テキストや授業のやり方に関して、色々な意見がでている。このような手法・技能の取得に関しては、体験することが重要である。いままでの経験からも、いくら最初に説明しても、実感できていないとほとんど理解できないのが実情である。そのため、このやりかたを継続するしかないを考える。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

本講義は今年限りであるので、特記事項はない。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

一般的に言って、学生にも書いた内容に責任を持ってもらう意味でも、記名で提出させることを検討すべきと考える。

またそうした場合は、批判内容に対しての教員の反論等も、公開できるようにした方が良い。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： コミュニケーション技術特論Ⅱ

氏 名： 中鉢 欣秀

1 良い評価を受けた点

今回は受講者数が少なかったので、履修者それぞれの意見を取り入れ授業中に改善を行いながら進めることができた。

2 改善すべき点

授業中、授業後のフィードバックコメント、懇親会などで学生と直接話をし、その都度改善をしながら行っているので、特に振り返ってみての改善すべき点は見当たらない。

グループワークをやりたいという意見があるが、他の授業でも体験できるし、別に不可欠ではないと思う。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

今まで同様、学生とのコミュニケーションを密にとりながら、随時改善させていく。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

相変わらず、こちらが気づかないような鋭い事柄を指摘する、建設的な改善提案は何も出てこないのが残念である。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： Java プログラミング技法

氏 名： 長尾 雄行

1 良い評価を受けた点

- ・ Twitterクライアントの作成というテーマを採用したことで、履修者が興味をもって学修に取り組めた点
- ・ 授業の各回で10分程度の演習時間を設け、解答例を教員がその場で作成して示すというスタイルを採用した点
- ・ すべての課題について、成果物の評価と改善案等をLMS経由で学生に示したことで、課題に対する理解が深まった点

2 改善すべき点

- ・ 授業1回あたりの内容がやや多いため、学生によっては進度が速いと感じる点
- ・ Eclipseの操作の説明がやや速い点
- ・ LMSで提供するビデオの映像の解像度が低く、復習時にツールの画面上の文言等が読み取れない点
- ・ Twitter クライアントの作成を行う回では、Twitter についての予備知識がない学生には理解が難しい点

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・ 今後も履修者が興味を持って学修できるように、EPUB等の電子ブックフォーマットやTwitterクライアント等の話題を授業の中で取り上げる
- ・ 今後も演習時間を各回10分程度取り、手を動かしながら理解を深めることを目指す
- ・ Eclipseの操作方法の説明を10分程度の e-Learning 教材として作成し、事前に配布して授業が円滑に進行できるようにする
- ・ 講義ビデオの撮影時の画面割りを変更し、教室の風景を削除してPC画面が大きくビデオ中に記録されるようにする

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

特になし

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： ネットワーク特論 I

氏 名： 潮 総一郎

1 良い評価を受けた点

- ・実機を利用した小規模LAN構築実習について、内容は手頃であり有効だったとの評価を得た。頭だけでの理解になりがちなところを、実習を通して体験できた等の評価を頂いた。
- ・グループワークのグループ構成が、バランス良く構成されたとの評価を得た。
- ・質問、相談には丁寧に対応してくださったとの評価を頂戴した。受講生が理解していないと感じた場合、再度より良い説明を心掛けていたとの評価も頂戴した。
- ・個人による実作業を伴った課題演習(各自パソコンによる作業)は良いとの評価がされた。

2 改善すべき点

- ・授業資料等における誤植等の不備については、厳しい声を沢山頂戴した。またLMSへの資料提示が遅すぎるとのご指摘を頂戴した。この部分については、どんな事情があったにせよ弁解の余地は無く、非常に迷惑をおかけした。
- ・授業の内容が広すぎ、進行が速く、初学者には難しいとの声があった。範囲としては一昨年の内容より削った内容だが、受講者の知識のばらつきにより、難しいと感じる学生が存在した。ネットワーク初心者向けのプレスクールの開催したほうが良いとの意見もある。
- ・学生の参加を促すべきだとの結果が出ている。内容的に一方向の授業になってしまいがちであり、教科書を読んでいるのと変わらないとの指摘を受けた。
- ・実習室の利用に関して、1Qでは学生の多くが複数の授業をとっており、現在の開室時間では自由度が足りず、開室時間の延長を望む声があった。また、機材に過去の設定が残っており、これをクリアしておいて欲しいとの声があった。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・実習については、授業内容との連携を深めて、より満足感の得られる内容へと発展させる。
- ・授業全体の流れ、内容全体を幅広く理解する事の重要性を授業の最初により具体的に示し、ネットワークの基礎知識全般を体系的に理解できるようにする。また学生の進捗を把握し学生自身が到達度を把握できるように、各所でマイルストーンを作り理解を促す。
- ・講義部分についても学生の参加を促すようにグループ調査等を取り入れる。
- ・資料の完成度を徹底的に上げ、予習をするのに十分な時間を作れるようにする。
- ・参考資料もより具体的なものを提示する。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

特にありません

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 情報アーキテクチャ特論 I

氏 名： 中島 丈夫

1 良い評価を受けた点

- ・ ハンドアウトの内容・緻密さが良い。
- ・ 時代の先を見る事が出来る講義内容。
- ・ 目先の流行にとらわれず、中長期的なスパンでIT技術を俯瞰する視点。
- ・ ダイナミックに最先端の話題を取り入れていた点。
- ・ 楽しそうに喋っているのがすごく良い。

2 改善すべき点

- ・ 一年生の一番目の授業としては、内容が難しすぎる。
- ・ 講義を受けるにあたって前提となる知識が必要。理解が難しい。
- ・ 取り扱う範囲が広大なため、「説明しないこと」が多い。
- ・ それ相応の知識や経験を持った人間ではない限りついていくこと自体が難しい。
- ・ 必要な前提知識について、参考図書を提示するなりして事前学習が必要。
- ・ プロセッサ技術について、まとまった時間がとれなかった。
- ・ 時間配分。
- ・ 講義の目的が不明確。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・ 内容的に、未だ教科書のようなものが存在しないので、ハンドアウトの内容に事前学習できるような説明文を多くする。
- ・ 教科書を作ることも検討する。
- ・ 事前学習を制度化する仕組みを作る。
- ・ 事前学習、講義、フォローのサイクルを強化する。
- ・ プロセッサ技術など、ハードウェアの時間配分を増やす。
- ・ 自分で考える癖をつけるために多くの問を準備しているが、今後は回答例も示す。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・ フィードバックを得るための、良い制度だと思います。
- ・ 毎年この制度をもとに、講義の改善努力をしてきたが、その効果が確認できる。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： プロジェクト管理特論 I

氏 名： 濱 久人

1 良い評価を受けた点

- 1) 講義レポートによるフィードバック
40名近い方が参加いただき、かつさまざまな経験を持つ(大学を出たばかりの実務経験のない方から、30年以上の経験を持つ方まで)講義になりますので、講義の中ではなかなか個別の対応ができません。今後も講義レポートで個々の方へのニーズにできる限り対応できるようにしていきます。
- 2) 多くの人と話ができた⇒演習で多くの方と話せるようにしていきます。

2 改善すべき点

- 1) チーム演習について
演習は、最初に座った席のメンバーで5-6名を集め、まず議論をいただいて、テーマ決めをします。次の回では、メンバーがどのような人なのかをハーマンモデルを使って、自己理解と相互理解を行います。さらに事例分析と最終発表はこのメンバーで、プロジェクトのチーム形成を経験いただくようにしています。途中の講義では、メンバーを入れ替えて、できるだけ多くのメンバーと話をいただくようにしています。この演習に関して、以下の意見があります。
(ア) チームによって、相当に差が出てしまう⇒上記の意図を十分に理解できている人とそうでない人がいるようです。講義の中で、チーム形成活動の話をしていきますので、社会人ですので、ここは何とか意図を理解してチーム形成を行って欲しいところです。意識的なチーム構成を行うことも可能ですが、実務で自分の思い通りの人を集めることはできません。難しいチームをどう動かすかも考えていただけることを期待します。
(イ) グループワークが長すぎる⇒チームによっては、足りずに別途集まっているところもあります。議論の深まりの違いだと考えます。議論が進んでいないチームは介入しておりましたが、チームによってはもう少し介入を行う必要があるかもしれません。
- 2) 講義のレベルについて
少数ですが、以下の意見もあります。
(ア) 講義レベルを高めて欲しい⇒アンケートでは3名の方が、2を付けておいでです。PM経験者がおいででした。基礎講座ですので、これ以上にレベルを上げるのは全体を考慮すると得策ではないと考えます。個別にフォローします。
(イ) 知識をもっと教えて欲しい⇒PMが実践学であることを十分にご理解いただけなかったということかと考えます。実践の必要性をより確認しながら進めます。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

上記1, 2に記載

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

アンケートの回収が、39名中26名で、70%を切っています。以前は最終回前の講義の中で取っており、もう少し回収率が高かったように記憶しております。
アンケートへの入力がある程度必須にいただき、できる限り全員のご意見を収集できるようにお願いをしたいと思います。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 情報ビジネス特別講義Ⅰ

氏 名： 六川 浩明

1 良い評価を受けた点

- ・今年度のテキストを、わかりやすいテキストに変更した点がよかったから、来年も同じテキストを使うこととする。
- ・毎回、授業のたびに、資料を数部コピーしていただく点は、継続していきたい。
- ・現代のかつ最新の情報法に関するトピックを、引き続き取り上げていきたい。

2 改善すべき点

- ・ホワイトボードで使用するマジックについては、インクが充填されているものを準備することとしたい(これは大学事務局への小職からの要望でもあります。)
- ・遠隔授業参加者も、ホワイトボードの文字が見えるように、修正していきたい。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・現代のかつ最新の情報法に関するトピックを、引き続き取り上げていきたい。
- ・今後とも、受講生が興味をわくようなトピックを選択して、授業を行って行きたい。
- ・事務局への要望ですが、ホワイトボードで使用するマジックについては、インクが充填されているものをご準備頂きたい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・とてもいい制度であるので、今後もぜひ続けて頂きたい。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 技術倫理

氏 名： 川田 誠一

1 良い評価を受けた点

「シラバス」「テーマ関心」「興味」を除き4以上の評価を得た。特に前年度と比較し、「意欲的」「教員熱意」「シラバス」の値が上がっている。

「出席率」は4.83と高く評価されているので、このまま維持されるよう次年度も学生のモチベーションを高めるよう努力したい。また、その他4.5以上の評価を得た「学生参加」、「教員熱意」や4.3以上の評価を得た「意欲的」、「目的明確」、「話し方」、「質疑応答」については今後も継続してこのレベル以上になるよう努めたい。

2 改善すべき点

評価が4.0以上4.3未満であった「適切評価」、「教科書等」、「満足度」、「推薦度」については改善に努めたい。

あと、はまだ改善できる余地があります。「シラバス」が3.9、「テーマ関心」が3.8、「興味」が3.97であり、これらについてはシラバスのいっそうの改善に努めて学生の興味、関心が増すよう改善したい。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- 基礎知識がない人にとっては、進行が速く、少し分かりづらかった。
- 倫理に答えは無いのかも知れませんが、もう少し答えが欲しい。方向性が欲しい。事例・判例でも良いです。

などの学生からの改善提案についてであるが、基礎知識がない人に対して参考図書の読み方などについて説明を加えたい。また、回答の方向性について事例提示などを多くするようにする。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

本学における重要な活動であり、今後アンケート内容の見直しなど、教育効果を適切に評価できるよう常に検討してほしい。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： インダストリアル・デザイン特別演習Ⅰ

氏 名： 福田 哲夫／小山 登／國澤 好衛／村田 桂太

1 良い評価を受けた点

- ・出席率も良く、授業にも意欲的に取り組んでいる。また、テーマへの関心度も高い。
- ・総合的な満足度や興味、推薦度等も高い評価となっている。
- ・さまざまな分野でのデザイナーの実際の取り組みにふれ、実践的にデザイン技術の習得ができた点が高評価につながっているようである。

2 改善すべき点

- ・ほとんどの項目で良い評価を受け、学生は意欲的に取り組んでいるものの、シラバス内容からは読み切れない部分もあったようである。
- ・受講者にかなりのレベル差があるため、レベル毎にグループ分けして演習を進めることなどの検討が必要と思われる。
- ・未経験者向けの補講などの対応も検討を要するところである。
- ・参考となると書類が無いため、独自に全体をまとめたテキストを作成、配布することが必要と思われる。

3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、悪い評価には改善策）

- ・基本的な流れとしては良い評価を受けたが一部内容改善に向け教員間で調整する。
- ・運営方法の改善策の検討。
- ・シラバスの精査、テキストの作成。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

--

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： デザインマネジメント特論

氏 名： 小山 登

1 良い評価を受けた点

- ・ 具体的な事例を使って、企業の生の情報(デザインマネジメント)について色々聴けたのは、本格的で良かった。(同意見複数)
- ・ グループワーク(実務スタディー)は、1 Qの科目で行われたグループワークの中で最も取り組み甲斐があった。実践的で、プロジェクト遂行に伴う難しさや楽しさを学ぶことが出来た。また、テーマも思い思いに工夫できる題材であった。
- ・ 企業の現場での話なので、話題が新鮮であり講義が魅力的であった。
- ・ グループ演習のチームでのプレゼンテーションは大変であったが、授業に対する理解が深まりとても楽しく知識を定着することができた。
- ・ 講義レポートを毎回書くと、授業の復習になってとても効果的であった。
- ・ 実際の写真を使った授業は、大変勉強になった。

2 改善すべき点

- ・ グループディスカッションをよりやりやすい環境(夜遅くまで大学で作業が出来る等)が整っていると良かった。(複数意見)
- ・ 自動車業界のトピック中心だが、他の製品の業界も聞きたい。
- ・ 自動車分野に明るい先生、家電分野に明るい先生と授業内で担当が変わっても良いのではないか。あるいは、いっそう、自動車に特化しても良いと思った。
- ・ 現役デザイナーをゲストスピーカーや企業見学など実施できると良い。
- ・ グループワークを増やして、テストを減らして欲しい。

3 今後のアクションプラン (良い評価をさらに発展させる策、改善すべき評価には改善策)

- ・ 本年度も講義の内容に大変興味を示し、意欲的に受講してくれたと思う。今後も出来る限り企業の豊富な情報を取り入れ改善を加えながら、より良い授業を目指したい。
- ・ グループ演習は大変好評なので、更に内容を充実させて、魅力ある演習としたい。
- ・ 16回中1回は、企業の現場サイドから直接話を聞ける機会をつくりたい。
- ・ 自動車関連だけでなく、出来るだけ電機業界やその他の業界などの具体例も取入れて、社外スピーカー等と呼ぶことを検討したい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・ 本年度もFD委員会の委員長を拝任しているので、自分の授業を使って、学生の意見を取り入れながらいろいろなトライを実施して、より良い授業を構成するための努力を更に進めていきたい。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： シミュレーション特論

氏 名： 橋本 洋志

1 良い評価を受けた点

- ・実際に何に役立つのかと言う話題を挟みながら授業が進むのでイメージしやすく、苦手意識を持つことなく取り組めた。
- ・シミュレーションの目的と手法を学べたこと。手段としてScilabの使い方をある程度習得できた。
- ・学んだことを、現実の世界での現象にあてはめて考えるトレーニングをしたこと。

2 改善すべき点

- ・教材配布課題提出等LMSがそれ程使われなかった。専攻の違いによるのかも知れないが、適宜に活用するのも良いと思う。
- ・シラバスに「数学の素養があること、最低限興味があること」と入れた方がよいかもしれません。

3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・良い評価を多数得ているが、今後も時代変化に適応し、学生(特に社会人学生)のニーズに適合するような例題を豊富に用意する。
- ・シラバスで、本授業がどのような知識を必須とするかを明記して、数式に興味を持たない学生が誤って履修しないようにする。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・本調査活動は、授業内容の見直しに必須のものと感じている。
- ・悪い評価について、何人が同様の意見を述べているか、人数を明記してほしい。そうでないと、学生の多数が満足していても、たった一人だけが悪い評価を述べていれば、教員は考え込んでしまうため。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： デジタル技術特別演習

氏 名： 村越 英樹

1 良い評価を受けた点

- ・「出席率」「意欲的」「適切評価」「教員熱意」(平均4.0以上)が比較的良い評価を受けた。
- ・記述式回答より、「具体的な技術が学べるのでやりがいがある」「CPUボードを使用してLEDを光らせたりして目に見えることで達成感がある」「教材(CPUボード一式)を貸し出してくれた」など。

2 改善すべき点

- ・「話し方」(平均3.0)、「推薦度」(平均2.82)は、特に評価が悪いので改善したい。
- ・講義の「難易度」としては、やや難しいようである。
- ・記述式回答より、「C言語の知識によって、クラスを分けるべき」という意見を多数頂いた。すなわち、C言語の初心者には難しく、既習得者には講義前半部分が不要。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・講義の想定レベルについて

工学部出身者であれば、C言語に限らず何かしらのプログラミング言語の学修経験者であり、プログラミング言語習得にさほど時間を要しないと考えて、現状レベルの講義を設定したが、認識が異なっていたようだ。次年度以降は、「C言語の基礎(C言語の基本的な文法と使い方)」、「組込みC言語(I/Oアクセス等周辺機器の制御)」など2コースに分割することを検討する必要があると認識した。また、組込みシステムの概要の講義を望む自由記述もあり、村越が担当する組込みシステム関連の講義を見直すことも検討したい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： イノベーション戦略特論

氏 名： 吉田 敏

1 良い評価を受けた点

- ・ 前回の復習を行う点
- ・ 学生同士のグループ議論において、学生の自発的、積極的な参加を促している点
- ・ 難しいイノベーションの話を噛み砕いて講義していた点
- ・ 学生の意見を聞き入れて、講義の仕方もフレキシブルなこと

2 改善すべき点

- ・ もう少しグループワークを減らし、座学の時間が多い方が良い。
- ・ 学生同士のグループ討議の時間がもう少しほしい。
- ・ 学生だけの抽象的な議論は、方向性を見失いやすい。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・ 前回の講義の復習は、出来るだけ丁寧に行っていく。
- ・ グループ議論では、個々のグループを出来るだけ回りながら、できるだけ全員の意見を引き出すようにする。
- ・ 抽象性の高い講義内容やグループ議論については、より分かりやすく、出来るだけ具体的な方向性を示していく。
- ・ 座学と学生同士のグループ議論の時間配分については、学生一人一人が異なった要望を持っているため、注意深く検討していくようにする。
- ・ 学生の要望をなるべく把握し、単純な要望の実現ではなく、教育上対応すべき方向性を検討していく。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・ 専攻内の学術分野間の違いが非常に大きいため、学内だけでなく、他大学の同分野の状況把握にも努めるべきであると考え始めている。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 設計工学

氏 名： 館野 寿丈

1 良い評価を受けた点

例年と同様に、各回に演習を設けている点

2 改善すべき点

受講の前提知識について十分に示されていなかった点がある。具体的には、統計に関する知識についてであり、昨年は、本授業の前に統計の補講を準備し、基本的な知識が不足している学生に受講を促すことができた。本年は、震災の影響もあり、補講が夏休みにずれ込んでおり、その連携がうまくいかなかった。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

評価の点数をみると専攻平均よりも全体的に低い、履修者は多い。すなわち授業内容としては、多くの学生が知りたい内容が多いと考える。しかしながら、実際にはある程度の基本知識が必要であり、特に後半についてこれない学生が発生してしまった。受講の前提知識についてシラバスにさらに明確に記述することにする。

また、グループワークを要求するコメントが多いが、これは4Qでの「設計工学・プロトタイピング工学演習」で多く実施する旨、初回の講義時に説明している。しかしながら、毎年このようなコメントが出るのは、まだ伝え方が不十分であると思われるので、何度も説明するなど、提示の方法を工夫したい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

調査は有益であるので、学生に負担のかからない範囲で続けると良いと思う。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： ものづくりアーキテクト概論

氏 名： 舘野 寿丈(取り纏め担当)

1 良い評価を受けた点

本講義は、創造技術専攻の専任教員10名ならびに客員教授3名によるオムニバス形式の講義である。学内はもちろん企業人も含めた学外講師による講義であり、さまざまな観点からものづくりに関して考えることができたことが良い評価につながっていると思われる。

2 改善すべき点

学生からのコメントに、授業構成の流れや体系化、レポートに対しての統一感がほしいという内容の意見がみられた。

授業時間について、曜日ごとに5限と6限とを変えるという試みをしたが、不満を持つ学生がいた。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

多くの教員の様々な視点からのトピックを知ることができた点に対して、高い評価を得ているので、学外講師の登用を含め、今後もこの形式を継続するのが良いと思われる。

全体に流れ・統一感を持たせる工夫について、教員間で議論したい。

授業時間についても、再考したい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

授業の見直し・改善に有効である。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 創造技術特別演習 I

氏 名： 越水 重臣

1 良い評価を受けた点

- ・ 回答してくれた学生はおおむね意欲的にプロジェクトに取り組んでいるようである。チームによっても差はあると思うが、本授業の良かった点として、以下の意見が聞かれた。
- チームワーク、コラボレーションの進め方を学べた。
- 技術の未来予測の方法を学べた。

2 改善すべき点

- ・ アンケートの結果によれば、「チーム決定方法」「演習環境」について不満が多いことがわかる。
- ・ 自由記述によれば、iPBLについての「システムが不安定」、「エラーがかなり多く出る」、「ソフトウェアがアップデートされていない」など、多くの不平不満が見受けられた。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・ アンケート項目のうち、「満足度」や「推薦度」については、ポジティブな意見とネガティブな意見の両極端に分かれている。今回の調査では回答数が7名と少ないため全体像をつかめたとは言いきれない。今後、多くの学生の回答を得て、全体像を把握したい。
- ・ iPBLについては、対策を講じやすいので、できるところから改善を進めていきたい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・ 創造技術特別演習(PBL)は必修科目であるため、今年度は48名の学生が履修していることになっているが、この授業評価アンケートに協力してくれた学生数は、わずかに7名であり、回収率にして14.6%と低調である。まずは、この回答数を増やさないことには、適正な授業評価がなされているとは言えない。Webによるアンケート回答方式にしてから、回収率の低下が顕著になったように思う。主担当教員から学生に対して、アンケート協力の呼びかけを強力に行うべきであろう。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 産業技術特別講義 I

氏 名： 高橋 悦夫

1 良い評価を受けた点

前年度の比較の観点から0.1以上向上した項目を見ますと「適切評価」、「教科書等」、「話し方」、「教員熱意」、「難易度」が挙げられます。また、コメントからは、「演習」、「新しいことが学べ新鮮」、「話が聞きやすかった」また「テキストの無償提供」、「アプリケーションを個人PCに導入」、「全く知らなかったBPMについて学べて良かった」、「大変満足」などが挙げられます。

2 改善すべき点

前年度から0.1以上後退したものは「出席率」、「目的明確」、「興味」、「推薦度」でした。コメントからは、「講義展開」、「BPMNの試験項目をもっと多く」、「To-Beのモデル作成」、「グループワークを多く」、「初回、最終回は学校の教授で」、「英語専用名詞が多すぎる」、「読み上げのみで意味が無い」、「進行度のチェックが不足」、「シラバスとの不一致」、「教師、事務局、講師間の連携の不足」などが挙げられます。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

今回の大きく反省すべき点は「目的が明確でなかった」ではないかと考えます。これは授業の内容がOMG系(標準、即ちBusiness Process Managementに関する知識)とIBM系(ツールの使用に基づく演習、即ちBusiness Process Modelingの実務の習得)に極端に分かれ、一方に興味を持たれた方は他方に興味が湧かない、そのため進行に不満が生じるという結果に陥ったと推測します。また、受講生の状況を良く把握し、講義内容の選択にあたる必要があります。全体的な傾向から見ますと、一部のコメントで指摘されているような「汎用的な問題への取り組み不足」ではなくツールの使用方法などに特化し、Business Process Modelingの実務の紹介に徹した講義内容がより適しているように思われます。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

今回の受講生の評価、コメントは大変参考になります。このまま来年度の担当者に開示することが出来なければ、この傾向、問題点などをサマリーした情報が開講前(出来ればシラバス作成前)に講義のデザインにあたっての留意事項として受け継いでいただきますと、受講生と提供する側のギャップを埋めることが出来るのではないかと思います。FD活動は正にBusiness Process Managementの観点から見しても必要不可欠で重要度の高いものと思います。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： ネットワークシステム特別講義Ⅰ

氏 名： 加藤 由花

1 良い評価を受けた点

- ・特に高い評価、低い評価を受けた項目はなく、全体的にほぼ平均した値であった。

2 改善すべき点

- ・「学生参加」「質疑応答」「難易度」「満足度」「推薦度」はまだ改善できる余地がある。
- ・前年度と比較すると、「目的明確」「教員熱意」「推薦度」の値が下がっている。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・時間割の都合上2時間続きの講義となったが、2回に分けた方が良いというコメントがあった。前年度も同様のコメントがあり、演習等を取り入れてメリハリをつけるよう心がけたが、座学中心という講義の性質から対応は十分ではなかったようだ。カリキュラムの変更に伴い、次年度以降は週2回実施予定である。
- ・ユビキタスプラットフォーム論との一部内容重複を指摘された。コメントにあったように、別クォータに開講する等の工夫を行っていきたい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・記名アンケートの実施、アンケート実施時期の変更等、教員の皆さんから様々な意見を頂いている。今年度はアンケートのオンライン化を中心に本活動の見直しを行ってきたが、次年度以降、これらの項目についても検討を進めていければと思う。
- ・一方、同じアンケートを続けることによって、前年度との比較が可能になる等のメリットもあるので、この形式を続ける意味もあると思う。

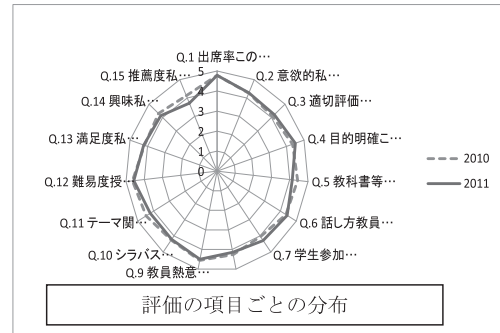
「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： プロジェクト管理特論Ⅱ

氏 名： 酒森 潔

1 良い評価を受けた点

評価ポイントの平均値は4.29で、ほとんどの項目が4以上と、高い評価を得ることができた。なかでも評価が高かった項目は、講義目的の明確さと教員熱意の項目である。また、学生参加を促しているかという項目は昨年より大きくポイントを上げた。コメントからは、適度なグループワーク、配布資料の記述内容、および講義中の経験談の話が良い評価を受けた。

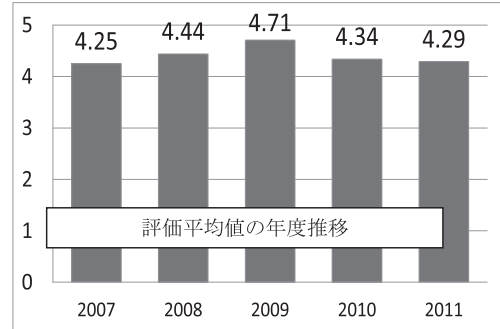


2 改善すべき点

本年度評価では、講義を推薦するかという項目が3.71と唯一4ポイントを割り、かつ昨年より大きくポイントを落とした。

評価平均値の年度推移をみると、2009年から3年連続でポイントが下降している。講義を2コマ連続にしてサテライト対応にしたことが原因の一つと考えられる。

コメントからは、講義のパワーポイントの文字の大きさの改善や、参考資料の提示を求めているものがあつた。



3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、改善すべき評価には改善策）

ボリュームのある講義を2コマ連続でおこなうのは学生にとっても教員にとっても負荷が高いと思われる。来年度のカリキュラムでは週2回の講義とする。

講義資料に関しては毎年改良してきているが、スライド表示の画面はもう少し見やすくする必要があると思われる。これは広範囲の解説資料と表示用のスライドを同一の資料で行っていることが原因と考えられるので、次回から配付用資料と表示資料を分けて作成していきたい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD活動に対する意見

昨年も提案しましたが、授業評価は学生の記名式にしたらどうでしょうか。学生が誤解したままコメントを書いている例も多く、その場合は個別に返事を出すことができます。責任の無い意見も減らすことにもつながります。また、匿名が必要な意見は、FDアンケートとは別に無記名の目安箱的なものをつくれば対応できます。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： オブジェクト指向開発特論

氏 名： 秋口 忠三

1 良い評価を受けた点

- ・課題レポートを採点しコメント付で返却される。課題レポートは理解促進に効果がある。
- ・講師が作成した教材で理解と復習ができ、参考図書で捕捉しなくてもよい。
- ・演習では学んだ基本的なことを発展させることができ、全体的によくまとまった講義。
- ・事例が多くあった。コードを読む機会が多かった。
- ・実際の開発と設計の時にとても役に立つ。

2 改善すべき点

- ・内容を詰め込みすぎ。デザインパターンを話を充実してほしい。
- ・デザインパターンの説明にメリハリをつけてほしい。
- ・Ashを授業で使用するのなら、積極的に使用することを前提に講義をしたほうがよい。
- ・演習の回数を増やしてほしい。
- ・Javaや統合開発環境の前提スキルを補う内容がほしい。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・課題レポートの採点、コメント、解説は、理解促進に大きな効果があるので、今後も継続したい。
- ・実践的な事例を多く取り入れた教材は、効果的な学習に役に立っているので、引き続き改善を図っていきたい。
- ・デザインパターンに関する関心が高まっている。デザインパターンに対しては、内容が多く講義時間内ですべて説明するのは難しいので、重要なものを厳選し詳しく説明するように工夫したい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

特になし。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： ソフトウェア開発特論 I

氏 名： 小山 裕司

1 良い評価を受けた点

今年度の評価平均(4.09)は昨年度の評価平均(4.38)よりはだいぶ下がった。相対的には、出席率、話し方、学生参加、テーマ関心が4.2以上と高い評価を受けた。これらはskype等を活用することで、学生の授業参加及び理解度の向上をはかったり、新しい話題を積極的に取り上げたりしたことが効果を上げていると思われる。

2 改善すべき点

「シラバス」の評価は3.79という評価であり、1Qの科目同様、評価が低い(今年度、大幅に修正したにもかかわらず)。「目的明確」、「推薦度」が4未満であった。

また、課題を最初に示す、課題の回数を増やす、グループワークを設定する、試験の回答提示、skypeの効果的活用等に関する改善提案をいただいた。

自由回答から、ほかの科目の評価が混ざっているみたい。

3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、改善すべき評価には改善策）

試験回数、グループワーク等の改善提案は、実現できるように授業の構成を調整したい。skypeによる学生参加は、講義内容の理解の面でも効果的であるが、発言する学生が限定的であるため、さらに仕組みを工夫したいところではあるが難しい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・ 記名式への移行
- ・ 学生からの個々のコメントへの回答機会の設定
- ・ 現在は回答者==履修者であるが、出席不足等の履修の意思が無い学生は除外いただき、回答率にも反映してほしい。
- ・ 授業評価の調査時期の調整

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： データベースシステム特論

氏 名： 嶋田 茂

1 良い評価を受けた点

- ・ 演習内容が実際の実務に則しており、日頃の業務上問題となるような項目を解決する技術を身に付けることができた点。
- ・ 講義と演習とを融合させることにより、課題の問題意識が明確になった状況下で演習を行うことができるので、より理解が深まった点。
- ・ 従来からのオーソドックスなDBMSだけでなく、最新技術、特にNoSQLの学習ができ、新規なDBニーズに対応した学習ができた点

2 改善すべき点

- ・ DBMS初心者にとっては、演習内容がやや多く、演習時間内に終了しない場合が発生。
- ・ 提示した演習の手順通りに行っても、一部動作が不安定な場合が発生し、その原因の特定と対策に手間取り、演習のロスタイムが発生。
- ・ 今回の受講生の数が35名にも及び、演習室(255室)のレイアウトでは、狭すぎる状況が発生。特に演習用の机に、受講生持ち込みのPCが置けないグループがあった。

3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・ 演習がより効率的に行われるように、演習内容をみなおし、項目を洗練させる。一方、評価の高かった最新のDBMS技術に関する項目はより充実させる。
- ・ 演習途中でのサーバ実行上のトラブルが発生しないように、演習実行項目の再現性を確認して、サーバ動作の安定性の対策を行う。
- ・ 演習室の許容量を高めるため、床に放置されている不要機器類を整理するとともに、作業用の机で大きな面積を占めるデスクトップPCを廃止するなどの対策を行う。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・ アンケート回収率は良好(80%以上)で、本講義に対する学生の取り組みの熱意が感じられた。またこの高回収率の理由として、学生が演習でPCを使っている時間が長いので、PCからのアンケートに答えやすかったのではないかと推測される。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 情報システム特論Ⅱ

氏 名： 戸沢 義夫

1 良い評価を受けた点

- 今回初めて、課題にしたレポートを授業でコメントするスタイルを取り入れたが、良いと評価された。講義を少しでも良くしようとする努力が学生に通じたと思われる。
- IT戦略について学ぶことができた。
- 全体的に、大きな不満は無かったようだ。

2 改善すべき点

- シラバスの内容
- 課題などについてのコミュニケーション

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- シラバスと実際の講義に乖離があったので、シラバスを改善したい。
- LMSの使い方について、学生ときちんとコミュニケーションしておきたい。
- 講義の目的、教員が学生に何を学んでもらいたいのかについて、もう少し丁寧に説明するように心掛けたい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

特になし

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： ユビキタスプラットフォーム論

氏 名： 成田 雅彦

1 良い評価を受けた点

- ・前年度と比較し、「教科書等」「満足度」「推薦度」の値が上がった。
- ・特に、「話し方」の値が大幅に上がった。

2 改善すべき点

- ・前年度と比較し、「シラバス」の値が下がった。
- ・「目的明確」「話し方」はまだ改善できる余地がある。(平均との差が0.2以上あるもののみ)
- ・「難易度」はやや難しい。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・シラバスについては、一コマ内に収まるように講義を行うこととしたい。
- ・目的の明確化については、講義の第一回目に各種技術の位置付けを説明しているが、毎回、冒頭に簡単に概要を復習し、位置づけを説明することで対処する。
- ・話し方については声小さいとの指摘があるので、マイクの設定等の確認を冒頭に行うこととする。
- ・難易度については、グループ作業の期間が短いと指摘があったので、講義時間中にもグループ活動できる時間を取る。Linuxのインストールの難しさの指摘もあったが、インストールができていない学生に対してはオフィスアワーなどに質問に来るように指導する。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・評価値を付けた理由が分かると、より速やかに改善できると思われる。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： IT特論

氏 名： 南波 幸雄

1 良い評価を受けた点

興味と満足度は、比較的良い評価であった。これはお忙しい中、夜間にも関わらず、当校の授業にご登壇いただいたゲスト講師の皆様のお陰と感謝している。

2 改善すべき点

私が担当する最後の講義のため特にない。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

今年の講義は、特に最新の話題を話してもらえるように、ゲスト講師を選定しお願いした。その時の学生のレベルは、IT系の中堅社員（5年から10年の業務経験）のレベルを想定して、ご準備をお願いした。

しかしアンケート結果をみると、内容が難しいと感じた学生が多く、想定レベルと異なっていたようである。

年ごとに学生の興味が異なってきているようで、このあたりを満足させるのは難しい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

学生アンケートも6年目になる。授業評価は重要であるが、単なる学生の人気投票になっては本来の意味が失われる。

今後、学生に記名で書いてもらい、それに対しての教員の反論などができるようにすることも検討していただきたい。成績評価も含めた授業評価にできるように、調査時期を遅らすことも必要と考える。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 情報アーキテクチャ特論Ⅱ

氏 名： 南波 幸雄

1 良い評価を受けた点

全般に比較的良い評価を受けている。その中で、テーマ関心や推薦度などが高評価であった。これらは、用意した教科書に沿って事業を進め、学生参加や質疑応答に時間を割いた結果と受け止めている。

難易度に関しては、若干難しかったと感じている学生がいる。この点は、シラバスにも記載しているが、この授業は実務体験がないとついてくるのは難しいので仕方がない。

2 改善すべき点

本年が最後の講義のため特にない。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

本講義は、発注側の情報システム部門に所属する人が、最低限持っていてほしい知識、コンピテンシーを教えているつもりである。これは単なる知識でなく、状況に応じて持っている知識を活用して、考え、決断する能力を養成したいという事になる。

そのためにも、考える方法をどのように身につけさせるかが課題である。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

学生アンケートも6年目になる。授業評価は重要であるが、単なる学生の人気投票になっては本来の意味が失われる。

今後、学生に記名で書いてもらい、それに対しての教員の反論などができるようにすることも検討していただきたい。成績評価も含めた授業評価にできるように、調査時期を遅らすことも必要と考える。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 情報ビジネス特別講義Ⅱ

氏 名： 小酒井 正和

1 良い評価を受けた点

- ・ 安易な用語を積極的に用いるようにしたので、話し方については以前よりも評価された。
- ・ 課題を作り替えて、演習において無理な作業負荷をかけないようにしたので、難易度の適切さについては評価された。
- ・ 授業内容はシラバス通りで適切であったと評価された。

2 改善すべき点

- ・ 課題提出のタイミングなどを考えたため、早めに資料提供できなかったのも、予習できなかった点は改善すべきである。
- ・ 受講者の仕事に対する応用可能性をうまく提示するなど、発展性のある話を行えなかったため、学習者の興味をうまく引き出せなかった。
- ・ IT部門(情報システム部門)のあるべき姿、あるいはCIOのあるべき姿についての知見について授業内に入れるべきであった。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・ 学習者からの要望からすると、さらに多くの問題を入れることで改善する。
- ・ 資料を事前に配付できるようにしておくことで対処する。
- ・ 時事問題、事例などを多く取り入れることにする。
- ・ 実習課題とか計算問題を多く入れる。
- ・ IT部門(情報システム部門)のあるべき姿、あるいはCIOのあるべき姿についての知見を示すように授業内容を若干変更する。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・ 授業期間が終わってから、近いうちにアクションプランの提出をさせてもらえるようにしてほしい。非常勤なので、終わってしまうと、忘れてしまうところもあるような気がする。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 情報システム開発特別講義

氏 名： 児玉 公信

1 良い評価を受けた点

「学生参加」がポイントが上がったが、これはもともと意識して授業を組み立てているから。ただし、ポイントを下げた分についても有意差なしと思う。

2 改善すべき点

「シラバス」のポイントが下がった理由は分からない。基本的に、昨年と変えていないので。遅刻が多かったので、ビジネスゲームに参加できないことがあったためだろうか。途中からでも参加できるような工夫を考えたい。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

今年度のグループ討議の課題が大きすぎた。これは自由記述のコメントでも指摘されたとおり。条件を設定するなどして、課題の大きさを小さくする。

授業の目的、手法の目的、作業の目的は明確に示しているつもりだが、繰り返し句提示することにする。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

特になし。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： eビジネス論

氏 名： 新藤 哲雄

1 良い評価を受けた点

前年度と比べて、テーマ関心、難易度が上がっている。IT産業全体の中で、eビジネスで求められる経営やマーケティングの重要性について理解が得られたことと思う。また、学生のレポートの講評等を通じて、ポイントや典型的な誤りを解説したことが学生の理解を助けたと考える。

2 改善すべき点

前年度と比べて、出席率、学生参加、シラバス、話し方、教科書等(講義資料)、興味、推薦度など色々下がっている。自分では講義資料、話し方は基本的には前年度と同じだと思っているが、学生の捉え方が今年は異なることはそれなりに受け止めている。

全般的に低下した背景としては、(1)平成23年度は「授業参加態度の類は出席点だと判断される恐れがあるので避けることが望ましい」との標準シラバスの注意事項に沿って、成績評価項目から授業参加を除外したことの影響、(2)学生が自主的に2-4人のチーム作りをするように指示したが、チームづくりができなかった学生3名により編成された1チームの中で意思疎通が十分でずいいたこと(一部の学生から意思疎通の相談を受けたので、「レポートを提出後でも、チーム内部で意見調整して改訂版を再提出しても良い」と対応したが再提出はなかった)ことの影響が考えられる。

3 今後のアクションプラン(良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策)

事例や理論の本質的な点をわかりやすく具体的に説明するように努めることは、今後も継続してゆきたい。

eビジネス論の科目の特性に鑑み、22年度までのように授業参加(出席点ではない、内容のある発言、質問など)を成績評価項目に復活し、事例研究などにおいて予習と授業の学生参加を一層促すことを検討したい。

講義資料は、従来のPowerPoint資料の一部又は全部を文章にまとめてテキストを作成することを検討する。これにより、学生の授業内容の理解を助けるとともに、事例研究の学びかたのヒントも提供することにした。

eビジネス論におけるマーケティング・コミュニケーションなどに関連付けて、チームの組織運営における意思疎通の重要性を指摘することにした。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD活動に対する意見

毎回の講義で出席票を配布し、学生が記載するコメントや別途受け取る電子メール(秋葉原の学生)は読んでいるので、向学心のある良質の意見とそうでない意見を峻別して、教育内容の充実を目指すこととした。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 情報システム学特別演習Ⅰ

氏 名： 戸沢 義夫(記)

1 良い評価を受けた点

- 現状で十分である
- お客さんがいることで客観的に評価していただける
- 対外的活動を積極的に実施し、外部識者と意見交換をおこなっている
- 定期的に先生方や修了生の方にご意見頂けた
- 指導教員から直接指導を受けられる
- チームメンバや先生とのコミュニケーション
- 企画・戦略立案についての完璧な授業
- 討議の時間を十分に取れた
- 学生主導で活動したため、いろいろチャレンジができた
- 実務に活かすことができる授業内容、授業方法

2 改善すべき点

- iPBLが使いにくい。
- 進捗管理ツールの改善は喫緊の課題
- PBL間連携を活発にする
- 開発系の研究室には開発用のマシンが必要
- 担当教員の出席が月1回程度のPBLが複数ある。
- 教員との打ち合わせがもっとあっても良い

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- PBLに対する満足度は高いので、この状態が維持されるようにする。
- iPBLの後継システムを検討する
- PBL検討会でPBL全体について教員全員でディスカッションする
- PBL委員会で必要なアクションをとる

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD活動に対する意見

- 回答してくれた学生が40名と8割であり、予想以上に多かったので、良かったと思う。
- どのPBLであるかは特定できないが、PBL全体の傾向は把握できた。
- PBL研究会の合宿で、授業評価のコメントが議論の材料として使うことができ良かった。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： インダストリアル・デザイン特別演習Ⅱ

氏 名： 福田 哲夫

1 良い評価を受けた点

- ・ 観察の大切さから、気付かなかったことの発見や理解ができた、見方が変わった等。
- ・ 基本テーマに基づき平面から塊材までいろいろな材料に触れられたこと。
- ・ 講評では、提出物に対するフィードバックがあり何が必要か理解できたこと。
- ・ 他の学生との視点の違いや取り組み方、そして結論にいたる経過が見てとれたこと。
- ・ 毎回の課題提出物は大変であったが、自分を追い込み、自分と真剣に向き合えたこと。

2 改善すべき点

- ・ 課題提出物に関する記述や案内が曖昧。
- ・ 課題の量が多く、内容が不明瞭。
- ・ 具体的な見本の作成、手順のデモンストレーションなどが見たい。
- ・ 内容について初心者に合わせて補足がほしい。

等々デザイン未経験者への対応。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・ デザインには自由な発想と展開作業が必要である。デザインの経験者には好評でも、デザインの未経験者には条件を求めてくる学生がいる。シラバスへの記述内容もあるが、講義内にて基本的理解を促す方法について検討したい。
- ・ 具体的には、デザインへの理解を促す教材の作成、手順のデモンストレーションなどについて検討したい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・ 講義内容への改善の糸口として有効と考えている。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 材料基礎特論

氏 名： 管野 善則

1 良い評価を受けた点

原理・原則を自然科学の法則に則り、理解し、物の本質を丁寧に説明する授業を展開した点。

2 改善すべき点

文系の人向けの授業ではないとの指摘あり。これは難しい選択です。

工業系のプロフェッショナルな学生からは、あまりに大衆向けの授業が多く、大学教養課程程度の授業では？このような批判を寄せる学生も実際におります。彼らを満足させるためには、他大学の大学院レベルの話を展開しないと、逆に批判が出ます。

その矛盾点を解決すべく努力する必要があります。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

学生に質問を重ね、自らの頭で考えるクセを身につけさせます。言われた事をロボットのように何も考えずに遣るのではなく。これからも自然科学の知識を付けさせる教育は展開します。逆に、文系から進学した学生向けの手助けになる説明も付け加える授業も取り入れてみる。プロの技術者から批判が出ない程度に抑えながら。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

このような取り組みは、サンプリングの仕方によっては非常に有意義でしょう。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 価値デザイン特論

氏 名： 國澤 好衛

1 良い評価を受けた点

講義に力点を置き、グループワークは短時間で密度高く実施する。受講者がひとりひとりで考えレポートを書きながら考えを深めていくスタイル。

デザインをメタレベルから考察し、知的な記号操作として捉えた内容。

今年度から始めた毎回の授業でのレポートについて、そのフィードバックを次の講義の際に実施したこと。

理論だけでなく、デザインにつながるイメージ操作を体験できたこと。

2 改善すべき点

デザインをメタレベルから考察し、知的な記号操作として捉えた内容については、大学院らしい内容との評価も受けているが、逆に、俯瞰的、抽象的、概念的であり、理解することが難しいとの指摘を受けた。

毎回レポートの課題が必ずしもその回の授業内容とあっていなかった点。

シラバスの内容とのギャップについての指摘もあった。

3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、悪い評価には改善策）

グループワークによるケーススタディは、今年度も時間を増やしてほしいとの要望があることから、講義とのバランスを見直し、実践的理解をより深められるよう改善したい。

今年度から始めた毎回レポートは、次の講義でのレポートのフィードバックと併せて、学習の理解度を教員学生双方が同時に確認できる意味で効果的だった。今後もこの取り組みを進めるとともに、デザインについての意見交換のきっかけとしていきたい。

また、授業の際に配布する資料、使用する事例、映像、画像などについては、引き続き最新のものとするよう更新していきたい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

--

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： コミュニケーションデザイン特論

氏 名： 小山 登

1 良い評価を受けた点

- ・双方向コミュニケーションで授業をしており、親身になって授業をしていた点が良い。学生も大変意欲的に取り組んでいた。
- ・講義で学んだ内容をグループワークで実際に使ってみることができ、実践的でとても理解し易かった。また、グループワークに入る前に、課題内容の説明を行いテーマ探しのための指示をしていた点や、発表の準備時間も授業内で多めに取っていたことと発表時間が十分取れていた点も良かった。加えて、課外授業の時間が取れたこともリサーチの質の向上に寄与できた。
- ・コミュニケーションを考える上で、色覚障害をシミュレーション(体感)できる特殊メガネを利用した授業等有意義であった。
- ・ユーザーインターフェイスの具体例が多く、分かりやすい講義であった。
- ・講義レポートの中の質問事項欄に記入しておくことと次回の講義時に答えてくれるので、ストレスが無く良かった。

2 改善すべき評価を受けた点

- ・グループワークに割く時間を増やして欲しい。
- ・グループワークのプレゼン参考のため、前年のプレゼン内容が見れると良い。
また、プレゼン後のフィードバックにもう少し時間を割いて欲しい。
- ・フィールドワークがもっとあってもいいのではないかな。

3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・講義内容に大変興味を持ち、意欲的に受講してくれた学生が多く何事にもポジティブに受け止めてくれていた。今後も、企業の生の情報や体験内容、具体的な事例などを豊富に取り入れ、より良い授業にしていきたい。
- ・好評価で効果的な実務ケーススタディ(グループワーク)については、時間の配分やフィールドワークなど増やすことも考えたい。
- ・好評な講義レポートを継続していきたい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・学生による授業評価は大変に重要であると認識しており、自分の講義を客観的に見る指標として今後も活用していく。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： グローバルコミュニケーション特論

氏 名： 橋本 洋志(取りまとめ担当)

1 良い評価を受けた点

本講義は、創造技術専攻の専任教員12人と認定登録講師1人により、A：論理的コミュニケーション、B：感覚的・文化的コミュニケーション、C：企業活動コミュニケーション の3分野をオムニバス形式で担当する講義である。英語によるディスカッション、MSプロジェクトなど、多岐にわたる分野を知ることができたことに対して良い評価を得た。

2 改善すべき点

シラバスから、本講義の方針、内容をきちんと事前に把握できなかったという意見があった。

内容から、コミュニケーションとは関連しないと思われる講義があると感じられた。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

改善すべき点に対して、シラバスの内容を吟味して、上記のような誤解を受けないような授業設計にする工夫を、教員間で議論したい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

授業の見直し・改善に有効である。ただし、多数の意見なのか、単に一学生の意見であり、多数学生は満足しているのか、この点を定量的に明示できるような工夫がほしい。でないと、たまたま一学生の主観的な批判的意見に対応するという危険性が生じる。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： システムモデリング特論

氏 名： 村越 英樹

1 良い評価を受けた点

- ・「出席率」「意欲的」「教員熱意」については比較的良い評価を受けた。
- ・「シラバス」の項目が昨年度より良い評価を得ている。本年度、新しい様式でシラバスを詳細に記述したのが評価されたものと思われる。
- ・記述回答からは、教科書以外の参考書を講義時間中に回覧したこと、クオータを通じて同じメンバでグループワークをしたこと、が挙げられた。

2 改善すべき点

- ・「話し方」は昨年度より悪い評価を受けた。
- ・「適切評価」「目的明瞭」「教科書等」「学生参加」「質疑応答」「教員熱意」「シラバス」「テーマ関心」「難易度」「満足度」「興味」「推薦度」は、改善すべき点です。
- ・記述回答からは、モデリング経験の少ない受講者が多いため、グループ演習中心の講義だが、「レクチャーの時間を多くする」「個人演習を実施する」などの意見が寄せられた。また、演習課題が多いという意見があった。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・グループ演習中心の講義内容であるが、ここ数年の受講生の傾向から、演習内容が少々難しいと判断する。レクチャーの時間を増やし、個人演習を実施するなどして、グループ演習を円滑に行えるよう配慮したい。
- ・15回の講義時間中3回のプレゼン(グループ演習の成果発表)は多いようだ。分析モデル作成に重きを置き、プレゼンの回数を減らす方向で検討する。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・今回はアンケート回答者が少ないように感じる。最後まで講義に参加していた学生は16名。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 技術経営特別演習

氏 名： 吉田 敏・陳 俊甫

1 良い評価を受けた点

- ・毎回グループ議論のメンバーが変わっていき、多くの同級生と意見を交換できること。
- ・文献によって実社会のケーススタディを行い、多くの内容を得ることが出来た。
- ・グループワークに加え、教員と学生との議論は多くのことを理解できた。

2 改善すべき点

- ・もっと実社会に即した演習内容をやりたかった。
- ・経済系の予備知識が必要な点を、事前に示してほしい。
- ・対象とする産業分野としてコンビニエンス産業などを取り上げたが、技術オリエンテッドな製造業を取り上げてほしい。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・グループ議論を中心に構成したが、そのグループのメンバーは、学生の意見を聞きながら的確に出来るだけ変化させていくことを検討していく。
- ・ケーススタディを積極的に取り入れ、社会で起こっていることを直接題材とすることによって学生の理解度を上げるようにしていく。
- ・取り上げる対象分野は、製造業を含め、広く検討していくことにより、その年度で最も効果的と考えられる分野を積極的に構成していく。
- ・事前に必要知識をわかりやすく明示する。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 創造設計特論

氏 名： 越水 重臣

1 良い評価を受けた点

調査票の設問に対し、以下の項目で良い評価を受けた。

・「目的明確」「話し方」「学生参加」「質疑応答」「教員熱意」

毎回の講義でテーマを設定し、目的を明確にしたことが高評価につながったようだ。

また、自由回答によれば、グループワークと個人レポートの組み合わせが高評価に結び付いていることがうかがえる。

2 改善すべき点

講義の後半は演習を中心にしながら発想技法を学ぶという教授法をとったが、「多少間延びた感がある」とか「演習時間を減らしてほしい」という声が自由回答の記述にあった。ケース解説を増やすなどして、講義と演習時間のバランスを取りたいと思う。グループワークについては、おおむね好評なので続けていきたいと思う。

3 今後のアクションプラン（良い評価をさらに発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・本学ではグループワークで演習を行うことが多いが、これまでの講義ではいつも同じメンバーでグループになることについての不平不満が出されていた。そこで、本講義では「ハーマンモデル」という人のタイプ分類法に従い、グループ分けを行ってみたが、これが予想外に好評であった。来年度もこの方法を採用してみたい。
- ・昨年度のアナケート結果に、ツール(ソフトウェア)を導入してほしいとの要望があった。今年度に入り、新たにTRIZソフトを導入し、それを使った教材開発と演習を行ったことが良い評価につながった。ソフトウェアを使ったPC作業とグループワークの融合については学生の指摘の通り、自分も問題を感じているので、さらによりよい方法を考えたい。
- ・授業の推薦度、満足度、興味について、前年度より点数が下がっているため、さらなる改善を行いたい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

授業の見直し・改善に有効である。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： プロトタイピング工学特論

氏 名： 舘野 寿丈

1 良い評価を受けた点

教科書等の評価が良かった。CADソフトの変更に伴って、資料を一新し、CADの操作資料を詳細に作成したのが理由と考えられる。

2 改善すべき点

適切評価の値が大きく下がったが、昨年までは出席の代わりに講義毎回のレポート提出を義務付けていたのに対し、今年度は約半分に減らしたため、出席の評価がされていないように感じた部分があったと思われる。

学生参加の評点が例年のごとく低い、個人ベースの作業が中心になっているためと考えられる。CADのスキルに関しては個人差が大きく、共同作業は難しいので、この点はいたしかたないとする。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

学生参加の意識を高めるため、個人作品の品評会などを取り入れることを考えたい。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

授業改善のためのフィードバックに役立つので、学生の負担にならない程度に継続するとよいと考える。ただし、学生による評価が教員評価につながらないよう注意する必要がある。

「学生による授業評価」調査結果に対するアクションプラン

講義名： 創造技術特別演習Ⅱ

氏 名： 越水 重臣

1 良い評価を受けた点

- ・ 回答してくれた学生はおおむね意欲的にプロジェクトに取り組んでいるようである。チームによっても差はあると思うが、本授業の良かった点として、教員とのコミュニケーションに関する記述が多く見られた。例えば、「教員とフラットに会話できる環境が良かった」とか「担当教員とだけでなく、副担当教員からもコメントをいただける点が良い」などの声が聞けた。

2 改善すべき点

- ・ アンケートの結果によれば、「テーマ設定」や「演習環境」について不満が多いことがわかる。
- ・ 自由記述にしても、演習環境に関する問題点が書かれている。すなわち、自由に使える実験スペースがないことへの不満が散見される。
- ・ また、チームのメンバーにより積極的に取り組む学生と消極的に取り組む学生の差が出てきており、そのあたりの不平不満がうかがえる自由記述もいくつか見られた。

3 今後のアクションプラン（良い評価を発展させる策、改善すべき評価には改善策）

- ・ アンケート項目のうち、「テーマ設定」については、ポジティブな意見とネガティブな意見の両極端に分かれている。専攻会議やPBL検討部会でも議論しているが、難しい課題である。さらに、議論を進めていきたい。
- ・ 情報アーキテクチャ専攻の評点(平均点)に比べ、創造技術専攻の評点(平均点)が低いことが気にかかる。情報アーキテクチャ専攻と情報交換をするなどしてその原因を探る必要がある。

4 「学生による授業評価」調査活動に対する意見、FD 活動に対する意見

- ・ 創造技術特別演習(PBL)の履修者42名のうち、約62%にあたる26名から回答が得られ、多くの学生の意見を聞けたことはよいことである。1Qに比べて、回答者数が大幅に増えてはいるものの、さらに回収率を上げる工夫が必要である。具体的には、主担当教員から学生に対して、アンケート協力の呼びかけを強力に行っていききたい。

FD レポート編集後記

今回のFDレポートの主な内容は、2011年8月2日(火)に実施した2011年度の第1回(通算第10回)のFDフォーラムが中心となります。今回は、昨年度に実施された本学情報アーキテクチャ専攻の認証評価について学内で活発な議論を致しました。特に、JABEE(日本技術者教育認定機構)から戴いた評価の内、W(weak)評価と一部C(concern)評価について、改善指示の内容の再確認と改善方策について、本音レベルで、いつになく活発なディスカッションが出来たフォーラムとなりました。

また、来年度に同じく認証評価が予定されている創造技術専攻にとっても、事前に何をしておくべきかなど、多くの課題も見いだせた大変有意義なフォーラムとなりました。

今後も、当委員会として、新しい取り組みに積極的に取り組んでまいりたいと思います。委員会の委員全員で力を合わせ、全教員の方々と共により良いFD活動を推進していきたいと考えています。

FD委員会委員長

小山 登

[執筆者]

産業技術大学院大学

石島	辰太郎	産業技術大学院大学学長
川田	誠一	産業技術大学院大学産業技術研究科長
加藤	由花	産業技術大学院大学産業技術研究科長補佐 FD委員会委員
酒森	潔	産業技術大学院大学教授
秋口	忠三	産業技術大学院大学教授
小山	裕司	産業技術大学院大学教授
嶋田	茂	産業技術大学院大学教授
瀬戸	洋一	産業技術大学院大学教授
戸沢	義夫	産業技術大学院大学教授
成田	雅彦	産業技術大学院大学教授
南波	幸雄	産業技術大学院大学教授
福田	哲夫	産業技術大学院大学教授
管野	善則	産業技術大学院大学教授
國澤	好衛	産業技術大学院大学教授
小山	登	産業技術大学院大学教授 FD委員会委員長
橋本	洋志	産業技術大学院大学教授
村越	英樹	産業技術大学院大学教授
吉田	敏	産業技術大学院大学教授
中鉢	欣秀	産業技術大学院大学准教授
越水	重臣	産業技術大学院大学准教授
舘野	寿丈	産業技術大学院大学准教授
清水	將吾	産業技術大学院大学助教
長尾	雄行	産業技術大学院大学助教
陳	俊甫	産業技術大学院大学助教
村田	桂太	産業技術大学院大学非常勤講師
小島	三弘	産業技術大学院大学非常勤講師
中島	丈夫	産業技術大学院大学非常勤講師
濱	久人	産業技術大学院大学非常勤講師
六川	浩明	産業技術大学院大学非常勤講師
小酒井	正和	産業技術大学院大学非常勤講師
児玉	公信	産業技術大学院大学非常勤講師
新藤	哲雄	産業技術大学院大学非常勤講師
高橋	悦夫	産業技術大学院大学非常勤講師
潮	総一郎	産業技術大学院大学非常勤講師

公立大学

産業技術大学院大学

AIIT F Dレポート第11号 2012年 2 月

発行：産業技術大学院大学 FD委員会

〒 140-0011 東京都品川区東大井 1-10-40

<http://aiit.ac.jp/>

再生紙を使用しています。

石油系溶剤を含まないインキを使用しています。